

## 『宇治拾遺物語』『猿神退治』考

廣 田 收

### (一) はじめに

鎌倉初期の説話集である『宇治拾遺物語』には、昔話と同じ話型<sup>type</sup>を共有する幾つかの説話が含まれている。すなわち早くから、昔話における「瘤取爺」「腰折雀」「藁しべ長者」「博徒婿入」などの話型をもつ説話の存在が知られている。これらについては、すでに少考を加えたことがある<sup>(1)</sup>が、この説話集には他にもうひとつ「猿神退治」の話型をもつ説話が組み込まれている。本稿は、その第一一九話「吾婦人止<sup>二</sup>生贄<sup>一</sup>事」について、話型と表現という方法的概念を用いることによって、とりわけ固有名詞に注目することによって説話をどのように読み解けるか、いささかの考察を試みたい。

その本文は次のようである。いささか長いものであるが、引用しておきたい。

今は昔、山陽道美作国に中山、<sup>①</sup>高野と申神おはします。高野はくちなわ、中山は猿丸にてなんおはする。<sup>②</sup>その神、年ごとの祭に、かならず生贄を奉る。人の女のかたちよく、髪長く、色白く、身なりおかしげに、姿らうたげなるをぞ、えらびもとめて奉りける。昔より今にいたるまで、その祭おこたり侍らず。それに、ある人の女、

生贄にさしあてられにけり。親ども泣きかなしむ事限なし。人の親子となる事は、前の世の契なりければ、あやしきをだにも、おろかにやは思ふ。まして、よろづにめでたければ、身にもまさりておろかならず思へども、さりとて、のがるべからねば、歎きながら月日を過す程に、やうやう命つまるを、親子と逢見ん事、いまいくばくならずと思ふにつけて、日をかぞへて、明暮はたゞねをのみ泣く。

かゝる程に、あづまの人の、狩といふことをのみ役として、猪のしといふ物の、腹立しかりたるは、いとおそろしき物なり。それをだに何とも思たらず、心にまかせて、殺し取り食ふ事を役とするものの、いみじう身の力強く、心猛う、むくつけき荒武者の、をのづから出で来て、そのわたりにたちめぐる程に、この女の父母のもとに来にけり。

物語りするつるでに、女の父のいふやう、「をのれが女のだゞ独侍をなん、かうかうの生贄にさしあてられ侍れば、思くらし歎きあかしてなん、月日を過し侍る。世にはかゝる事も侍けり。前の世にいかなる罪をつくりて、この国に生まれて、かゝる目を見侍るらん。かの女ごも、「心にもあらず、あさましき死をし侍りなんずるかな」と申、いとあはれにかなしう侍る也。さるは、をのれが女とも申さじ、いみじう美しげに侍なり」といへば、あづまの人、「さてその人は、今は死給ひなんずる人にこそはおはすなれ。<sup>⑤</sup>人は命にまさる事なし。身のためにこそ、神もおそろしけれ。このたびの生贄を出さずして、その女君を、みづからにあづけたべし。死給はんも同じ事にこそおはすれ。いかでか、たゞひとり持ち奉り給へらん御女を、目の前に生きながらなますにつくり、切ひろげさせては見給はん。ゆゑ、しかるべき事也。さる目見給はんも同じ事也。たゞ、その君を我にあづけ給へ」とねん比にいひければ、「げに、まへにゆゑ、しきさまにて死なんを見んよりは」とて取らせつ。

かくて、あづまの人、この女のもとに行て見れば、かたち、姿おかしげなり。愛敬めでたし。物思たる姿にて寄

り臥して手習をするに、涙の袖の上にかゝりて濡れたり。かゝる程に人のけはひのすれば、髪を顔にふりかくるを見れば、髪も濡れ、顔も涙にあらはれて、思入りたるさまなるに、人の来たれば、いとゞつ、ましげに思たるけはひして、すこしそばむきたる姿、まことにらうたげなり。凡、氣高く品品しうおかしげなる事、お中人の子といふべからず。あづま人、これを見るに、かなしき事、いはんかたなし。

されば、「いかにもいかに、我身なくはならばなれ。たゞこれにかはりなん」と思て、此女の父母にいふやう、「思かまふる事こそ侍れ。もし此君の御事によりて、ほろびなどし給はば、苦しとやおぼさるべき」と問へば、「このために、みづからはいたづらにもならばなれ、更に苦しからず。生きても、何にかはし侍らんずる。たゞおぼされんまゝに、いかにもいかにもし給へ」といらふれば、「さらば此御祭の御きよめするなり」とて四目引きめぐらして、「いかにもいかに、人な寄せ給そ。またこれにみづから待ると、な人にゆめゆめ知らせ給そ」といふ。さて日比こもりゐて、此女房とおもひ住む事、いみじ。

かゝる程に、年ごろ山につかひならはしたる犬の、いみじき中にかしこきをふたつえりて、それに生きたる猿丸をとらへて、明暮は、やくやくと食殺させてならはす。さらぬだに猿と犬とはかたきなるに、いとかうのみならはせば、猿を見てはおどりかゝりて、食ひ殺す事限なし。さて明暮は、いらなき太刀をみがき、刀をとき、剣をまうけつゝ、たゞこの女の君とことぐさにするやう、「あはれ、先の世にいかなる契をして、御命にかはりて、いたづらになり侍りなんとすらん。されど、御かはりと思へば、命は更に惜しからず。たゞ別聞えなんずと思ひ給ふるが、いと心細く、あはれなる」などいへば、女も「まことに、いかなる人のかくおはして、思ものし給にか」といひゞけられて、かなしうあはれなる事いみじ。

さて過行程に、<sup>⑦</sup>その祭の日になりて、宮司よりはじめ、よろづの人人こぞり集まりて、迎にのゝしり来て、あ

たらしき長櫃を、この女のゐたる所にさし入ていふやう、「例のやうに、これに入て、その生贄出されよ」といへば、このあづま人、「たゞ此たびの事は、みづからの申さんまゝにし給へ」とて、此櫃にみそかに入臥して、左右のそばに、この犬どもを取り入れていふやう、「をのれら、この日比いたはり飼ひつるかひありて、此たびの我が命にかはれ。をのれらよ」といひてかきなづれば、うちうめきて、脇にかひそひて、みな臥しぬ。又、日比とぎみがきつる太刀、刀、みな取り入れつ。さて櫃のふたをおほひて、布してゆひて、封つけて、我が女を入たるやうに思はせて、さし出したれば、杵、杵、鉢、鉢、鏡を振りあはせて、さきをひの、しりてもて参るさま、いといみじ。さて女、是を聞くに、「我にかはりて、この男の隠していぬるこそ、いとあはれなれと思ふに、又、無為にこと出で来ば、わが親たちいかにおはせん」と、かたがたに歎きぬたり。されども、父母のいふやうは、「身のためにこそ、神も仏も恐ろしけれ。死ぬる君の事なれば、今は恐ろしき事もなし。同じ事を、かくてをなくなりなん。今はほろびんも苦しからず」といひぬたり。

かくて、生贄を御社にもて参り、神主、祝詞いみじく申て、神の御前の戸を開けて、この長櫃をさし入て、戸をもとのやうに鎖して、それより外の方に宮司をはじめて、次々の司ども、次第にみな並びぬたり。さる程に、この櫃を、刀の先して みそかに穴をあけて、あづま人見ければ、まことにえもいはず大きな猿の、丈七八尺ばかりなる、顔と尻とは赤くして、むしり綿を着たるやうに、いらなく白きが、毛は生ひあがりたるさまにて、横座に寄り居たり。次々の猿ども、左右に二百斗なみゐて、さまざまに顔を赤くなし、眉を上げ、声声になきさけびの、しる。いと大なるまな板に、ながやかなる包丁刀を具して置たり。めぐりには酢、酒、塩入りたる瓶どもなめりと見ゆる、あまた置たり。

さてしばしばかりあるほどに、この横座に居たるをけ猿、寄り来て、長櫃の結び緒を解きて、ふたを開けんと

すれば、次々の猿ども、みな寄らんとする程に、此男、「犬ども食らへ。をのれ」といへば、二の犬、おどりで、中に大なる猿を食ひて、うち臥せてひきはりて、食殺さんとする程に、此男、髪を乱りて、櫃よりおどり出でて、氷のやうなる刀を抜きて、その猿をまな板の上にひき伏せて、首に刀をあてていふやう、「わおのれが人の命を断ち、そのし、むらを食などする物は、かくぞある。をのれら、うけ給はれ。たしかにしや首切て、犬に飼ひてん」といへば、顔を赤くなして、目をしば、きて、齒を真白に食ひ出して、目より血の泪を流して、まことにあさましき顔つきして、手をすりかなしめども、さらに許さずして、「をのれが、そこばくのおほくの年比、人の子どもを食ひ、人のたねを断つかはりに、しや頭切りて捨てん事、たゞ今にこそあめれ。をのれが身、さらば、我を殺せ。更に苦しからず」といひながら、さすがに首をばとみに切りやらず。

さる程に、この二の犬どもに追はれて、おほくの猿ども、みな木の上に逃のぼり、まどひさはぎ、さけびの、しるに、山も響きて地もかへりぬべし。かゝる程に、一人の神主に神つきていふやう、「今日より後、さらにさらにこの生贄をせじ。ながくとゞめてん。人を殺す事、懲りとも懲りぬ。命を断つこと、今よりながくし侍らじ。又、我をかくしつとて、この男とかくし、又、今日の生贄にあたりつる人のゆかりを、れうじわづらはすべからず。あやまりて、その人の子孫の末々にいたるまで、我、まもりとならん。たゞとくとく、此たびの我が命を乞ひ受けよ。いとかなし。我を助けよ」とのたまへば、<sup>⑮</sup>宮司、神主より初て、多くの人ども驚きをなして、みな社の内に入りて、さはぎあはてて手をすりて、「ことはりおのづからさぞ侍る。たゞ御神に許し給へ。御神もよくぞ仰らる、」といへるも、このあづま人、「さなすかされそ。人の命を断ち殺す物なれば、きやつにものわびしさ知らせんと思ふなり。我身こそあなれ、たゞ殺されん、苦しからず」といひて更に許さず。

かゝる程に、此猿の首は切りはなたれぬと見ゆれば、宮司も手まどひして、まことにすべきかたなければ、い<sup>⑰</sup>

みじき誓言どもをたてて、祈申て、「今より後はかゝる事更に更にすべからず」など神もいへば、「さらばよしよし、今より後はかゝる事なせそ」といひふくめて許しつ。さて、それより後は、すべて人を生贄にせずなりにけり。

さて、その男、家に帰て、いみじう男女あひ思て、年比の妻夫に成て過しけり。男はもとよりゆへありける人の末なりければ、くちおしからぬさまにて侍りけり。その後は、かの国に、猪、鹿をなん生贄にし侍りけるとぞ<sup>(2)</sup>。

本説話の概要は次のようである。以下、第一一九話を本説話と称することにする。

今は昔、山陽道美作国に中山、高野という神があつた。高野は「くちなわ」、中山は「猿丸」であつた。その神に「年ごとの祭」に「生贄」を奉つていた。生贄は美貌の娘を選んだ。今に至るまで、この祭は続いていた。娘が生贄に指名された親たちは泣き悲しんだ。親子は「前の世の契」によるもので、生贄から逃れることもできず、泣いてばかりいた。

そのころ「あづまの人」で、狩を「役」として、恐ろしい猪でさえ平気で「殺し取り食ふ事」を仕事とする「荒武者」が訪れてきた。娘の父がこの荒武者に、自分の娘が「生贄」に指名されたのは「前の世にいかなる罪をつく」つたせいなのか、なぜこんな目にあうのかと嘆き、娘もひどい死に方をするのはつらいと嘆いた。東人は「人は命にまさる事なし」といって、生贄を出す必要はない、娘を自分に預けよと申し出ると、親たちは無残な死に方をするよりはましだと考えて、娘を男に預けた。男は美しい娘を見て、娘の身代わりになろうと考えた。男は長年の間狩で使っていた中から賢い犬を選び、「生きたる猿丸」を捕まえては「食殺させ」るように訓練した。男は太刀、刀、剣を用意して、娘に彼の計画を話した。

祭の日になると、「官司」以下大勢の者が娘を迎えにやってきた。「長櫃」に生贄を入れる代わりに、男はこの櫃に太刀、刀を持ち、犬を連れてひそかに入り込み、犬に「我が命にかはれ」と命じた。かくて、娘を櫃に入れたように思わせて「杵、櫂、鈴、鏡」などを飾り、前驅を華やかにして神社に参った。

生贄を神社に入れると、「神主」は祝詞を奏上し、長櫃を置いて戸を鎖し、神社の外には「官司」をはじめ、次々の司たちが並んで座った。男が刀の先で櫃に穴を開けて見ると、「えもいはず大なる猿」が「横座」に座っていた。猿たちは左右に二百匹ばかり並んで座っていた。「大きなまな板」に、長い「包丁刀」や酢、酒、塩の入った瓶が沢山置かれていた。すると「横座に居たるをけ猿」が長櫃を開ようとすると、猿たちが寄ってきた。男は「犬ども食らへ」と命じると、「二の犬」が踊り出て「大なる猿」を食い殺そうとした。男は櫃から踊り出て刀を抜き、猿をまな板の上に押し伏せ、首に刀をあて「人の命」を断ち、その肉を食うものはこんな目に会うのだ、お前の首を切つて犬に食わせてやる、という、猿は「血の泪」を流した。猿は「我を殺せ」と開き直ったが、男は猿の首を簡単には切れなかった。

一方「二の犬」どもに追われて多くの猿は木の上に逃げ惑った。すると、「神主」に「神」が憑いていった。「今日より後、さらにさらにこの生贄をせじ。ながくとめてん。人を殺す事、懲りとも懲りぬ。命を断つこと、今よりながくし侍らじ。又、我をかくしつとて、この男とかくし、又、今日の生贄にあたりつる人のゆかりを、れうじわづらはすべからず。あやまりて、その人の子孫の末々にいたるまで、我、まもりとならん。たゞとくとく、此たびの我が命を乞ひ受けよ。いとかなし。我を助けよ」と誓約して、長く生贄を廃し末々まで護り神となるという言葉挙げをもって、命乞いをした。「官司、神主」以下、人々は驚き、「たゞ御神に許し給へ。御神もよくぞ仰らるゝ」と神を助けようとしたが、東人は、だまされないぞ、「人の命を断ち殺す物なれば、きやつにもののわびしき知らせんと思ふなり」

と許さなかつた。猿の首が切られたと思つた「官司」も「いみじき誓言どもをたて」「祈」り申して、「今より後はかゝる事更にくすべからず」と「神」もいふので、男は「今より後はかゝる事なせそ」と許した。

それから後は、人を「生贄」とすることはなくなつた。男は娘と夫婦になつた。男は「もとよりゆへある人の末」であつたので、「くちおしからぬさま」に暮らした。その後は、かの国では「猪、鹿」を「生贄」にしたという。

本説話を一読しただけでも、昔話「猿神退治」と同じ話型を共有していることはただちに想起されるところである。と同時に、表現において比較すれば、両者の間にはいちじるしく異同のあることも予想される。文体的に見たかぎりでも、音声言語によつて語られる昔話と異なることは、登場人物には会話のやりとりとともに内面の動きが記されており、本説話が説話というよりもまさに物語そのものであるという印象を受ける。

いったい本説話は今までどのように読まれてきたのか。本説話の研究史を概観すると、次のようである。

1 この話も今昔物語巻第二十六第七話と同話である。搜神記巻第十九・幽怪録・私聚百因縁集巻一の宝明童子事、巻二の堅陀羅貧女事、巻三の善見童子事など参照。「人は命にまさる事なし。身のためにこそ神も恐ろしけれ」の自覚はその神にとつて大脅威であろう。こうして時勢の進歩と歩調を共に出来ない信仰は批判の手で落伍者としてとりすてられて行く。この話の中にはその消息がよく窺われる。次に終りの「その後はかの国に猪鹿をなん生贄にし侍りけるとぞ」は、今昔物語には「其後、生贄立ル事無シテ国平力也ケリトナム、語り伝ヘタルトヤ」とある。本書の話の方が民俗学的に見て信仰経過の機微を語っている。人間の犠牲から動物の犠牲へ。これは多くの民族の信仰史上常にとられた経過だつたようだ。素戔鳴尊の八岐大蛇退治と同型の説話で、その悪習を廃止するきっかけを作る英雄が、他郷から来るといふモチーフは考察の好対象であらう。



2 『今昔物語集』卷二十六第七話と同話。この二段構成の説話では、特に次の三点に注目したい。(1)「身のためにこそ、神も仏も恐ろしけれ」という、神仏も人間に奉仕すべきであるとする、合理的な人間中心の思想。これまでの人身御供の信仰とは、百八十度の大転換であり、人権宣言ともいうべく、新しい時代のあけぼのを示す。(2) この説話には、素戔鳴尊の八岐大蛇退治と同じく、民の苦を救うに客人神(まれびとがみ)をもつてする発想がある。つまり、国の神によつて苦しめられる者を救うのは、因習と土俗にかたまる土地者ではなく、他国者—その国の神の支配を脱し、そのうえ、土着の者の持たない広い視野と新鮮な知識を備える他国者を必須条件とすること。(3) そのうえ、この東人は「故ありける人の末」すなわち貴種である、ということ。これがこの説話の重要条件になること。

要するに、この話は、『古事記』以来の説話形成の型を踏まえたもので、その系譜につながる典型的なものといえよう。なお、この類話としては『搜神記』卷十九、『私聚百因縁集』卷一、一一、三などの説話が指摘される。

(『日本古典文学全集』(4))

3 『今昔物語集』二六—七に、これと同話に当るものが収められている。『今昔物語集』二六—八にも、やはり同じような猿神退治について記されているが、本話と違って犬の活躍については触れられていない。この「猿神退治」の昔話は、日本の各地に伝えられており、永田典子氏の「猿神退治」の特性(『昔話 研究と資料』一一号)には、二五八例の類話があげられている。それらの資料によると、日本の東北部を中心に、「しっぺい太郎」などという犬のはたらきで、恐ろしい化物の猿を滅ぼしたように語られており、本話の記事とも一致するものといえよう。

(『新潮日本古典集成』(5))

4 昔話猿神退治の他、中国の白猿伝を介して酒典(呑)童子伝説とも関連を持つ。中山神社資料との関連につい

ては池上洵一に説がある。

(『新日本古典文学大系』<sup>(6)</sup>)

5 『古事記』のスサノオノミコトによる八岐大蛇退治譚や全国各地に伝えられる昔話の猿神退治譚、さらには中国の『補江総白猿伝』などを連想させる怪物退治の話。たとえば昔話の「しつぺい太郎」などでは、犬の活躍が中心だが、本話では、東国の男の周到な準備と豪胆な冒険心、冷徹な理性の勝利が説かれる。中山神社の猿神話については、池上洵一「中世のあけぼの」『今昔物語集』の世界」に卓論がある。(『新編日本古典文学全集』<sup>(7)</sup>)  
ここにはすでに多くの同一説話・類似説話の存在することが指摘されている。これらの指摘を踏まえ、どのように考察を進めていけるだろうか。

すなわち右の指摘の中で、『全集』は旅人が生贄を廃したことにについて、古来よりする「客人神」の発想の上に、「合理的な人間中心の思想」を見ている。私に言い換えれば、この指摘は伝統的な話型の上に、新しい思想が重ねられていると捉えることができる。また『集成』や『新編全集』は、昔話「猿神退治」に「犬の活躍」を中心とする話型と、東国からの旅人の「理性の勝利」を中心とする話型があることを指摘した上で、本説話は後者と一致するといふ。昔話「猿神退治」については、すでに永田典子氏の指摘<sup>(8)</sup>があるが、諸説を踏まえた上でなお幾つかの疑問が浮かび上がる。例えば、本説話の話型が後代の伝承である昔話と一致することを指摘するだけでよいのか。あるいは日本本物語の成立にとって『白猿伝』を媒介とすることは、しかしどのように証明できるのか。あるいは昔話や御伽草子との類似は認めるとして、どのような「関連」があるのか。主題から見て、本説話は果たして「理性の勝利」などといえるのだろうか。

また何よりも特筆すべき先行研究に池上洵一氏の論考がある。

池上氏の所説を丁寧に通れば次のようである。池上氏は、『今昔物語集』巻第二六第七が「昔話の『猿神退治』と

まったく同型であることは、すでに諸先学によって指摘されているとおりである」として、『日本昔話集成』に四三例の採集例のあることをいわれる。そして池上氏は、次のように述べる。すなわち、

『今昔』の話との類似は一目瞭然であろう。(略) 昔話が本質的にそうであるように、この話も本来は特定の神社や土地にのみ関係するものではないけれども、実際に語られる場合には実在の神社や土地と結びつき、伝説化して語られることが多い<sup>(9)</sup>。

として、

『今昔』の話はこのような基本的構成と比べて、他国者の男が最初から犬を連れており、したがって盗み聞きや犬の発見という要素を欠いているが、昔話にも最初から犬を連れていた例がないわけではなく、この違いにあまり意味を持たせる必要はない。つまり『今昔』の話は基本的には昔話そのものであつて、それがたまたま「中参」という社に關係づけられているにすぎない<sup>(10)</sup>。

という。

右のように池上氏の所説を辿つてくると、幾つかの論点を指摘することができらるだろう。私がまず「第一の論点」として挙げたいことは、池上氏が『今昔物語集』巻第二六第七が「昔話の『猿神退治』とまったく同型である」といいつつ、『今昔』の話は基本的には昔話そのものであるとされたことはどのように理解すべきかということである。

後にも述べるように池上氏の指摘される、「盗み聞きや犬の発見」とは昔話にとつて「要素」というような問題ではなく、「盗み聞き」によつて犬を「発見」し、犬の援助によつて猿神を倒すという構成が、昔話にとつて本質的だと、私は考える。

私は池上氏が『宇治拾遺物語』における瘤取翁や腰折雀などの説話のように「昔話を比較的素直に文字文芸化した話は皆無に近い」と説かれた前提そのものに対して、いささか疑念を呈したことがある<sup>10)</sup>。すなわち、昔話と話型を共有しつつ、『宇治拾遺物語』の説話は貴族社会を基盤とする平安京の物語に他ならないというべきである。

いずれにしても本説話の考察にとって昔話との比較は避けられない。ただし、私は永田氏の研究を契機に、今まで採録されてきた昔話の記録資料を改めて調査し直し、別表「昔話『猿神退治』分析表」を作成した。これによれば明らかに、昔話「猿神退治」には唱え言を核として構成される話型と、武力によって生贄を廃する話型と、二種類の亜型 sub-type が存在することを改めて確認することができる。そのことからすれば、昔話と本説話との関係はそう単純ではない。したがって、本説話が昔話の一亜型と話型における同一性のあることを認めるとしても、表現における細部の異同にこそ、『今昔物語集』あるいは『宇治拾遺物語』が昔話と対立する独自性をもつのではないだろうか。

次に「第二の論点」とすることは、猿神という神格に対する理解である。池上氏はいう。

なぜこの神社が「猿神退治」の昔話と結びつけられたのか、この神社の猿神はどういう存在であったのか等々が、おぼろげながら諒解できるように思われる。(略) 現在、この神社の主祭神は鏡作命であり、本殿にはさらに大己貴命と瓊々杵尊が合祀されている。しかし、これらの神々が最初からの祭神でないことは各種の資料がほぼ一致して説くところであって、とくに主祭神の鏡作命は新しく、神代からこの地の地主神だったのは大己貴命であるが、後に鏡作命が降臨してこの地に住みたいと託宣があったため、大己貴命は宮所(社地)を譲ったのだと伝えている<sup>11)</sup>。

あるいは次のようにいわれる。

さて、中山神社の境内には、猿神社という末社がある。この小祠の祭神について『中山神社本末調書下書』には「猿ノ靈ヲ祭ル」とある。(略)詮ずるところ本来は猿そのものを祀る社だったと思う。この社は本殿の裏手を少し登ったところにある小祠で、大きな露岩の上に祀られているが、この岩は明らかに磐座である。(略)磐座の存在はこの社の起源が非常に古いことを物語っているように思えるのである<sup>(13)</sup>。

さらに池上氏は、贅殿について『中山神社資料』に収められている安政三(一七七四)年付の古文書に、贅賂猪狼の神を「社跡ハ本社之後、神林之側ニ御座候。字ヲ贅殿谷ト申候」とあることから、この神の祭られている場所が、猿神社のある場所であり、そのあたりは現在でも「ニエンドノ」または「ニエンドウ」と呼ばれている。贅殿がなまったものにちがいない。伝説にいう贅賂猪狼の神はまさに猿神社の猿神にほかならなかったのである。

贅賂猪狼の贅はニエ、賂はマイナイの意を持つが、おそらく巧みな宛字であって、猪狼は御霊、つまりシロ御霊もしくはシラ御霊の意であろう<sup>(14)</sup>。

と論じられている。そして、

贅賂猪狼の神はすなわち猿神は、本来は鏡作命とはなんの関係もない神であって、鏡作命が主祭神となつて後は一応従者に位置づけられてはいたものの、ともすれば主祭神とは関係なく御霊的な猛威をふるう神として恐れ敬われていたのではないかと推定される。そして、さらに遡っていくと、この猿神こそがこの神社の最古の祭神であつたのかもしれない。それがまず大己貴命に圧倒され、さらに新来の鏡作命に追われて、その従者・使者へと転落していった過程は、大津市坂本にあつて有名な日吉大社(山王権現)の猿がたどつた運命になぞらえることができるだろう<sup>(15)</sup>。

といわれる。すなわち池上氏は現在の祭神である大己貴命と瓊々杵尊が、本来からする地主神であり、鏡作命は新し

い神であるとする。さらに「境内」に祭られている猿神は磐座に祭られているゆえに「最古の祭神」であったと推測されている。

池上氏の指摘は、私に言い直すとすれば、中山神社の祭神を歴史的に古層から新たな層をなすものへと重層化させて捉えようとする仮説である。そのような方法的理解こそ村落共同体における祭神相互の関係を整理する上できわめて示唆的である。

次に「第三の論点」とすることは、説話集編纂の問題である。池上氏は次のように述べる。

中山神社の猿神にとつて、昔話「猿神退治」と結びつけられたことは、明らかに神としての權威の失墜を意味した。それは新米の神に主祭神の座を譲り渡した古いタイプの神が等しくたどらざるをえない凋落の過程であったが、そのうえ『今昔』の話のように、徹底的に打倒されて猪や鹿の贅まで廃止されたと語られては、現実の状況をさえ突き抜けて神としての存在まで抹殺されたに等しかった<sup>(16)</sup>。

特に『今昔物語集』の編纂の問題については、『宇治拾遺物語』に対して、

おそらく両書の共同母胎か、それに近い性格を持った先「行説話集」から書承する形で、撰者はこの話に対面したのである。奈良か、京都か、いずかにせよ中央にいて書物を介してこの話に接した撰者にとって、中山神社はまったく未知の神社であり、退治される猿は奇怪な怪物以外のなにもでもなかった<sup>(17)</sup>。

といわれる。すなわち、池上氏は『今昔物語集』の撰者について、

彼は対象が昔話であろうとなかろうと、およそいかなる種類・性格の話であっても、つねに話の内容を即物的に現実としてとらえ、その話の現実の中を生きる人間に対して、同じ現実を生きる人間として熱い視線を投げかける。この話でその対象となったのは、生贄に指名された危難の中で必死に行動する人びとの姿であった。同じ話

を共通説話として持ちながら、他の説話集とは明確に区別される『今昔』の文学的性格はここから生まれてくる<sup>(18)</sup>。  
という。また、

『宇治拾遺』にはなくて『今昔』だけが持つている「只死給ヒネ。敵有者ニ行烈レテ、徒死為者ハ无ヤハ有ル」という発言は、『今昔』の男の発言の論理を支え、さらには話全体の論理をも支える、たいへんな重みを持ったことばとして改めて注目させられる<sup>(19)</sup>。

と述べておられる。あるいは、

人贅を廃止して猪・鹿の贅を供えるようになったという『宇治拾遺』の結末のほうが、おそらくより古い形であり、中山神社の現実にも近かつたらしいこと<sup>(20)</sup>

とも推測を加えておられる。そして、

『今昔』撰者の側からいえば、未知の地方神に親近感を抱く理由はなかったし、地方社会を支配している農耕儀礼などに肉感的なつながりを求める必然性もなかった。いわば彼は都市人なのであり、同時に仏教人でもあることによって、地方神に対して圧倒的に優越する位置に立つことができたのである<sup>(21)</sup>。

また、

彼はそれらの話を、所詮地方の現実としてではなく、あくまでも都市人である自らの現実と引き比べて受容する。自分とは関係のない遠い国の奇譚を楽しむというような消閑的な姿勢とも異なる。彼はまるでその場に自分が居合わせでもしたかのように話の世界にのめりこむ。けしからぬ怪神にねらわれたいま、われら人間いかに行動すべきや—となってしまうのである。その時、中山や高野の名は怪神につけられた単なる符牒にすぎない。どこの国の何神であろうと彼にとって大した意味はないのだ。

だが、この一方的な思い入れは、『今昔』にそれまでの文学になかった新しい世界を切り開かせた原動力でもあった。(略)「同ジ死ニヲ」ということばで代表される果敢な行動の様式は、人間の根源的な自己防衛本能の発動にすぎぬといえはそれまでだが、それを真正面から描いた作品は『今昔』以前にはなかった。(略) いわば『今昔』は人間の強さの発見者であり、文学に描かれること自体が稀れであった積極果敢な肉体的行動力を、真正面から肯定した最初の作品であった。

と結論付けておられる。

池上氏の指摘されるとおり、猿神を中山神社の中で古い神格とみる位置付けに、賛意を表したい。また説話集の纂に、都人のまなざしを見てとることについても賛意を表したい。

しかしながら、本説話のもつ話型に対する理解と、『今昔物語集』巻第二六第七の理解についてはなお検討の余地がある。さらに、池上氏の創見を踏まえることによって、『今昔物語集』に対する『宇治拾遺物語』の特質がどこにあるか、という問題について検討を加えることにしたい。

## (二) 問題の端緒——高野神と中山神——

この説話は冒頭から難解である。

①「中山、高野と申おはします」と神名が示される。美作国に中山、高野という神がおられた。さらに「高野はくちなは、中山は猿丸にてなんおはする」という。敬語はあるが、神に対して慇懃にして無礼なものいいである。ここには都人による地方の神に対する蔑視のまなざしが働いている。そのようにいわないまでも、神に対する畏敬より



も馴れ馴れしさ、動物の姿に可視化されたものとして捉えるのは世俗化という引き落としである。そして「その神」は、と受けて、「年ごとの祭に、かならず生贄を奉る」とある。第二文以下は、冒頭文に対して暴露的であり、注釈的である。本説話の内容は、中山神が猿丸であり、旅人がこれを退治したというものである。そうであるとして、なぜ高野神は名だけが紹介されて、高野神をめぐる生贄の説話は記されないのか。

高野神が生贄を要求したと伝える説話は、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』には見えない。ただし蛇神に関する伝承は、資料としては『作陽誌』（元禄二年、一六八九年）の存在が知られている。また、高野神社の北にある美和山古墳の第二号墳は「蛇塚」と呼ばれている。この場所は、現在の高野神社からいささか離れているゆえに、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』と高野神を蛇体とする伝承が、現在の高野神社とどのように結びつくのか、ただちには明らかでない。

元禄二年の本奥書をもつ「高野神社伝記写」は、安閑天皇二年冬十一月上旬のこととして、三輪村に「白髪のお翁」が現れ、自らを「稲飯の神」と名告り、「大河渚の岩に現給ふ御神」を祭るよう託宣する。忽ちその御岩に「降臨まし座す」神が「彦波瀲武鸕渥草葺不合尊」であったという。後、天長二年冬十一月に「降臨有し御岩の辺」に姿を現した女が「竜女」であった。かくて彦波瀲武鸕渥草葺不合尊と、大己貴命と鏡作命を合わせて一社に祭ったと伝えている<sup>23</sup>。ここに纏められた社伝そのものに、すでに神格を歴史的に重層化させて捉えるという認識が見てとれる。御神の顕現した盤座については、高野神社所蔵の「津山景観図屏風」<sup>24</sup>に描かれている。これに関して、「今は道路のため不明となっているが、元は北岸から吉井川に突出する礫取盧岩<sup>おのころいわ</sup>という岩があり、そこに高野神が最初に降臨したと伝えられている」とされている<sup>25</sup>。この盤座が現在どこに在るのかについては不明であるとされるが、この盤座こそ「礫取盧岩が高野神祭祀の原形」をなすものである<sup>26</sup>。この盤座に降臨した神が古層をなすといえる。一方、

地形から見ると、高野神社には宇那提森と呼ばれる古木が残っており、吉井川岸に面して神南備山と呼ばれる山もある。これは古来からする神南備森と同じものであろうし、森の姿や山の名そのものが森に宿る神格の古層性を示していると思倣せる。したがって、高野神社に現在祭祀されている主祭神である彦波限建鸕鷀草不合尊と、相殿として祭祀されている鏡作神（中山神）・大己貴命（総社神）の二神は、そのような在来の神格に対して、歴史的に新層をなす神格であると思倣すことができる。

さて、この「蛇塚」にまつわる高野神社の社伝は、すでに「高野神社伝記」に見える。すなわち、

当社御神額之事 嵯峨天皇、勅定正一位の御神額宣下の事、一社の神宝なり。空海の筆なり。又佐理卿の筆とも云説有り。右神額弘仁中神門より二丁計下、一の鳥居に懸し所、天長年中湖中より大蛇出て、此額をねぶりし処、神罰にや此蛇額ハ鳥居の下に有り。尾は宇那提の森の元に成し其俣にて死ぬ。時に神主、国司へ訴へ出るとかや。近郷の人民集り北の山に大蛇二ヶ所に掘埋、則大塚に築く。頭ハ北の塚なり。尾ハ南の塚に築く。南北二ツ共に小山の如くなる大塚なり<sup>四</sup>。

と伝えている。この伝記は神社の側から記されているので、神罰が中心的なモチーフになっている。一方、この蛇塚については現在、

二宮村の宇那提森の北から神樂尾山麓との間に大きな池があり、蛟龍がひそみかいていた。蛟龍は人を襲ったり高野神社の扁額をなめたりするので、村の長老がついに蛟龍を退治し、その骨を埋めて、二つの塚を作った。一つは龍澤寺の裏に、一つは民家の後に。二つとも蛇塚という<sup>四</sup>。

と紹介されている。このような蛇塚の伝説も、今取り上げている『今昔物語集』の生贄説話と同じ話型をもつ。すなわち、災厄を齎す靈格の正体を見顯し追放するとともに崇り神として鎮め、祭祀するという話型を認めることができる。

る。

さて、『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』の表現において、最初に中山、高野という順番で紹介されているのは、美作国の一宮・二宮の序列に従うものと見てよい。まず中山、高野と紹介されて、以下は順番が逆転して高野は蛇、中山は猿丸という順番で示されるから、「その神」はひとまず中山神を指すといえる。

そうであるとして高野が蛇であり、中山が猿であるというとき、「蛇」と「猿」とが並ぶにしても、「蛇」と「猿丸」とは果たして並ぶのか。中山神を「猿丸」という呼ぶ表現には、先ほども述べたように蔑視が籠められている。それは神体を猿としつつ「丸」という語を付けて呼ぶからである。例えば『枕草子』には、飼育する犬を「翁丸」と呼んでいる事例がある<sup>四</sup>。このような文脈における「丸」という接尾辞は愛称をいう。いくら大切に飼っているからといって、犬に「丸」をつけるといえるのはともかく、神格に「丸」とつけて呼ぶのは、聖なるものを俗なるものへ引き落とすことになるからである。本説話と同一説話とされる『今昔物語集』巻第二六第七では「其神ノ体ハ」とある。『今昔物語集』は、不可視の超越的存在が顕現するときに、人の目に触れる姿が「猿」の姿であると表現している。まさに『今昔物語集』が仏教説話集として、宗教的なまなざしをもつゆえんである。これに対して『宇治拾遺物語』は、世俗のまなざしをもつ。あるいは地方の神に対する都人のまなざしを見てとることもできるであろう。いずれにしても『今昔物語集』も『宇治拾遺物語』も生贄を要求する存在の正体が猿である、ということこそ説話の冒頭に呈示している。このことは説話の冒頭が、説話の到達点を明示しているのである。このような説話の冒頭は、昔話が犬の援助によって化物を退治したときに、その正体が老猿であったという、種明かしの方法をもっていることと対応している。

以下、簡単に『宇治拾遺物語』の表現を特徴づける要点について触れておきたい。

② その神が、年ごとの祭として生贄が行われていたことを示す。周知のように、祭には、定期的な祭と不定期的な祭がある。不定期的な祭は災厄を除くために行なわれるものであるが、定期的な祭は、春・秋を周期とする農耕の儀礼である。それに生贄が行なわれているという。

③④ 生贄の行なわれている村を訪れた者を、「あづまの人」で「狩」をする「荒武者」とする。生贄を要求する神を打倒する資格を、どこに求めるのか。私は、内外の二分法や境界性の概念だけで説明するのではなく、生贄が本来は神に捧げられるものであるということから、生贄のもつ祭祀性に注目したい。すなわち本来的には、東人である狩人、荒武者には、異なる祭祀集団に属するがゆえに、生贄を献ずる村の神は神と見えないのである。説話の語りからすれば、宗教性が希薄化すると、武力が強調されることになる。

⑤ 中島悦次氏の指摘されるように、男が娘の親に述べた言葉「人は命にまざる事なし」に、『宇治拾遺物語』の思想は端的に示されている。村落共同体の維持よりも、個人の命を尊いと考える言葉は、都市的な思想である。それは平安京という『宇治拾遺物語』の成立基盤に関係している。

⑥⑦⑨⑩ 「此御祭の御きよめするなりとて四目引きめぐらして」とか、「その祭の日になりて、官司よりはじめ、よろづの人人こぞり集まりて、迎にの、しり来て、あたらしき長櫃を、この女のゐたる所にさし入て」とか、「柁、柁、鈴、鏡を振りあはせて、さきをひの、しりてもて参るさま」とか、「生贄を御社にもて参り、神主、祝詞いみじく申て、神の御前の戸を開けて、この長櫃をさし入て、戸をもとのやうに鎖して、それより外の方に官司をはじめ、次々の司ども、次第にみな並びゐたり」など、祭祀の形態についての説明は、生贄の祭祀が在来の神格の祭祀と同じ形態をもつことを説明している。

⑧ 「日比ときみがきつる太刀、刀」とあり、『宇治拾遺物語』では東人のもつ武力が事態を解決するのであって、

犬は援助者にすぎない。この点が、『今昔物語集』と異なる点であり、昔話の亜話型との異同に關係する。

⑪ 「あづま人見ければ」以下、横座の猿の描かれ方は重要である<sup>83</sup>。この猿は『宇治拾遺物語』第三話における鬼のような、幸を齎す妖精<sup>84</sup>とは異質である。第三話の鬼が「零落した神」としての性格性を帯びたものであるのに対して、本説話の猿は化物に近い。生贄は、在来の神道的祭祀における供物のように靜的 static なものではない。血肉をむさばり食う祝祭性が感じられる。

⑫ 「いと大なるまな板に、ながやかなる包丁刀を具して置たり」とあるように、男は生贄として組板に乗せられるが、後の⑬「その猿をまな板の上にひき伏せて、首に刀をあてて」というふうには、男はその組板の上に猿を乗せる。そのことによって、關係の逆転を明確に示す。

⑭ 「二人の神主に神つきて」⑯ 「宮司、神主より初て、多くの人ども」とあるように、宮司、神主は、在地の祭祀組織の神官である。神主という語は『今昔物語集』には見えない。『宇治拾遺物語』の特質は、宮司と神主を分け、神主に猿の背後に在る神格が自らの意思を伝えるために憑依しているところにある。

⑰ 「いみじき誓言どもをたてて、祈申て」とあり、憑依した神格が誓約するので、男は許したという。その時、⑮「その人の子孫の末々にいたるまで、我、まもりとならん」とあるように、『宇治拾遺物語』における猿神の誓約は村落共同体に対してというよりは、個人としての男に対する誓約になっている。ここに『宇治拾遺物語』の特質がある。

⑱ 「男はもとよりゆへありける人の末なりければ」は『宇治拾遺物語』の独自異文である。これは『宇治拾遺物語』が物語の伝統に立つことを示すものであろう。

⑲ 「その後は、かの国に、猪、鹿をなん生贄にし侍りけるとぞ」とあるように、『宇治拾遺物語』は祭祀組織の解

体までをいわない。というよりも改宗させることより、人の心を教えることが中心である。すでに明らかにしてきたように<sup>(30)</sup>、この説話においても『宇治拾遺物語』は倫理的規範を問題にしている。

### (二) 生贄とは何か

さて、このように内容を追つてくると、最初に考察すべきは生贄の問題である。

生贄とは何か。ここにも、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』という説話集それぞれの認識の根本的な違いが出てくる。『今昔物語集』における「生贄」は、例えば、巻第一〇「立生贄国王、止此平国語」第三に次のような事例がある。今は昔、震旦の某帝の代に、某が「北ノ方」の「大ナル国」に「国王」となった。ところが国内が荒廃しているので、国人に尋ねると、「此ノ国クニ、昔ヨリ神強クテ在マス」という。その神が「毎年ニ一度、祭」に、高貴で美貌の未婚の女性を生贄として要求する。新国王は、巫を徹底的に迫害し、海に突き落としてしまう。そして、生贄の女性を王の妻にしてしまう<sup>(31)</sup>。

本説話と、巻第一〇第一三と説話の構成は異なるが、いずれも仏教説話における生贄の本質が明確に示されている。つまり、新王は異国における旧来からの祭祀組織を解体させたのである。王は神の妻を王の妻とするとともに、巫女という祭祀者を排除し、在地の祭祀を壊すことによって、古い国家を滅ぼしたのである。つまり『今昔物語集』の立場からいえば、「此ノ国クニ、昔ヨリ」「強クテ在マス」在地の神とは、仏の側から異教の神格である。そこでの生贄とは、仏教から見ると異国の邪宗、蕃俗の淫祀なのだ。

そのように見ると、生贄の問題は科学に対する非科学、近代に対する前近代という対比の枠組みの中では捉えるこ

とができない。『今昔物語集』卷二六第七は、異教の祭祀を廢して正教たる仏教を主張しようとしている。生贄を廢する存在は「事ノ縁有テ」こそ訪れてくるのであるし、一人娘を生贄として差し出す親は「前ノ世二何ナル罪ヲ造テ、此ル所ニ生レ」たのかという。そして生贄を止め、女を妻として婿となつたのも話末評語に「其モ前生ノ果ノ報ニコソハ有ケメ」と総括するように、仏法の認識は説話を貫いている。説話は仏教の教える因果の法の現前を強調している。『今昔物語集』卷二六が「宿報」と題されるゆえんである。対照的に『宇治拾遺物語』には宗教の正邪の意識が希薄である。

一方、生贄は実際に行なわれた習俗であるのかどうか、と常に繰り返される問いがある。かつて文化人類学や民俗学において交された従来の生贄論では、棄老伝承と同様、実修されたかどうかという点に議論の集中したきらいがある<sup>83)</sup>。私は、この問いを事実の次元ではなく、伝承の次元で捉えたい。例えば「播磨国風土記」讃容郡に、次のような記事がある。

讃容といふ所以は、大神妹妹二柱、各、競ひて国占めましし時、妹玉津日女命、生ける鹿を捕り臥せて、其の腹を割きて、其の血に稻種きき。仍りて、一夜の間に、苗生ひき。即ち取りて殖ゑしめたまひき。爾に、大神、勅りたまひしく、「汝妹は、五月夜に殖ゑつるかも」とのりたまひて、即て他処に去りたまひき。故、五月夜の郡と号け、神を賛用都比売命と名づく。今も讃容の町田あり。即ち、鹿を放ちし山を鹿庭山と号く。山の四面に十二の谷あり。皆、鉄を生ず。難波の豊前の朝廷に始めて進りき。見顯しし人は別部の犬、其の孫等奉発り初めき<sup>84)</sup>。

ここには、生きている鹿を屠り、その生きた血に稻を蒔くという。これは、鹿の腹を割いて流れる血をもって稻の種を蒔いたところに注ぐという農耕儀礼を表現している。これは律令以前の祭祀形態が神話という形で伝承されてい

るとみることができる。このような伝承に、国家的に整備された神道以前の、原始的な宗教のありかたをうかがうことができる。周知のように、整備された律令国家では血は穢れに他ならないからである。土橋寛先生の説かれるように、血はチという生命力を「内蔵」したものである<sup>89</sup>。つまり、チという不可視の霊力は乳や血として顕在化し可視化される。このように稲種に屠った鹿の血をもつて溢れる生命力を賦加するところに、豊饒を期する古代的な思想が見てとれる。

同様の事例は、次の記事にも見える。

雲潤の里（土は中の中なり）右、雲潤と号くるは、丹津日子の神、「法太の川底を、雲潤の方に越さむと欲ふ」と爾云ひし時、彼の村に在せる太水の神、辞びて云りたまひしく、「吾は穴の血を以ちて佃る。故、河の水を欲りせず」とのりたまひき。その時、丹津日子、云ひしく、「此の神は、河を掘る事に倦みて、爾いへるのみ」といひき。故、雲弥と号く。今人、雲潤と号く<sup>90</sup>。

「穴の血を以ちて佃る」について秋本氏は讃容郡の事例を引き、「ここも猪・鹿などの血で稲作をする意」と注する<sup>91</sup>。すなわちこれらの事例において、血を得るために犠牲として屠られる鹿が、本来の語義における生贄ではないだろうか。

現存するかぎりで古風土記には「生贄」という語は見えない。ただ、「贄」の事例は次のようである。賀古郡の記事に、「比礼墓」の由来として、大帯日子命は印南の別嬢を誂つまじいするが、別嬢は遁はなげてしまふ。そこで天皇は別嬢を覓まぎ、印南の六継村に至り密事をなす。その時、

酒殿を造りし処は、即ち酒屋の村と号け、贄殿を造りし処は、即ち贄田の村と号け、室を造りし処は、即ち館の村と号く<sup>92</sup>。



という。その後、別嬢が薨じた。それが「褶墓」だという。そこで、

天皇、恋ひ悲しみて、誓ひたまひしく、「此の川のを食はじ」とのりたまひき。此に由りて、其の川の年魚は、御贄に進らず<sup>四〇</sup>。

という。秋本吉郎氏は「御贄」に「天皇の御食料」と注する<sup>四〇</sup>。ここにいる贄は、血を求めるために鹿の腹を割るところとは異なる。いわば海幸山幸の供物と呼ぶべきであろう。柳田国男は追儺や鬼追などの神事が「上古人を屠りて神に饗するの余風と断ずるは甚不当なり」といい「要するに自分は魚鳥獸の生贄と人の供物とは到底同一の系統の者と考ふること能はず」という<sup>四一</sup>。そして「生贄は生けたまゝ、にて奉る贄にて食物の新鮮を保障する誠意ならん」と見て「伊勢の皇太神の御物にも生贄あることは儀式帳に見ゆれど、此等の大なる動物を屠るが如き惨酷なる慣習は少くも我々が浸染したる日本の神道とは相容れず」として「式以前の神道」をいい「況や信仰の問題に關してはあまり干涉を加へられざる民間下級の生活殊に田舎の神祭にはよほどり奇怪なるものもありしなるべし」<sup>四二</sup>と断じる。柳田のいう「式以前の神道」と式以後の神道という発想は重要である。ただ柳田の言説は支配者の側に立っている。いうならば、古代国家の確立に伴って神道祭祀が整備されたときに、在来の生命力を賦与する血の祭祀は、海幸山幸の供物へと変容したのではないか。風土記には律令以前の祭祀形態と、天皇を統治者とする制度化された祭祀とが並存しているといえる。

さらに仏教的枠組みによって生贄の意味付けは変容する。例えば『私聚百因縁集』巻第一第五「妙色大王」には帝釈天が王を試みるために夜叉となり生贄を要求する。すなわち、「夜叉告テ云ク。我今飢餓セリ。(略)御膳ヲ辞シテ不肯テ食セ」。欲シ食ニハント生人ノ熱ノ血肉ヲ「耳」とある。夜叉は年十五歳の王子を要求し、「裂ニテ其身ヲ「而食スレ之ヲ」とある<sup>四三</sup>。また巻第一第二〇「宝明童子」では、梵天魔国の冥成王は「大鬼王」であり「彼国ニ住シテ人ノ児

ヲ取テ為<sub>レ</sub>食」した。宝明童子はその身代わりとなる。童子の母が念仏を唱えたと王は「今始メテ聞キ<sub>レ</sub>之ヲ鬼神随喜シテ永ク留ム国中ノ生<sub>イナヒ</sub>煮」という<sup>(44)</sup>。生贄は王に仏法を説き知らせるための方便である。また巻第二第八には、堅陀羅国に大池があり、大黒蛇が住んでいた。「四季ノ初、国内ニ形吉貌嚴人ノ子ノ十五際以前。十歳已去ナルヲ。生煮ニ被ル<sub>レ</sub>立」という。童子が娘の身代わりとなる。念仏を唱えたと蛇は血り涙を流す。地獄の責めに耐えかねて「吸ヒ<sub>レ</sub>血ヲ。食ニスル肉村ヲ」たという<sup>(45)</sup>。

つまり、生物を殺して血を注ぎ生命力を賦与する儀礼を古層とすれば、仏教的枠組みの中で夜叉や鬼神が生きる人の血肉を求めることを生贄とする表現は新層をなすというふうに、生贄における重層化を見てとることができる。

#### (四) 中山神社の祭神と猿神

次に中山神と猿との関係について考えてみることにしたい。そこでまず、池上氏の高説を踏まえて、中山神社の祭神と猿神との関係をもう一度整理し直してみたい。

まず、現在の中山神社の祭神は、社伝によれば、

鏡作神 鏡作部の祖神。

を中心に、相殿神として、

石凝姥神 天孫降臨の五部神。八咫鏡を造りませる神。

天糠戸神 石凝姥神の父神。

を祭祀するとされている<sup>(46)</sup>。いうまでもなく、鏡作神とはその神名そのものが、神格の地域性と歴史性を表現してい

る。すなわち、鏡作という鑄造技術をもつ渡来系の氏族の祭祀した神格といえる。内陸部の津山は、古来より鳥取から一本の旧街道で繋がっていたから、日本海側、特に鳥取・島根から中国山地を越えて広島・岡山に渡来系の文化や技術が集団の移住とともに伝播した可能性は十分にあるだろう。

伝播の問題は今措くとして、実際に中山神社における祭神の社殿配置を調べてみると、右の三神を祭祀する本殿の他に、次のような社殿が、本殿に横向きの方向で脇に並んでいる。すなわち、

惣神殿

国司神社

御先神社

である。それから、社地の背後の崖に祭られている、

猿神社

がある。一般的に言えば、このような社殿配置に、祭祀の歴史が畳まれている。この中で惣神殿は山上・山下一二〇社を合祀したという。この地にかつて別々に祭られていた諸神を、中山神社の整備に伴って統合して祭ったものと見られる。また、国司神社は地主神である大国主命を祭っているとされる。御先神社は中山神の祖神ともいい、一般には供神といい稻荷神とされる。いずれにしても、国司神社、御先神社などは歴史的に古くから祭祀されていた神格であることを示している。特に猿神社は、本殿との位置関係から見ても、池上氏の論じておられるように、より古い神格を祭っていると推測できる。三好基之氏は、中山神社の祭神に諸説の存在することについて「中山の神を奉ずる集団がいくつかあった」ことを指摘し「集団の勢力の交代によって主神の性格もまたかわっていった」<sup>47)</sup>と推測する。そして「中山の神の本来の姿は山の神であり、それはまた水の神であり田の神である」ことは、中山神社の神田植祭

が四月の第二午日に行われることから「中山の神が宿った長良嶽の磐座は、今日、猿神が祭られている場所であり、この巨岩こそ中山神社の神体であり、宮川を中心とする苦田郷・田中郷・林田郷・田辺郷の斎き祭る神であつた」<sup>(48)</sup>という。猿がただちに神なのではなく、猿の形姿の背後に山に座す神の存在をうかがうことができる。

そこで、すでに知られている資料から中山神社の祭神について、歴史的に辿り直すと次のようである。

まず、中山神社の祭神の最古の記録は、『延喜式』（九二七年完成、九六七年施行）神名帳に認められる。

#### 中山神社 名神大

○貞観二年正月廿七日戊寅、授美作国正位仲山神從四位下、同六年八月十四日犬辰、詔以美作国從四位下仲山大神、列<sub>二</sub>官社<sub>一</sub>、同七年七月廿六日、進美作国中山神階、加從三位、十七年四月五日丁巳、授美作国從三位、○一宮記、大己貴命、○社司相伝云、中山神、鏡作命云云、美作国仲山金山彦神社古歌、真金吹、吉備中山、○今田辺保中山麓、長良宮、○帳古本書入二、社記云、鏡作神、天照大神第三御子云云、○一宮也、○秘記二、諸社一覽、国府津山ノ北一里ニアリ<sup>(49)</sup>、

この注記によれば、貞観二（九七七）年以後、中山神は朝廷から從四位下の位階を授けられている。このことは、地方神が中央政府によって神々の体系に組み込まれたことを意味している。しかも以後いち早く位階を高められている。それは、中山神が特別扱いを受けた神格であるとともに、都において広く知られていたことを意味しているであろう。ところが中山神は、「一宮記」によると、大己貴命とされる一方、「社司相伝」あるいは「社記」には鏡作命であるという。また中山金山彦神社の古歌に「真金吹、吉備中山」と伝えるということは、祭神が鑄造を職掌とする氏族の祭祀したものといえる。つまり、このような伝承の揺れは、異伝の併存とみえて、むしろ中山神社における主祭神の古層と新層との関係と捉えることができる。

また、江戸時代の文献であるが、『一宮社伝書』（安永三年、一七七四年）には次のようにある。

贅賂猿狼神 本社より三丁、西南の谷に社地あり、

神体は猿田彦大神、眷属皆猿狐の神也、此所に伽多野部長者乙丸といへる者あり、大己貴尊を信仰しけるに、尊此地に降臨の後、大己貴尊の神威いたくおとろへ給ふを本意なく思ひ、尊をそねみ奉りけるにや、彼贅賂猿狼の神いかりをなし、乙丸か家臣従類をことごとく取失、乙丸大におとろき今より此郷を立退き、人贅の代に鹿二頭つ、毎年備へ奉るへしとかたく誓約をなす、依て神慮納受有其後乙丸弓削庄に移住、毎年正月八日鹿二頭つ、備へて件の神を祭事久し、然るに一年おこたる事侍りしかハ、此神大に怒りてたゝり給ふ、此時贅賂猿狼の神を弓削の庄に勧請して崇敬し奉る、則弓削庄内下神目村にます大宮志呂大明神是なり、一宮孫にいましめ給ふは、鹿にんにく也、然共たの遺風により正月八日より四月八日迄、鹿の相火をゆるし給ふ、贅賂明神を弓削庄へ勧請の後、鹿を当所へ備へる事なし、始鹿を備へし処を贅殿谷といふ、是則猿田彦大神の社跡なり<sup>50</sup>。

これによると、贅賂猿狼神という神がいたという。その「神体」は、猿田彦大神であり、眷属は「猿狐」の神であるという。かつて乙丸という長者がいた。最初、大己貴尊を信仰していたが、大己貴尊の神威の衰えと引き換えに、贅賂猿狼の神が怒り、「人贅の代に鹿二頭つ、毎年備へ奉るへし」と「誓約」をしたという。すなわち、乙丸を祭祀者として猿狼の形姿をなすのが贅賂猿狼神だといえる。この末尾における生贅の制度の変化の問題は、『宇治拾遺物語』の主張と同じだが、在来の大己貴尊に代わって新たに贅賂猿狼神を祭祀するに至ったことを伝える。この贅賂猿狼神は、崇り神である。かつて「人贅」の代わりに「鹿二頭」を生贅とするよう「誓約」をなしたという。「志呂大明神」と同神格とするが、それは後代におけるあるいは中央から冠せられた同一化といえる。また「猿田彦」という神名も、山の神を大山祇神と名付け直すような、後代における神名といえる。

これが中山神社の祭神に対する、一八世紀の解釈であり、記憶の痕跡である。そもそも本説話は中山神の由来を説明しているのか。『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』の成立した時代に中山神社が猿神を中心をなす神として祭つていた可能性は少ないであろう。あるいは『宇治拾遺物語』における繁昌社の由来を説明する伝説の事例のように、説話をもって社伝とされるに至つた可能性<sup>例</sup>もある。

また『中山神社縁由』（江戸中期）には、次のように伝える。

むかし、此さとに伽多野部長者乙丸となんいへる人ありけり。地主大穴持の神をことにたふとみおもひけるに、御神に宮所をゆつりまして後はこと所にしつまりおはしますといへとも、神威のいたくおとろへさせ給ふ事をほいなく思ひ、御神のことにさかへおはします事をそねみ奉りける心もや侍りけん贅路明神の神のいかりましていたくとかめ給ふによりて、けいし親族ともことく身まかりなんとす乙丸おとろきおもひ身のあやまりをくひて申さく、永く此ところを立しりそき、人贅にかへて鹿二頭つ、年ことにそなへ祭るへしと、かたくちかことをなし奉り、足を空にしてのかれゆく、御神これをあはれみおほしめして、先しはらくと、まりて牛馬の市をなすへきよしの神勅のありければ、乙丸よろこひにたへすあなうれしやといひて、立かへりつ、家のまへなる河原にしてあまたのうしむま、又家につみたくはへたるくさくさのものとみなうりはて、後に弓削庄にうつりすむ、もとよりうしむまをめてさせ給ふ神のなへてならぬ御神なるかゆへに、此市ことに神慮にかなひけるによりて、年ことにさかりに行れて世々にたゆる事なしといふ、その乙丸か家のあとをば長者御前とてあり、そのち正月八日毎に鹿二頭つ、そなへて贅路猿狼を祭る事久し、その鹿贅をそなへて祭りし所をば贅殿となんいへり、御神鹿大蒜を喰事をいたくいましめ給ふといへとも、正月八日より四月八日にいたるまで鹿の相火をゆるさせ給ふといふ、これそのことのもとなりとそ、一とせ鹿贅の祭おこたる事の侍りしかは、贅路猿狼の神いたく

た、り給ふ、此とかめによりて、贅賂猪狼の神を弓削庄に遷座なし奉りて志呂大明神とあかめ祭る、庖谷といふ所にて贅祭をつかうまつりけるに、御神の末社に上宮といふおはします、志呂明神のまねきにより庖谷につとはせ給ひて贅祭をきこしめしきとなん、此ところをすなはち庖谷大明神とあかめけるとそ、後には正月十五日に頼信名といふ所へ民ともあつまりはかりて十六日になん大菅山といふ所にて鹿を狩しとかや、贅賂猪狼を弓削庄にうつし奉りてのちは鹿を贅殿にそなふる事なしといふ<sup>四〇</sup>。

この資料から分かることは、長者乙丸がかつて「地主大穴持の神」を祭祀していたが、「神威のいたくおとろへ」たので「御神に宮所をゆつり」して、後は別の場所に祭祀した。ところが「御神」の繁栄を嫉妬して「贅賂明神の神」が「いかりましていたくとかめ給ふ」ことがあった。乙丸は驚き、「人贅にかへて鹿二頭つ、年ことにそなへ祭るへし」と誓約したという。ここにも、祭祀における、大己貴命と贅賂猪狼の神との交代が伝えられている。

いずれの文献も中山神社の祭神がそれぞれの段階において交代の歴史をもつことを伝えている。『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』の時代に中山神社の主祭神が猿神であった確かな証拠はない。むしろ平安期の歴史的な段階で猿神はすでに在地の神格として祭祀されていた可能性が高い。したがって『宇治拾遺物語』において「中山は猿神にてなんおはする」という表現が成り立つには理由がなければならない。

#### (五) 『今昔物語集』との比較

それでは『宇治拾遺物語』の説話の特質はどこに求められるであろうか。

『宇治拾遺物語』第一一九話は、すでに『今昔物語集』巻第二六「美作国神、依狽師謀止生贅語」第七と同一説話

であることが指摘されている。その本文は次のとおりである。

今昔、美作国ニ中参・高野ト申神在マス。其神ノ体ハ、中参ハ猿、高野ハ蛇ニテゾ在マシケル。毎年ニ一度其祭ケルニ、生贄ヲゾ備ヘケル。其生贄ニハ国人ノ娘ノ未ダ不嫁ヲゾ立ケル。此ハ昔ヨリ近フ成マデ、不忘シテ久ク成ニケリ。

而ル間、其国ニ何人ナラネドモ、年十六七許ナル娘ノ、形チ清氣ナル、持タル人有ケリ。父母、此ヲ愛シテ、身ニ替テ悲ク思ケルニ、此娘ノ、彼生贄ニ被差ニケリ。此ハ今年ノ祭ノ日被差ヌレバ、其日ヨリ一年ノ間ニ養ヒ肥シテゾ、次ノ年ノ祭ニハ立ケリ。此娘被差テ後、父母无限歎キ悲ビケレ共、可遁様无事ナレバ、月日ノ過ニ随テ、命ノ促マルヲ、祖子ノ相見ム事ノ残り少ク成行ケバ、日ヲ計ヘテ、互ニ泣悲ムヨリ外ノ事无シ。

然ル間、東ノ方ヨリ事ノ縁有テ、其国ニ来レル人有ケリ。此人、犬山ト云事ヲシテ、数ノ犬ヲ飼テ、山ニ入テ猪・鹿ヲ犬ニ令噉殺テ取事ヲ業トシケル人也。亦、心口極テ猛キ者ノ、物恐デ不為ニテゾ有ケル。其人、其国ニ暫ク有ケル間、自然ラ此事ヲ聞テケリ。

而ルニ、可云事有テ、此生贄ノ祖ノ家ニ行テ、云入ル程ニ、延有二突居テ、蔀ノ迫ヨリ臨ケレバ、此生贄ノ女、糸清氣ニテ、色モ白ク、形モ愛敬付テ、髪長クテ、田舎人ノ娘トモ不見品々シクテ、寄臥タリ。物思タル氣色ニテ、髪ヲ振懸テ泣臥タルヲ見テ、此東人哀ニ思、糸惜ク思フ事无限。既ニ祖ニ会ヌレバ、物語ナド為。祖ノ云ク、「只一人侍ル娘ヲ、然々ノ事ニ被差テ、歎キ暮シ、思ヒ明シテ、月日ノ過ニ随テ、別レ畢ナムズル事ノ近キ侍ヲ、悲ビ侍ル也。此ル国モ侍ケリ。前ノ世ニ何ナル罪ヲ造テ、此ル所ニ生レテ、此ク奇異キ目ヲ見侍ラム」ト。東ノ人、此ヲ聞テ云ク、「世ニ有人、命ニ増物无。亦、人ノ財ニ為物、子ニ増ル物无。其ニ、只一人侍給ヘラム娘ヲ、目ノ前ニテ膾スニ造セテ見給ハムモ、糸心疎シ。只死給ヒネ。敵有者ニ行烈レテ、徒死為者ハ无ヤハ



有ル。<sup>⑤</sup> 仏神モ命ノ為ニコソ怖シケレ、子ノ為ニコソ身モ惜ケレ。亦其君ハ今ハ无人也。同死ヲ、其君、我ニ得サセ給ヒテヨ。我、其替ニ死侍ナム。其ハ己ニ給フトモ苦シトナ思給ソ」ト。

祖、此ヲ聞テ、「然テ、其ハ何ニシ給ハムト為ゾ」ト問ヘバ、東ノ人、「只、可為様ノ有也。此殿ニ有トテ人ニ不宣シテ、只精進ストテ、注連ヲ引テ置給ベシ」ト云ヘド、祖ノ云ク、「娘ダニ不死ハ、我ハ亡ムニ不苦」ト云テ、此ノ東ノ人ニ忍テ娘ヲ合セ、東人、此ヲ妻トシテ過ル程ニ、難去思ヒケレバ、<sup>⑥</sup> 年来飼付タリケル犬山ノ犬ヲ二ツ撰リ勝テ、「汝ヨ、我ニ代レ」ト云ヒ聞セテ、懇ニ飼ケルニ、山ヨリ密ニ猿ヲ乍生捕ヘ持来テ、人モ无所ニテ、役ト犬ニ教ヘテ噉セ習ハス。本ヨリ犬ト猿トハ中不吉者ヲ、然力教ヘテ習スレバ、猿ダニ見レバ数懸テ噉殺ス。此様ニ習ハシ立テ、我ハ刀ヲ微妙ク磨テ持タリ。東ノ人、妻ニ云ク、「我ハ其御代ニ死侍リナムトス。死ハ然ル事ニテ、別レ申シナムズルガ悲キ也」ト。女、不心得ドモ、哀レニ思フ事无限。

既ニ其日ニ成ヌレバ、<sup>⑦</sup> 宮司ヨリ始メテ、多ノ人来テ、此ヲ迎フ。新キ長櫃ヲ持来テ、「此ニ入ヨ」ト云テ、長櫃ヲ寢屋ニ指入タレバ、男、狩衣・袴許ヲ着テ、刀ヲ身ニ引副テ長櫃ニ入ヌ、此犬ニヲバ左右ノ喬ニ入レ臥セツ。祖共、女ヲ入タル様ニ思ハセテ取出タレバ、<sup>⑧</sup> 鉾・櫛・鈴・鏡ヲ持ル者、雲ノ如クシテ前ヲ追噉テ行ヌ。妻ハ何ナル事カ出来ラムズラムト怖シキニ、男ノ我ニ替ヌルヲ哀ニ思フ。祖、「後ノ亡ビモ不苦。同ジ无ク成ラムヲ、此テ止ナム」ト思居タリ。

<sup>⑨</sup> 生贄、御社ニ将参テ、祝申テ瑞籬ノ戸ヲ開テ、此長櫃結タル緒ヲ切テ、指入テ去ヌ。瑞籬ノ戸ヲ閉テ、宮司等外ニ着並テ去タリ。男、長櫃ヲ塵許髣開テ見レバ、長七八尺許ナル猿、横座ニ有リ、齒ハ白シテ、顔ト尻トハ赤シ。次々ノ左右ニ猿百許並テ、面ヲ赤ク成テ、眉ハヲ上テ、叫ビ噉シル。前二組ニ大ナル刀置タリ。酢・塩・酒・塩ナド皆居ヘタリ。人ノ、鹿ナドヲ下シテ食ムズル様也。

暫許有テ、横座ノ大猿立テ長櫃ヲ開ク。他ノ猿共皆立テ共ニ此ヲ開ル程ニ、男、俄ニ出テ、犬ニ「噉、ヲレヲレ」ト云ヘバ、二ツ犬走り出テ、大ナル猿ヲ噉テ打臥ツ。男ハ凍ノ如ナル刀ヲ抜テ、一ノ猿ヲ捕ヘテ、俎ノ上ニ引臥テ、頭ニ刀ヲ差宛テ、「汝ガ人ヲ殺シテ、肉村ヲ食ハ、此ク為ル。シヤ頸切テ犬ニ飼テム」ト云ヘバ、猿顔ヲ赤メテ、目ヲシバ扣テ、齒ヲ白ク食出シテ、涙ヲ垂テ、手ヲ摺ドモ、耳モ不聞入シテ、「汝ガ多年來、多ノ人ノ子ヲ噉ルガ替ニ今日殺テム、只今ニコソ有メレ。神ナラバ我ヲ殺セ」ト云テ、頭ニ刀ヲ宛タレバ、此二ノ犬、多ノ猿ヲ噉殺シツ。適ニ生ヌルハ、木ニ登リ、山ニ隠レテ、多ノ猿ヲ呼ビ集メテ、山響ク許呼バヒ叫ビ合レドモ、更ニ益无シ。

而間、一人ノ宮司ニ神託テ宣ハク、「我レ、今日ヨリ後、永ク此生贅ヲ不得、物ノ命ヲ不殺サ。亦、此男、我ヲ此捷ジツトテ、其男ヲ錯犯ス事无カレ。亦、生贅ノ女ヨリ始テ、其父母・類親ヲ云不可捷ズ。只我ヲ助ケヨ」ト云ヘバ、宮司等皆杜ノ内ニ入テ、男ニ「御神、此ク被仰。免シ被申ヨ」ト、「恭シ」ト云ヘバ、男、不免シテ、「我ハ命不惜、多ノ人ノ替ニ此ヲ殺シテム。然シテ共ニ无成ナム」ト云テ、不免ヲ、祝申シ極、誓言立ツレバ、男、「吉々、今ヨリハ此ル態ナセソ」ト云テ、免奉レバ、逃テ山ニ入ヌ。

男ハ家ニ返テ、其女ト永ク夫妻トシテ有ケリ。父母ハ婢ヲ喜ブ事无限。亦、其家ニ露恐ル、事无リケリ。其モ<sup>⑬</sup>前生ノ果ノ報ニコソハ有ケメ。

⑭ 其後、其生贅立ル事无シテ、国平カ也ケリトナム語リ伝ヘタルトヤ<sup>⑮</sup>。  
本説話の内容はおよそ次のようである。

今は昔、美作国に中参・高野と申す神がおられた。「其神ノ体」は「中参ハ猿、高野ハ蛇」であつた。「毎年ニ一度其祭ケルニ、生贅ヲゾ備ヘ」ていた。その「生贅」として「国人ノ娘ノ未ダ不嫁」を立てた。ある娘が生贅

に指名された。そこに「東ノ方」から「事ノ縁有テ」旅人があった。男は「犬山」ということを職業として沢山の「犬」を飼い、山に入り「猪・鹿」を犬に食い殺させていた。娘の親は「前ノ世二何ナル罪」を作ったがためにこのような所に生まれ、「奇異キ目」を見るのかと嘆いた。「東ノ人」は「世ニ有人、命ニ増物无。亦、人ノ財ニ為物、子ニ増ル物无」あるいは「仏神モ命ノ為ニコソ怖シケレ、子ノ為ニコソ身モ惜ケレ」といい、娘を自分にくれるよう求め、「我、其替ニ死侍ナム」と自分が娘の身代わりになるよう申し出た。男は「年来飼付タリケル犬ヲ二ツ撰リ」を選び、自分の身代わりとなるよう言い聞かせた。

祭の日、「官司」以下が生贄を迎えた。「新キ長櫃」を「寝屋」に入れると、男は「狩衣・袴許」を着て「刀」を持って「長櫃」に入り、「犬」を「左右」に入れて臥せた。「鉾・櫛・鈴・鏡」を持つ者が前駆を追って行った。生贄は社に参り、瑞籬の戸を開け、長櫃を結んでいる緒を切って、指し入れて立ち去った。瑞籬の戸を閉じて「官司」たちは外に並んでいた。

男が長櫃を少し開けて見ると、「長七八尺許ナル猿」が横座に座っていた。猿の歯は白く、顔と尻は赤かった。左右に猿は百ばかり並び、叫んでいた。前には俎と大きな刀が置かれていた。酢・塩・酒・塩など全て揃えられていた。まるで人が鹿を捌いて食べるようであった。

すると、横座の大猿が長櫃を開いた。男は出て犬に指示をすると、二匹の犬は走り出て、大猿を打ち伏せた。男は氷のような刀を抜き、一匹の猿を捕え、俎の上に引き臥せて、頭に刀を差し宛て、「汝ガ人ヲ殺シテ、肉村ヲ食ハ、此ク為ル。シヤ頸切テ犬ニ飼テム」と言うと、猿は涙を流して手を摺ったが、男は今までの生贄の代わりに殺してやると言つて猿の頭に刀を当てると二匹の犬は、猿たちを食い殺した。

その間、一人の「官司」に「神託」があり、「我レ、今日ヨリ後、永ク此生贄ヲ不得、物ノ命ヲ不殺サ。亦、

此男、我ヲ接ジツトテ、其男ヲ錯犯ス事无カレ。亦、生贄ノ女ヨリ始テ、其父母・類親ヲ云不可接ズ。只我ヲ助ケヨ」と「誓言」し、誓約した。

それで、男は猿に「吉々、今ヨリハ此ル態ナセソ」と言つて許すと、猿は山に逃げた。男は、家に帰り、永く夫妻として暮らした。これも「前生ノ果ノ報」であつた。その後生贄を立てることはなく、「国平力也ケリ」というさまであつた、という。

このように概要を辿るとただちに『宇治拾遺物語』と話型を同じくすることが理會できる。

さてこの説話について、諸注釈は次のように評している。

1 説話構成の直接の典拠は未だ詳かでないが、本語と宇治拾遺物語（一一九）とは同原のように思われる。なお、搜神記卷十九（一）には東越閩中有庸嶺の麓の北隅に住む大蛇が毎年部落の童女を献ぜしめたところ、或年将楽県李誕の末女が利剣と蛇を噛む犬とを連れて自ら蛇穴に趣き之を退治した類話を載せ、幽怪録にも代国公郭元振が晋の汾を過ぎつた折、毎年処女を献ぜしめた烏將軍を追ひ求めて之を斃したところ大猪を得た類話を載せる。但し、叙上の二話が本語に直接の影響を与えたかどうかは未だ詳かでない。むしろ類型説話としては、かの法明（妙）童子の原話の如きが近いものというべきか。

（『日本古典文学大系』64）

2 本話の典拠は未詳。ただし、『宇治拾遺物語』一一九は同文的同話で、両者は同原拠とみられる。東国出身の勇士が生贄に指名された娘の身代りとなり、飼ひ慣らした犬を使って美作国中山の猿神を退治した話。男が娘と夫婦になり、その地に住み着いて繁栄したという結末は、この種の説話の定型的な結び。いわゆる猿神退治の話として類話はきわめて多く、昔話としても各地に伝えられる。広義に解して人身御供譚という見地に立てば、記紀にみえる八岐大蛇退治や、ギリシャ神話のペルセウスのアンドロメダ救出譚にも通うものがあつて、その歴史

は古く、分布は国際的といえよう。

〔日本古典文学全集〕<sup>69</sup>

3 出典未詳。ただし、宇治拾遺物語・119は同源とみられる。また、これらと同様の説話は続く第8話にも収められ、昔話や伝説としても全国に広く分布する。『日本昔話大成』256「猿神退治」参照。〔新日本古典文学大系〕<sup>68</sup>

4 東国出身の某が生贄に指名された娘の身代わりとなり、飼ひ慣らした犬を使って美作国中山の猿神を退治した話。男が娘と夫婦になり、その他に住み着いて繁栄したという結末は、この種の説話の典型的な結び。いわゆる猿神退治の話として類話はきわめて多く、昔話としても各地に伝えられる。近世、岩見重太郎に付合した伝説にも展開する。

〔新編日本古典文学全集〕<sup>67</sup>

これらの研究史を踏まえて『宇治拾遺物語』から『今昔物語集』を比較すると、次のような特徴を見出すことができる。

(1) ②に『今昔物語集』でも生贄を祭に献ずることは同じで、⑦⑧⑨祭祀形態と同様であるが、生贄に指名されて後の一年は「養ヒ肥シテゾ、次ノ祭ニハ立ケリ」とある。これは『今昔物語集』の独自異文である。

(2) ④「前ノ世ニ何ナル罪ヲ造テ、此ル所ニ生レテ、此ク奇異キ目ヲ見侍ラム」、⑬「前生ノ果ノ報ニコソハ有ケメ」などは、『宇治拾遺物語』とはば表現を共有する。ただし話末評語⑭が置かれることによって、『今昔物語集』独自の③「事ノ縁有テ」と、『宇治拾遺物語』と共有する④⑬などがすべて、因果律によって説明する仏教説話集としての『今昔物語集』の特質を示している。

(3) 『今昔物語集』では、⑥男は飼育していた二匹の犬を、猿に攻撃するよう訓練し、⑩猿を食い殺してしまう。犬が決定的な役割を演じるが、『宇治拾遺物語』では、東人は刀を用い、犬の援助を得て猿を追い詰め、とどめは刀を用いている。

(4) 『今昔物語集』でも横座の猿は、大きな化物という意味で『宇治拾遺物語』と同じである。

(5) 『今昔物語集』では、⑪猿の背後の神格が「官司」に憑依して託宣する。『宇治拾遺物語』は官司と神主を分けている。神主は、憑依する資格を備えたものとされている。『宇治拾遺物語』のほうが、神と人との契約を『今昔物語集』よりも原形的に描いている。

(6) 『今昔物語集』も⑫誓約をもって生贄を廃止しているが、⑭『今昔物語集』が生贄そのものを廃止しているのに対して、『宇治拾遺物語』は生贄を人から鹿・猪へと変化させたことをいう。

さて、『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』との比較は、同一説話相互の比較を基本とするが、『今昔物語集』の配列の問題を参考にみておきたい。この問題についてはすでに国東氏が、二話一組の構成を指摘されている<sup>80</sup>。『今昔物語集』にはなぜ類似説話が多いのか。

今、次の巻第二六「飛驒国猿神、止生贄語」第七を参看しておきたい。

今は昔「仏ノ道ヲ行ヒ行僧」がいた。行く当てもなく飛驒国まで至った。瀧のもとに至り、崖を登ると、「物荷タル男ノ笠」を着た者に出会う。男が瀧の中に入って行くので、僧は付いて中に入ると、人家があった。「浅黄上下着タル男」が僧を引き止め、大きな家につれて行った。僧は彼等を「鬼」と思い、自分を食べようとしている考える。男は僧に「魚・鳥」などを供した。僧は家主から「年廿許ナル女」を与えられ、妻とする。やがて妻は悩み始め、夫の僧はもっと食べて太るによう言われる。夫が妻に問いたですと、妻は「此国ニ験ジ給フ神」が「人ヲ生贄ニ食フ」習いがあり、夫を引き止めたのは生贄にするためだったと告白する。生贄を献ずることは、「生贄ヲバ裸ニ成テ、組ノ上ニ直ク臥テ、瑞垣ノ内ニ搔入テ、人ハ皆去ヌレバ、神ノ造テ食トナム聞」と答える。「瘦弊キ生贄」を出すと、「神ノ荒テ、作物モ不吉、人モ病、郷モ不静」という事態がおきるといふ。夫が

妻に神の姿を尋ねると、「猿ノ形」であるという。夫は刀を用意させ、隠し持つ。生贄を献ずる日、男が行くと山の中に「瑞垣」を廻らした「宝倉」がある。そこに「饗膳」が並べられており、多数の人が「着座並タリ」であった。人々は「舞楽ビ」した後、男を裸にして組板のうえに乘せ、「組板ノ四ノ角ニ櫛ヲ立、注連・木綿ヲ懸ケ集メテ、搔テ、前ヲ追テ、瑞垣ノ内ニ搔居ヘ」る。

男が宝倉を開けると、「大キサ人計ノ猿」であった。猿が生贄に向かつて切ろうとすると、男は刀を持って猿を取り押さえた。男は猿に向かつて「己ハ猿ニコソハ有ケレ。神ト云虚名乗ヲシテ、年々人ヲ噉ハムハ、極キ事ニハ非ズヤ」と詰問した。男は「神ナラバヨモ刀モ立ジヤ。腹ニ突立テ試ム」といい、男は、猿が今後「祟ヲ成シ、不吉事ヲモ至サバ、其時ニナムシヤ命ハ断テムト為」と誓約をする。男は猿の宝倉を焼き討ちにする。「極キ神ニモ増タリケル人」と家主の誉め讃えた男は戻つて来て、神と言つて生贄を要求していたことは「糸奇異キ事」であり、「此ハ猿丸ト云テ、人ノ家ニモ繫テ被飼テ人ニノミ被接テ有者ヲ、案内モ不知シテ、此ニ年来生タル人ヲ食セツラム事、極テ愚也」と評する。「大領」である家主のもとに「猿丸」を連れて行く。男は猿に再び猿が「神ト云虚名乗」をして人を食うことを改めよと求め、今後この辺に姿を見つけたら必ず射殺すぞと脅して杖で叩き、「猿ヲバ四年祓負セテ担、追放」した。男はその郷の長者となり、妻と住んだ。これを考えると、僧が迷い行き、生贄を廢し、自分もそこに住んだというのは、「皆前世ノ報ニコソ有メトナム」語り伝えているという<sup>89)</sup>。

これを見ると、巻第二六第七は昔話「猿神退治」でも、いわゆる「猿の経立」型や「隠れ里」型と呼ばれる亜型である。例えば、

(1) 巻第二六第七は東人が生贄となる娘の身代わりになって退治者になるが、巻二六第八は、東人が太らされて

生贄にされて退治者となっている。卷二六第八では廻国聖である。

(2) 卷二六第八は、妻となった娘が男に、神が生贄に満足しなければ災いのあることを説明している。

(3) 卷第二六第七も、祭祀の仕掛けを説明しているが、卷二六第八は祭祀の形態についてより詳細に説明している。

(4) 卷二六第八は、猿の分際で神を僭称することのおほけなさを難じている。「神ニモ増タリケル人」云々とあつて、靈格の高さをいう。『宇治拾遺物語』が神の託宣によつて護り神となることを誓約しているのに対して、『今昔物語集』は人が神を僭称する猿を追ひ詰めて誓約をさせている。

(5) 「猿ヲバ四年祓負セテ担、追放」したという。人に危害を加えないように追放するところに日本的な解決法のひとつがあろう<sup>60</sup>。そして卷第二六第七も卷二六第八も、『宇治拾遺物語』と異なり、生贄を廃止している。先に見たように正教としての仏教にとつて生贄は邪宗の祭祀に他ならないからである。恐らく「贄」よりも「生贄」とは、生きながら贄とされることを強く意識させた表現である。「生贄」とは、漁りした海幸や採った山幸を調進する「供物」の感覚とは異質である<sup>61</sup>。

昔話の話を基準にすると、『今昔物語集』卷第二六第六と卷二六第七とは、異なる話型と見える。ところが話型の概念を緩やかにとると、同じ話型を共有するといえる。つまり話型の取り出し方によつて説話分析は可能性を開くことができる。



(六) 昔話「猿神退治」の話型

それでは『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』の研究にとつて、昔話「猿神退治」はどのような意味をもつのか。そのためには、現在に至るまでに採録されてきた昔話資料を参看する必要がある。そこで次に、説話分析のために対照させる昔話について、話型の検討を加えることにしたい。

昔話「猿神退治」の先駆的で代表的な考察が、永田典子氏の研究である。永田氏は「村人に人身御供の厄難をもたらし化物を退治する話」として「猿神退治」と称する昔話、二五八例を考察の対象とする。永田氏の主要な論点は、まず、「化物退治の前提条件である厄難の最も多い示例は人身御供の風習」を二五八例中、一九四例に認める。そして「古事記」「日本書紀」の「ヤマタノオロチ退治神話」に認められる「女性司霊者としての性格が生贄に付与されていること」を指摘する。さらに、「生贄となる者」が「特定の家の娘」に限られており、「その家が司祭権を掌握していたため、神への奉仕者として娘が生贄になったと考えられる」という<sup>62)</sup>。

また永田氏は、昔話に見える「しつぺい太郎が怖い」というモチーフが、二五八例中、一〇〇例に認められることをいう。この「化物を退治する犬の名」は「全国的な一般名を求めることは難しいが、各地域において特徴的なものを認めることができる」という。特に「長野の信濃の犬が登場する事例」の多くが「駒ヶ根の光前寺に関係する伝承である」ことをいい、「静岡の『猿神退治』に登場する犬が全て所在地を信州とするのは、光前寺の義犬と無関係ではあるまい」という<sup>63)</sup>。

唱え言の表現にしても、昔話においては犬の名前にしても、伝承の地域的基盤の違いに応じて変化は生じるであら

うし、固有名詞は互換性をもつといえる。問題は、この奇妙な唱え言が、化物を退治する不可欠の契機として機能していると考えられることである。

さらに永田氏は「猿神退治」の「古典文献資料」として『今昔物語集』巻第二六第七、第八に触れ、

このうち美作国の話には犬が登場して猿神を退治するが、それは狐師の援助としてであり、猿神退治の主体は飽くまでも人間である。ところが、現代の民間伝承ではこの退治譚の系統を引くものは少なく、動物の活躍に焦点を当てた事例が多い。

という。また、「結末」について、

『今昔物語集』の方の結婚の要素には重要性が認められるが、民間伝承ではこの要素を欠くものが約九割あり、化物退治の結果としての結婚は余り重視されていない。

という。そして、昔話は伝承の形態において「様相を異にするが、主要モチーフとその配列順序は保たれている」として、

「猿神退治」も犬を祭神とする神社の縁起になったり、又人身御供の風習を特定の土地と結び付けたりして、伝説的色彩の濃い伝承になっているものがあるが、それらから固有名詞を取り除いてしまえば、説話構成の同じものが全国的に分布する。

と述べて、「化物を退治する動物の有無は『今昔物語集』の二話の猿神退治譚において認められ、動物が登場するものではないものは、平安時代末期から並行して伝承されていることになるが、果たして『今昔物語集』の猿神退治譚は現在の民間伝承の母体となっているのであろうか」と、文献説話と昔話との関係については結論を留保されている。

私は『宇治拾遺物語』の説話を分析する上で、文献資料としての『今昔物語集』と比較するだけではなく、音声言語による昔話の採録資料を参照することにした。したがって昔話それ自体の研究とは切り口を異にする。

そこで私は、改めて採録資料を調べ直した結果、昔話『猿神退治』に「しっぺい太郎」のモチーフがあるかないかという永田氏の問題の立て方とは異なり、昔話『猿神退治』は、話型から見てくつきりと二つの亜話型に分けることができる、という事実から出発したい。

すなわち昔話『猿神退治』の亜話型のひとつは、(1) 刀に象徴される武力をもって化物を打倒し、正体を暴くという話型である。もうひとつは、(2) 唱え言の中に、生贄を要求する神格的存在を打倒する援助者の存在を知る契機が隠されていることを見抜き、援助者を探して神格と見えたものを打倒し、その正体が化物であることを暴露するという話型である(別表「昔話『猿神退治』分析表」参照<sup>四</sup>)。採録事例は、おのずと次のように分類される。

I 武力行使型

II a 唱え言による謎解き型

II b 唱え言による謎解き型と武力行使の複合型

III 混合型 唱え言は示されるが、武力行使によって化物を退治する話型

IV その他

つまるところ、これらを見ると、本説話は(1)の系統に属することが明らかである。

そこで、『宇治拾遺物語』『今昔物語集』の説話が設定する美作国に近い事例として、岡山県付近を採録地とする事例を任意に三例挙げ、昔話の特質を明らかにするとともに、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』の説話の特質について考察を加えたい。

昔話の一例を挙げると、次のようである。

(a) 『丹波和知の昔話』の事例

むかしむかしなあ、千年ほど昔の話やけどなあ、おつかん林のこわぎちゅうとこになあ、権現さん<sup>①</sup>という山があつてなあ、ときん山<sup>②</sup>つていう山があつてなあ、そこは高い高い山なんやな。その山に登つたらなあ、加賀の白山が見えるちゅう、高い高い山なんやな。そこに権現さん<sup>②</sup>が祭つてあつて、その下に七十軒ほどの家が、百姓の家が山の中やけどあつてなあ、駅へは六里も行かんなんちゅう遠い不便なとこなんや。

千年ほど昔のことやけどなあ、一年に一遍<sup>③</sup>つ屋根に白い矢<sup>や</sup>が刺さるんやて、そのどこの娘さん<sup>④</sup>のある家に、その家に、矢が屋根に刺さつたらその家の娘さんは、その権現さんへ、桐の木の白木の箱へ載せて、入れて、ほしてみんなが荷<sup>に</sup>て行かなんだら、村中恐<sup>⑤</sup>しい祟りがあるちゅう、言い伝えになつとつたんやそうな。

ほんで、そこへ、知らん間に、夜<sup>よ</sup>さりの間に白羽の矢が立つとるんやつて。ほんで怖<sup>⑥</sup>いさかいに娘さんを早よう片付けることにしやはるのんやけど、なかなか、そう早よう片付けるいうたかて、もう十六ぐらいになつたら昔のこつちやで、早い人はもう十三ぐらいから、嫁はんにやつたけどなあ、ほんでも、今と違うて、やつとやつと、子を産む、五人も六人も子を産む、時代やさかいになあ、ほんでそねえしとつたら、ほしたら昔、旅の人<sup>⑦</sup>が強い強い人旅の人が通るかかつて、「一夜<sup>ひとよ</sup>さ泊めてくれえ」て言わはつてそしてまあ来なはつたもんやさかい、ほんで、「ほんなら、いつもやつたら泊めてあげるけえど、今日はうちに実は取り込んどることがあるさかに」。

お母さんもお父さんも目泣<sup>めえ</sup>きはらししてなあ、してはんなり、どえらい強い侍さんやつたんやつてなあ、それ

が。平家の落武者やったらいう話やつたけどなあ、そかその人が、「それは、どういうこっちゃ知らんけど、一  
遍話してみないなあ」いうて言うたら、「ほんなら話すさかい、聞いとくれなあ」言うて、ほしてまあ、「実はう  
ちの屋根に昨夜、白い矢が刺さつて、人身御供に連れて行かんならんで。ほんで人身御供に連れて行つたら、も  
う、生けつて戻る氣遣いは無いんやはかいに、こわい神さんが居やはつて、ほんで、村中の人に送つてもうろ  
て、そして、そこへ荷て上がつて、高い、加賀の白山が見えるぐらいのとこやで、ずいぶん高い山や、そこは。  
ほんで、今日は行かんならんさかいちゆうて、白装束してなあ娘さんを、白木の長持に入れて、担いで上がつて  
ほしてそこまで持つて行つたら、そこに置いといて、たあーと後も見んと戻つて来やはるのやてえ。ほんで悲  
しい」ちゆうて泣いて、「ほんなやつたらしやないで、今夜はわしが代りに、身代りに行つてあげるさかい」ち  
ゆうて、娘さんの代りにその長持の中へその侍さんがはいつてなあ、ほして荷て上がつてもうろて、行かはつた  
とこが、夜なかになつて、丑三つちゆう時になつたらなあ、ごつい風が吹いて、大きな音がして、ほして侍さん  
は刀あ抜いて長持の中に坐つてはつたやけど、はいたら、ミシリミシリいうて、そこへはいつて来て、ほして、  
「しんぺいとうぎに知らせまいぞや」<sup>⑪</sup>つて言つたちゆんやな、一方の人が。ほしたもう一方の人が、「ふうん、  
しんぺいとうぎに知らすまいぞや。(Ⅰ)  
しんぺいとうぎに知らせまいぞや。(Ⅱ)  
しんぺいとうぎに知らせまいぞや。(Ⅲ)」

つて、いうて、言うとする声がはつきり聞こえたちゆう、長持の中へな。しんぺいとうぎちゆう人は、どえらい強  
い人らしいけど、自分はしんぺいとうぎではないんやけど、しんぺいとうぎに知られたら命が無いと、いつて言  
うて、そういうふうに着うて話して、ほいて、「毎年毎年の人身御供御馳走になろうぞ」つて言うて、長持の蓋

をあけると同時に侍さんがとんで出て、ほいてしたら、そら、からだ中毛むくじゃらなもんが、三匹、<sup>⑮</sup>人とも畜生ともなんと訳の分からんもんが二つ、上から襲いかかるなり、侍さん刀持つるもんやで、それと、ちょうちようはつしと切り合いして、ほして、しまいには、なんと訳の分からん大きな化け物が、二つが逃げて行つたなり、侍さんは下だつて戻つてきて、村へ逃げて戻つてきたつて。そしたら村の人が、びつくりしてなあ、その娘はおるなり、侍さんはそんなことやつて、みんなが知つたわけや。そういう神通力のあるもんやつたら、もう化けてはいったことを知つとるかも知れんさかいに、ほんで内緒でなあ、家内の人だけでそういうふうにして、わしに委せえちゆう言わはるもんやで、その侍さんはいつて行つたわけやつたんやなあ。ほしてまあしやないで、その人が、

「もう、しんべいとうざちゆう人を捜すことより、<sup>⑯</sup>この村を救う道は無いんやはかいに、わしがこれから、しんべいとうざちゆう人を捜すさかいに、来年の人身御供までに、しんべいとうざちゆう人をわしが捜すさかい」ちゆうてなあ、その侍さんが、その村を毎日毎日、捜して、隣の村まで行くやけど、しんべいとうざちゆう人がおつてないんやつてなあ、ほんでもう、尋ねあぐねて宮はんの石段に腰かけて、ほして煙草のんで、精も根も尽きはてて、もう日にちも追つてくるなり、弱つとつてやつたんやつて。ほしたら、十ぐら<sup>よ</sup>いの男の子が、大きな大う連れてなあ、

「しんべいとうざ来い来い。(I)」

しんべいとうざ来い来い。(II)」

いうて言うのと、その犬が尾を振つて来るのやつて。へかその人喜んでなあ、「これはしんべいとうざちゆう犬か」ちゆうたら、「しんべいとうざちゆう犬か」ちゆうたら、「しんべいとうざちゆう、これは大や。おじさん、この

犬はなあ、強い強い、そらあ何者にも負けへん強い犬やで」って、その子が言うたちゅうて。「ああ、うれしい。ほんならその犬分けてくれへんか」言うたら、「よう分けん」言うんやつて。「これは、わしが生まれる前から、うちにおる犬やさかい、ほんなもん売つたりなにはようせん」「ほんな一晚だけでよいで貸してくれえ」言うてなあ、—その人びつくりしてなあ、人やと思うとつたもんやで、—ほいたらこれこそ天の助けや思うて喜んで、そかその家ゑに戻つて来て、そこに犬いぬ飼かひうて待機して待つとつたところが、何日ぶりか知らんけえどまた次の家へ白羽の矢が立ったちゅう。へか、「今度はもう負けへんぞ」ちゅうて、ほして、その犬は今度長持こんだい入れて、自分分は長持の中へはいらんなあ、隠れて、またそこへ同じおんなようにして、上がつて行つたんで。ほしたら、また、同じこと言うてなあ、

「しんぺいとうぎに知らせまいぞや。(Ⅰ)

しんぺいとうぎには知らせまいぞや。(Ⅱ)

しんぺいとうぎに知らしたら、こちや命が無いぞ。(Ⅲ)

ちゅうてなあ、はつきりまた聞えるんやつて。ほいて、メリメリメリメリ、ひどい嵐の中を、メリメリメリメリ、長持の蓋あ開けたら、開けた拍子に、しんぺいとうぎがとび出てなあ、ほいで、その犬と、その人と—その侍さんやなあ—両方であまりおうて、犬が咽笛に食いついたりして、そしてようようにしとめて、人身御供⑩いうことは、それ以来、—まあ村へ戻ってきたら、どいらい喜んでもろうてなあ、大喜びしてもろて、ほいてまあ、その侍さんは去いんだんかどうしたんか知らんけど、犬はほとんど瀕死の重傷でなあ、傷だらけの血だらけになつたやつを負うて戻つて、ほしてまあ、祭⑪つて、その村はそれで助かつて、それ以来白羽の矢も立たんなり、殺したもんは、ひひり猿ちゅうもんで何百年生けつたか知らんけど、もう、ものを言うようになつとつた。昔話

やで—猿がものを言うたちゆうこともないやろけども、ひひり猿ちゆうもんが二匹、雄と雌とやった。年を何年もくれた大きなひひり猿やったちゆう話。しまい<sup>80</sup>

昔話では、生贄を要求する存在が、最初、①②「権現さん」として設定されており、後に⑬のように、実は化物であると正体が明らかにされるところに昔話独自の展開がある。ここに説話との相違点の一つがある。

次に生贄は、③にあるように神の側から要求される。⑭村にとって生贄が不可避であるとされる。この事例では④にあるように、娘の家がどのような階層、家柄であるかは不明である。他の事例では、庄屋などと特徴付けられていることが多い。生贄の要求は⑤⑥⑨にあるように、村に祟りが齎されないことと引き換えになっている。⑨には「こわい神さん」と表現されている。昔話では、生贄は村落共同体の存立のために必要不可欠なものと語られている。

昔話において生贄を廃する存在は、⑦のように「旅の人」とされる。昔話では生贄は⑧にいうように「人身御供」と表現されている。祭祀の形態は、⑩に示されている。説話に比べてその説明は簡略である。⑮のように「旅の人」の活躍によって「人身御供」は廃され、⑯殺した猿を神と祭ったという。

昔話が説話と構成においてもうひとつ異なる点は、⑪旅人が生贄を廃するために、生贄を要求する存在の正体を明かすために援助者を必要とすることである。⑫はその説明である。

とりわけ昔話の特徴は、旅人がその援助者を、唱え言の意味を解き明かすことによって探し出すことである。その唱え言は、別表における他の事例を重ね合わせると、「名前＋知らせるな（聞かせるな）」という形式をもつことが分かる。つまりこの昔話における状況の転換の仕掛けは、唱え言による謎の呈示と、謎解きという構造にある。

かくてこの昔話の構成は、⑪次のような繰り返し表現によって具体化していく。



(反復1)

しんべいとうざに知らすまいぞや。(I)

しんべいとうざに知らせまいぞや。(II)

しんべいとうざに知らせまいぞや。(III)

(反復2)

しんべいとうざ来い来い。(I)

しんべいとうざ来い来い。(II)

(反復3)

しんべいとうざに知らせまいぞや。(I)

しんべいとうざには知らせまいぞや。(II)

しんべいとうざに知らしたら、こちや命が無いぞ。(III)

このような繰り返しによる展開に音声言語による昔話の語りの特質が現われている。

この事例では犬の名である「しんべいとうざ」の意味は不明である。また、途中にそれが人か犬か、語りの混乱している箇所があるが、原理的には犬と見做せる。

昔話の結末は、援助者である犬の活躍によって、生贄を要求する存在が「ひひり猿」であることを明らかにする。そして「人身御供」を廃止させるに至る。稲田浩二氏は採録の末尾に「祭つて」は「猿神を」祭つて」と注している<sup>80</sup>。この箇所、文脈から瀕死の犬を後に祭ったと見ることもできる。犬を祭った場合、古い神を捨て、村を救った神として犬を祭ることになる。一方、猿神を祭った場合、稲田氏の理解に従えば、猿を神と祭ることによって、「そ

の村は助かつて」いる。古い神を捨て、新しく神を据えなおしたといえる。いわゆる、崇り神を祭祀することによって護り神に転換させるといふ話型は、ここにも見てとれることになる。

(b) 『蒜山盆地の昔話』の事例

次の事例は、様式的に整えられた語りであるというよりも、語りのキイになる言葉を確かめ、確かめ語っていると見える。それだけに昔話の構造があらわになっているといえる。

昔、あるところへ、神<sup>①</sup>さんに人を供えにやならん<sup>②</sup>いう、次い次い言い伝えがある、まことに怪しいお社がありまして、それで毎年その村の娘を一人づつ五穀豊穡の祈りい、白木<sup>③</sup>の大けな櫃<sup>なぐ</sup>の内い、白絹の着物を着せて、そが<sup>④</sup>して若い二十歳未満の娘を、若い娘をなあ、生娘<sup>まをすめ</sup>を供えにやいけん<sup>⑤</sup>いうことが。それを供えなんだら、その年やあ旱魃<sup>⑥</sup>が来る、そこから水が<sup>は</sup>出<sup>ち</sup>りやあ大洪水が来るいうようなことで、餓饉<sup>⑦</sup>が来て、その村の者<sup>もの</sup>がほとんど瀕死の状態になるような、災害<sup>⑧</sup>が起きるいうことから、そえで神様に娘を一人供えりやあ立派な豊年になつて、秋の稔<sup>⑨</sup>りが得られるというようなことが、ずっと続いて、まあ毎年、今年やああそこのが取られ番だ、今年やあここのが供え番だいうことになつて、毎年、一年に一人づつ、悲しい思いをしようつたけれども、やつぱり村のためなら仕方がない、供えにやあならん<sup>⑩</sup>ということでもあり、進んででもせにやあみんなが食えんということだけえ、まあ別にめつそう悲しみもせず、村のためだ思つて行きようたわけだ。それが何年も続きようりやあ、昔にやあよけい子ができつたいうてみて、二十歳<sup>は</sup>いなりやあ、籤引きでなあ、そこへ供えにやあならんいうことへなりやあ、親の身になつてみりやあ血の涙が出る。人にやあ言われんし、いうような年が何年も続いて行きようたそうな。

ところが、ある年のこと、一人の旅の六部⑪のような者がやって来て、その村へ日に行き暮れて、「泊めてくれんか」言うて。「こかあ貧乏で、なかなか旅人を泊めるいうようなこたあできんけえど、まあ六部さんなら、大した御馳走ごちそうはないけえども、うちの者が食べるような物で堪こえらつしやあ、泊めて進こじよう」いうことで、泊まらしてもろうておつたところが、毎年供えにやあならんいうような悲しい、昨年はうちの娘を供えた、今年あここの庄屋の娘さんが籤くじい当つて、供えにやあならんいうことへなつて、両親の男の子あるけえど、ひとり娘だ。それでも、次い次いみんなが供えて来たで、なんぼう庄屋さんでも仕方あない、今年やまあ供えにやならんいうことで、泣きの涙でその日の来るのを待ちようるわけだいうような話ゆうしたさうな。そしたら、六部さんが、「大変そりようまあかわいさうな。まあそがな生娘きむめを一人ずつ供えにやあならん。そえで、そりやあ娘やあどがいなつてしまやあ」いうて言やあ、「二度と戻つてこん」いうて話いて聞かせるさうな。「どうもそりやあ不思議なことだ。諸国を遍歴するけえども、こがな話はめつたにない。そりやあわしが法力ほくりきゆうもつて助けに進こじよう」いうて話いたさうな。そうしたら、そのお爺さんお婆さんが大変喜んで、「そえでまあ、それが適うたら、これから先いは供ええでも良よえようになりますかな」いうて言うた。「そりやあ、そのこたあいよいよ向むかこうてみにやあ分わからん。いかなることができてるか、分からんけえども、わしが娘の代りいなつてなあ、その人身御供みみけうになつてあげる」いうて言うたさうな。

そえから、庄屋さんとこへ行つてそのことを話いたら、大変喜んで、「まあそがなとこへ泊めちやあならんけえ、どうぞその旅のお方、家うちに来て泊まらつしやれ」言うて、そえから庄屋さんの家い案内してもろうて、下にも置かんような大けな大もてなしで、御馳走ごちそうをしてもろうて泊めてもろうて、いよいよ晩ばんげへ供えるださうなが一明日あしたの晩にやあ大山おほやまの山の奥のお宮い、白いお櫃ひつい入れて、娘さんを供えにやならんいうことへなつとる

で。六部さんが一つの犬連れとつた。⑮ うえで、犬連れでその娘の装束うわが着てなあ、一切の物を身い纏うて、そがして刀あ一本持つて数珠を持つてなあ、そがして箱の中へ入つて、そこから庄屋さんの娘さんも、親も村の者も大変喜んで、喜んだけえど、「六部が明日あ死骸へなつてしまうだ、かわいそうに」言うて泣く者もあるし、まあそういうことで、嬉しいやら悲しいやらで担いで行つて、正面に供えといて、みんな恐といけえ、とつとことつとこ、後を見られんだいうて、供えたぎり、どんどん、どんどん、山あ皆下だつてしもつた。

そえから、しーんとした拝殿に置かれておつたところが、丑の時いうか、よほど時間がたつてから、⑯ なんだか後の方が、ドゥーンというような音がしだいて、そして、いかにも不気味な何物が出て来るか分からんような、まことにすさまじい恐しい音がする。そがいしうがところが、櫃がガリガリ、ガリガリ、かぐるような異様な音がしだいたけえど、そがいしようたところが、なんかガヤガヤ、よけいよけい連中が出て来て、そがして前祝いに踊ゆうしよういこといなつて、白木のお櫃を真中へ置いといて、櫃の中あ入つとるけえ、外の様子あ分からんけえど、なんでも五、六人どまあ居るような、なんだか、ガヤガヤ、ガヤガヤ言い、わけの分からんことを言いい言いなあ、まあ言うことが、

「大和の国のすつぽこ太夫という犬に、このことを知らせな、スットコトン」いうことだきやあ分かるだ。そがい言うて、その回りを、てんでこてんでこ、踊つて回るそうな。

えらいことを言う、こりやーすつぽこ太夫いう犬は六部が連れとる犬だそうな。うえでまあどえらい逞しい犬だつただそうな。そりよう言うもんだけえなあ―はて、こりやあどうも不思議なことだ思つて、どつちも櫃の中へ固唾う飲んで、刀あ抜いて待ちようたわけだ。そうしたら、そのお櫃を毎年のことだけえ、バリバリ、バリバリ、ぶちめいで、そがしたところが、刀あ抜いてしゃつと出て来ただけえ、向こうはとちめんぼうをかやいてな

あ、さあ七転八倒になってきて、向こうは嘯みついて来る。こっちは切りつけて、大けえなまあ何十年経ったもんか知らんが、まことに大けな狒狒が出て来て、櫃い飛び付いて来ただ。そえから犬が飛んで出てなあ、なんのこたあない、大けな狒狒い向けて、小まい狒狒もおったけど、大けなやつ向けて、喉へ向けてかぶりついて、とうとう格闘の末、人間はよう退治なんだけど、犬が狒狒を退治した。そりやあ大けな苔の生えるような狒狒だった言うてなあ。それがまあ、長年の伝説いうてどういう訳でもなったもんか知らんけど、供えにやあならんことなつて、供えるのを狒狒が取つて食いおつた。

そえから、次い次の眷属う皆退治してもうてなあ、そがいしよる中に夜が明けてしもうて、やれやれ言うてほつとつたところへ、村の者がまた恐る恐る、「娘ならはや取られてしもうとるけども、六部うかわいそうなことをした」言うて、二、三人やつて来ただそう。やつて来てみりやあ、なんだかえらい深閑としとるけえ、見りやあ櫃あなんだかぶちがまたようなこといなるし、見りやあ六部はまめでおる。「どがいなことなら」言うて、恐る恐る様子う聞いてみたら、この六部が、でも化け物ではなからうということでな聞いてみたところが、「こういような具合で、昨夜やあ怪物が出て来て、お櫃の回りを踊をして回つた」言うてなあ、「そえからいよいよ向こうが蓋あぶちめえだけえ、出て見たらこの通りの大けな狒狒だった。これから先いはいこの狒狒はおらんけえなあ、ここへ人身御供うせえでもよからう」言うて、「これで安心して、みんなこえから供ええでもええ」言うて、「ように御祈禱しておいてやれえ」言うて。

それから後は人身御供うは無うなつた言うてなあ、その狒狒い退治てから<sup>68</sup>。

この事例も、①にあるように「神さんに人を供えにやあならん」しかも若い「生娘」であることを必要とする。神に生娘を供えないと、⑤⑥⑦⑧にあるように、「旱魃」「大洪水」「餓饉」というような「災害起きる」という。でな

ければ⑨「秋の稔り」が得られないという。⑩にあるように、この事例でも昔話では「村のためならに仕方がない」というところに、生贄が村落共同体の存続のために不可欠であったことをいう。前の(a)の事例もこの(b)の事例も、昔話では「生贄」といわず「人身御供」と表現されている。この「人身御供」という語句の成立がいつかはまだ調査が行き届かず明らかでないが、新しい表現ではないだろうか。

また、生贄を出す家は⑫「庄屋」とされ、生贄を廃する者は⑪「六部」とされている。それゆえに⑬「法力」で助けようとされる。また、犬は「六部」が連れてきたことになっている。

この事例も、唱え言を核として構成されている。すなわち、

大和の国のすっぽこ太夫という犬に、このことを知らせな、スットコトン

という唱え言があり、その解読がキイになっている。この唱え言はいささか散文化されていて、かつ、語りの中で唱え言が援助者としての犬を探すキイになっていないことは語りが崩れたものと見做せる。ただ原理的に謎解きであることは変わらない。謎解きできる者が「選ばれた者」である。また、本来は「すっぽこ太夫という犬」を探してこなければならぬはずであるが、この場合は⑮のように、「六部」のつれている犬であると合理化されている。そのために、謎解きや犬を探し出す手続きが消去させられている。

この事例も、生贄を要求する霊格は、最初①「神さん」として提示されつつ、⑯のように不気味な存在として正体を明かされる。すなわち⑱「この通りの大けな狒狒だった」と、最初はわけの分からないものが、実は狒狒であったというふうに、正体を明かす転換が仕掛けられている。この事例には⑰「犬が狒狒を退治た」というように「退治た」という言葉が用いられているが、古代・中世の語ではない。新しい語か、あるいは方言かもしれない。

いうまでもなく退治の後には⑲「人身御供」がなくなったという。ただこの事例の特徴は、敗れた神の意思表示がな

い。最後まで退治する者の側から語られている。退治する側が一貫して正義である。

(c) 『なんと昔があったげな』の事例

次の事例は、(a) (b) の事例のように謎解きによつて援助者としての犬を見つけ、犬の力を借りて退治するのではなく、武力によつて退治した事例である。これが『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』の説話と、同じ構成をもつ。

むかしむかしなあ、おさむれえさんがおつてなあ、あつちいあつちい行きようたところがなあ、村の人が大勢寄つてから、ヤイヤイヤ言うて、そうして、泣きようる人やこうおるんじやそうな。せえで、おさむれえさん、どうしたことかと思つてなあ、

「こりやこりや、あんたらあどねえんしたらなら」

いうたんじやそうな。そうしたところが、村の人がなあ、

「この上にお宮があつて、そのお宮の神さまが、毎年、人食いごくうとかいうて、人を供えて、そりよう取つて食べるいうこてえなつてなあ、せえで、毎年毎年、この村のお姉さんを一人ずつもつて行てすえるんじや。そうすると、夜うさり出でから、お化けが取つて食うんじやそうな。」

「そうか、そねえなことがあるんか。そんなら、そりやあかええそうなけえ、わしがその神様あ一つ退治してやろう。」

「そうかな。せえでもおさむれえさん、あんたにも取つて食べられるぞな。」「そりやあ食べられてもええけえ。わしが行て神様あ退治してやるけえ。どねえにして行きようたんなら。」

「そりやあなあ、毎年、大きな箱をして、その箱の中にお姉さんを入れて、みんなかてえで行て、お宮へ持つ

ていてすえとくなあ、そうすると、あくる日、行てみりやあ、いつの間に出て食うたんか知らんが、お姉さんがおらんようになってしもうとるんじゃけえ。」

「ふんそうか。そんなら、わしも一つ、箱の中へ入れてくれえ。」

へえから、村の人がおさむれえさんを箱の中へ入れて、ふたをして、そうしてナムアマダブツ、ナムアマダブツつうて、

「今日は、うみやあものを供えるんじゃけえ」

いういう、みんなつらがつて、お宮へ持つていてすえて、そうして、

「おさむれえさんが、今日は取つて食べられるんじゃなあ」

いういう、みんなうちい帰つたんじゃそうな。

せえから、あくる日に夜があけて、みんな来るいうこてえなつておつたんじゃけえども、おさむれえさんは、

「ほんとうに、神様が出て食べるじゃろうかな」

思うて、箱の中へじいとかこんで、待ちようても、なんぼうたつてもなんにも出てこん。「どうしたことじゃろうかなあ。こりやあ、うそじゃなからうかなあ」

思ようたら、夜うさり、夜なかな時になつてから、お宮の戸が、ギイーギイツいうてから、あくそうな。

「ありやつ、戸があいたけえ神様が出るんじゃろう」

思うて、箱の中から、箱のすきまから、じいっとおさむれえさんが見ようた。そうしたところが、お宮の戸がギーツとあいたかと思つたら、中から大きな大入道みてえなもんが出て、頭の髪が、大きな顔あして、キンカ頭で、そしてあごへ白え大きなひげを生やして、そうして、白え着物をきて、大きな下駄あはいて、コトン、コト



ン、コトンいうて出てきでえた。

「こりやあ出てくるぞ、きょうてえぞ」思うて、おさむれえさんが、箱の中から、すき穴からじいつと見ゅうたところが、ゴトリンゴトリンいうてから、こつちいこつちいやつてきて、箱の方へやつてくる。

「こりやあ、来たらきょうてえぞ」思うて、じいつと見ゅうたところが、大きな手をした、大きな大入道が、箱のへりい来て、箱のふたをずうつとこう、取りかけた。せえで、おさむれえさん、

「こりやあきょうてえ」思うて、下からじいつと待ちようて、上から大きなひげの生えた手を、ずうつと、こう、箱の中へつっこもうとしたけえ、その時に、おさむれえさんがその大きな手首うひつかめえて、キャツとひつつかめえたか思うたら、ピシャーンとへりいぶつつけた。そうしたところが、

「キヤーッ」いうて、そこでいがった。へえから、何じやろうかな思うて、ローソクへ火うともして、見たところ、大きなヒビ猿が、大きな目んくり玉あして、そして、舌を長えやつう出して、そこへ倒れて口から血うはくはく死んどった。

「そりやあ、こえつあひひ猿じゃな。神様がそういうことをするはざあねえ思うとつたが、ヒビ猿が化けとつたな。よしよし」

いうて、おさむれえさんが、そのへりいあつたむしろをそのへりいあつたむしろをそのひひ猿いかけて、ふたをして、また箱の中へへえて寝ようた。

そうしたところが、夜があけて、子供が学校へ行くようになって、明るう明るうなつたんじゃそくな。そうしたところが、村の人が、

「ゆうびやあなあ、おさむれえさんを神様へすえたんじゃあ。大方また、取つて食べられとるんじやろう。まあ

かええそんなことをしたぞなあ。ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」いうて、大勢大勢、夜が明けてから、村の人やおじさんや、おばさんが大勢大勢、お宮へ来たんじやそうな。来てみたところが、棺のふたがとれとる。

「そりやみい。おさむれえさんが取つて食べられとるんじや。まあかええそんなことを」いうて、せえから、その棺のへりい来てみたところが、おさむれえさんは、グウグウグウ、大きな大いびきうけて寝ようるそうな。

「ありや、おさむれえさんはお化けが取つて食べたんじやろうか思やあ、大きな大いびきうけて寝ようる。」

「おさむれえさん、おさむれえさん。どねえんことなら、夜が明けたで。お化けあ出りやあせなんだか。」「やあ、お化けあ出た。」「お化けが出たいうて、せえでも、おさむれえさん生きとりんさるが、どねえんしたんなら。」

「いやもうお化けあわしが退治てやつたんじや。」「どけえ、その退治たんなら。」そうしたら、

「そこを見い、むしろをはぐつて見い。むしろの下へおらあ。」

せえから、村の人が、むしろのへりの方を、ちよつとはぐつて、

「ああ、こりやあ、きょうてえきょうてえ。」「何がきょうてえ。死んどるんじやから、きょうてえこたあねえ、行て見い。」

せえからまた、つぎのおじさんがいて、むしろのへりう、そーろつとはぐつたら、大きな大きなひひ猿が、大きな目ん玉あして、舌も長えやつう出して死んどつた。

「やつ、このひひ猿めが今まで、うちらのお姉さんを取つて食ようたか。馬鹿なやつじや」いうて、みんなしてお猿をたたやあて、へえから、

「おさむれえさん、ありがとうござんしたなあ。そんならひとつ、よう退治してくださつたけえ、今日はうちらへひとつ、来てつかあせえ。」

せえから、あくる日、おさむれえさんを部落いつれて帰って、御馳走をして食べさしてあげたんじやと<sup>例</sup>。

この語りでは、「お宮の神さま」という神格が人身御供を要求するが、供えられた人を「お化けが取って食う」という。このままでは神と化物とは別の存在と見えるが、後を聞くとこの事例もまた、神格と見えたものが実は化物であつたという、昔話独特の転換を原理とすることが分かる。「神様」と信じていたものが、「大入道」であり、その正体は「ひひ猿」であつたという。ただ、この語りでは刀を用いず、単純に化物を捕まえて箱の縁にぶつけて殺してしまふ。まさに武力をもつてする「退治」である。

このように昔話「猿神退治」には、唱え言を核として、退治者として犬を発見する謎解きの構造をもつ話型と、犬を援助者として武力によって打倒する構造をもつ話型を認めることができる。昔話に、唱え言を核とする亜話型と、唱え言を核としない亜話型というふうに、截然と二系統が存することは、周知のように昔話「瘤取爺」「腰折雀」にも認めることができる。あるいは、日本昔話の幾つかに中国・韓国朝鮮半島から渡来した話型と、日本在来の話型が併存しているということをいうべきかもしれない<sup>例</sup>。

### (七) 話型における誓約

右のような考察を踏まえ、私は次に本説話が昔話「猿神退治」と話型を共有しつつ、唱え言のような具体的な仕掛けの深層において、転換を根底から支えている構造が何か、ということについて考えたい。それは本説話を原理的に支える話型の核となる誓約<sup>うけひ</sup>である。

誓約は、神話の枠組みに基いている<sup>例</sup>。風土記において、誓約を中心に据える話型がある。例えば、崇る靈格を誓

約によつて神として祭り、平穩を取り戻すという話型である。それは必ずしも、ヤマタノオロチ神話だけに還元できる性格のものではない。

誓約には次のような事例を見出せる。

① 頸の峯〔袖富の峯の西南のかたにあり。〕此の峯の下に水田あり。本の名は宅田なりき。此の田の苗子を、鹿恒に喫ひき。田主、柵を造りて伺ひ待つに、鹿到来たりて、己が頸を挙げて、柵の間に容れて、即て苗子を喫ふ。田主、捕獲りて、其の頸を斬らむとしき。時に、鹿、請ひて云ひしく、「我、今、盟を立てむ。我が死ぬる罪を免したまへ。若し、大きな恩を垂れて、更存くことを得ば、我が子孫に、苗子をな喫ひそと告らむ」といひき。田主、ここに大く恠異しと懷ひて、方面して斬らざりき。時より以来、子の田の苗子は、鹿に喫はれず、其の実を獲しむ。因りて頸田といひ、兼、峯の名と為す。

（豊後風土記、国埼郡）

② 姫社の郷、この郷の中に川あり、名を山道川といふ。其の源は郡の北の山より出で、南に流れて御井の大川に会ふ。

昔者、此の川の西に 荒ぶる神ありて、路行く人、多に殺害され、半ば凌ぎ、半は殺にき。時に、祟る由をトへ求ぐに、兆へらく、「筑前の国宗像の郡の人、珂是古をして、吾が社を祭らしめよ。若し願に合はば、荒ぶる心を起さじ」といへば、珂是古を覓ぎて、神の社を祭らしめき。珂是古、即ち、幡を捧げて祈禱みて云ひしく、「誠に吾が祀を欲りするならば、此の幡、風の順に飛び往きて、吾を願りする神の辺に墮ちよ」といひて、便即て幡を挙げて、風の順に放ち遣りき。時に、其の幡、飛び往きて、御原の郡の姫社の社に墮ち、更還り飛び来て、此の山道川の辺に落ちき。此れに因りて、珂是古、自ら神の在す処を知りき。

其の夜、夢に、臥機〔久都毘杵と謂ふ〕と絡塚〔多々利と謂ふ〕と、儼ひ遊び出で来て、珂是古を圧し驚かす

と見き。ここに、亦、女神なることを識りき。即て社を立てて祭りき。爾より已來、路行く人殺害されず。因りて姫社といひ、今は郷の名と為せり。

(肥前風土記、基肆郡)<sup>73</sup>

例えば①の神話を構成する事項を取り出すと次のようである。今仮に動作主と述語の組み合わせによって成り立つ説話の構成単位を事項 article と規定しておきたい。

- 1 鹿が苗を食べる。
- 2 田主は鹿を捕らえ、頸を切ろうとする。
- 3 鹿は盟を立て、命乞いをする。
- 4 田主が鹿を許す。
- 5 鹿は苗を食べず、実りを得る。

すなわち、免してくれたら護り神になる。免しなかったら祟り神になる、という二者択一が仕掛けられている。それが誓約である。②も同様である。この神話は、祟り神が人との間に対立を引き起こし、葛藤の果てに誓約をもつて新たな契約を結び直すという構造をもつ。災厄が誓約によつて祝福に転換するという話型に基いている。

この話型は、ここでは詳細な検討をする余地がないけれども、中国古代の『搜神記』や『白猿伝』にも共有されている<sup>74</sup>。並行する物語の古層をなす、神話の話型である。

そのようであるとすると、この神話は、『宇治拾遺物語』猿神退治の説話と同一の話型を共有していることが分かる。のみならず仏教的な枠組みを持たない『宇治拾遺物語』の方が、神と人との関係において原形的であるというこ

とができる。

# (八) まとめにかえて

今もし『宇治拾遺物語』の説話の生成過程というものを考えようとすると、次のような論点が考えられる。

(1) 『宇治拾遺物語』の素材となった在地の伝承とはどのようなものか。それは現在にまで伝えられている資料から、古代鎌倉期における素材としての伝承として復元できるのか。

仮にそのような問いを立てるならば、永田氏の指摘されるように、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』や関連する説話集を基盤として昔話が発生したのか、現代における昔話の前史をなす民間伝承を基盤として『今昔物語集』が成り立っているのか、なお不明である。

(2) 素材としての在地の伝承を復元できたとして、それがどのような経緯をもつて『宇治拾遺物語』に組み込まれるに至ったかは不明である。その間に、どのような媒介項があるのかわからないのかも不明である。

このような問いはまたどのようにも答え難い。そこでわれわれの取りうる方法として、どのようなものであるかは分からないにせよ素材としての説話が『宇治拾遺物語』に取り入れられたとして、説話集の編纂によって、表現としての説話の最終形が得られたと考える以外にない。特に、在地の伝承が都人の側からどのように変容させられているのかが問われる。

ただし、いわゆる伝播論は、残された文献の範囲内で連鎖を想定するわけであり、ついに蓋然性をいうにとどまる。典拠や素材としての甲から、説話集の説話としての乙へと伝播の道筋を関連付けることですべてが説明されたと

いう錯覚に陥るからである。結局のところ、成立論や伝播論は異伝として並行する説話群が話型を共有するという理解によって克服することができる。

すなわち、『宇治拾遺物語』の本説話を分析するにあたって、話型という操作概念<sup>⑧</sup>を媒介させる上で、説話と神話、昔話を対照させることが有効である。話型という概念を用いると、いうまでもなく院政期における『今昔物語集』と、鎌倉初期における『宇治拾遺物語』との間には直接の影響関係にはないとしても、同じ話型を共有していると了解することができる。したがって両者の比較によって得られる表現の異同と、昔話の表現を対象させることから『宇治拾遺物語』の説話のもつ意味を探ることができる。

そこで、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』における説話「猿神退治」を神話と対照させたときに、説話「猿神退治」の話型において転換の構造を担うのが誓約であることが明らかになる。

次に、昔話「猿神退治」を対照させる。これには二つの亜話型がある。まずひとつの亜型として、武力を行使することによって猿神を打倒する話型がある。さらに、唱え言に隠された謎を解き、猿神を駆逐する犬を探しあて、猿神を打倒するという亜型がある。これは中国の『搜神記』や『白猿伝』、さらに韓国昔話に認められる話型である。

説話を表現としての構成体と捉えるならば、そのような話型に対して、中山神という固有名詞が与えられる。これは歴史資料によって、説話の表層をなす歴史性の問題である。古代朝廷から見たときに、猿神は中央の神々の体系に組み込まれた神格ではなかった。在地の神格である。

さらに注目すべきは『今昔物語集』『宇治拾遺物語』の説話において、中山神は「猿丸」であると表現されていることである。いったい説話において中山神が猿だという表現は、どのようにして成り立つのか。中山神が猿であるということは、稲荷が狐であるということと果たして同じであるのか。説話は生贄を要求してきた神格を実は化物だっ

たと言挙げることによって、神の座から追い落し追放している。説話は、神の零落を語っている。

もし説話の伝える内容が事実だとすると、退治されたはずの猿が、津山にあつては現在もなお猿神としての信仰を集めていることは成り立たなくなってしまう。おそらく猿の形姿をもつて顕現する神格を信仰していたのは、在地の村落集団なのだ。猿神の祭祀者は在地の人々であり、支配者ではない。一方、中山神社の神がどのような霊格であるかは、支配者の交代によって変遷してきたといえる。残された文献資料が、中山神を鏡作命や大己貴命と記しているのは、中央政府が中山神をどのような神格と認識し、登録したかという問題である。あるいは在地の神々に、中央の神々の神名を冠させることによって、神々の体系化をはかり、宗教的支配を実現しているのである。繰り返せば、猿神退治の説話がなぜ中山神と結びつくのか。何よりも中山神社の主祭神が猿神であつたというような時代はあつたのか。猿神退治の説話は、美作津山において少なくともより強力な政治的神格の出現によって猿神が零落し、取つて変わられたことを踏まえていることになる。

そもそも猿神を「退治」したということは、在地の支配者の側からの理解であり、都からのまなざしによる理解と見られる。在地の村落の側に立つてみれば、猿神は新しい外来の神格の登場によって迫害を受けたのであり、落とされたとしても、在地にとつてなお猿神は神なのだ。ところが都人の編纂物である説話において、中山神は猿というのではなく、「猿丸」と蔑視されているのである。

また説話は神を猿と暴き、退治したというだけで、どのような神に座を譲つたとは記していない。説話は生贄を要求する存在が、正体は猿であつたというところに収束している。そのことは、「猿丸なりけり」という第一文に対応している。説話はこの「猿丸なりけり」という第一文を説明しているのである。

ここには中山神社の祭祀や神々の配置については知識を持たない都人の理解がある。いうならば蔑視と好奇のまな



ざしが働いている。もしかすると、美作津山の中山神社における神々の実際上の交代とは関係なく、口承であれ書承であれ、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』の共通の祖となる説話集の編者は、素材として「顕現する形姿を猿とする神がいる」ということを都において知り、誓約を核として猿神退治という話型をもって説話を構成したのではないかとさえ思えてくる。

池上氏は『今昔物語集』を対象として、昔話との関係について「中山神社と昔話『猿神退治』とが結びついたのは、ただたんに『其神ノ体ハ猿』であつたからではなく、同社の猿神に鹿贄を供える事実があつたことが大きな理由であつたろう」<sup>四〇</sup>と、生贄の事実を云々する。もはや問題は生贄が事実かどうかではない。

さらに言えば『宇治拾遺物語』は、男が娘の親に対して述べているように命は大切だとする立場から、猿神を追いつめて猿に生贄の恐怖を味あわせてやろうといったように、生贄の是非よりも、他人の身になって物を考えることができるか、と問うている。いうまでもなく『宇治拾遺物語』の編者にも地方に対する好奇心な目があり、生贄は奇祭と映つたであろう。<sup>四一</sup>『宇治拾遺物語』は「序」にいうように本説話をわが「日本の事」としつつ「おそろしき事」と捉えていたであろう<sup>四二</sup>。共同体の存続を優先し、そのための犠牲を必要とする在地の論理は、個人の救済を追求してきただ都市の文学とは相容れない「蛮習」と見えたであろう。そこでは説話の話柄や話型は『宇治拾遺物語』の主張しようとする主題のために編者によって利用されているとさえいえる。

注

- (1) 廣田收「『宇治拾遺物語』表現の研究」笠間書院、二〇〇三年、廣田收「『宇治拾遺物語』『世俗説話』の研究」笠間書院、二〇〇四年、並びに廣田收「『雑談集』地名としての『稻荷』『朱』」第四八号、二〇〇五年三月。
- (2) 三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年、二四九～五六頁。なお、私に表記

を改めた箇所がある。

- (3) 中島悦次『宇治拾遺物語全評解』有精堂出版、一九七〇年、三八九―九〇頁。
- (4) 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九七三年、三四一―二頁。
- (5) 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』新潮社、一九八五年、三五〇頁。
- (6) 三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年、二五六頁。なお末尾に掲載されている「類話一覽」には、同話(一)として『今昔物語集』卷第二六第七、同話(二)として該当するものなしとし、類話・関連話として、『今昔物語集』卷第二六第八、『私聚百因縁集』卷一第五、卷一第二〇、卷二第八、卷第三第四、『搜神記』卷一九、『日本昔話大成』二五六「猿神退治」、「白猿伝」などを挙げている(同書、五二八頁)。
- (7) 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九九六年、三一九頁。
- (8) 永田典子『猿神退治』の特性「昔話と動物 昔話―研究と資料」『第一号、三弥井書店、一九八二年七月。
- (9) 池上洵一「説話のうらおもて」『今昔物語集』の世界』筑摩書房、一九八三年、七一頁。初出、「今昔物語集の猿神退治」『国語と国文学』一九七七年十一月。
- (10) 同書、七一―三頁。
- (11) 廣田收『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三年。
- (12) (9)に同じ、七四―五頁。
- (13) (9)に同じ、七七―八頁。
- (14) (9)に同じ、七九頁。
- (15) (9)に同じ、八〇―一頁。
- (16) (9)に同じ、八四頁。現在の高野神社の社殿にも、この他に御先神社や龍神社などがあり、いずれも在地性や古層性を負うものと見られる。
- (17) (9)に同じ、八四頁。現在、津山では「なかやま」「たかの」と訓読みしている。これを説話で音読しているのは、都人からする表現と見るべきかもしれない。熊谷保孝氏は「天理図書館所蔵吉田家本『延喜式』に「高野神社」には「二宮」と注記し、その右に「カウヤ」と仮名を付けていることから「カウヤ」コウヤ」の読みは高野本郷の側にはなく、「二宮」に対する読み」であると推測し、「二宮をコウヤと音読するのは真言宗の影響」によるもので、高野山との関係を指摘する(『中山神

社の創祀と発展」『律令国家と神祇』第一書房、一九八二年、四〇八頁。

(18) (9)に同じ、八四～五頁。

(19) (9)に同じ、九八頁。

(20) (9)に同じ、一〇〇頁。

(21) (9)に同じ、一〇一頁。

(22) (9)に同じ、一〇二～三頁。

(23) 『高野神社の文化財』津山郷土博物館、二〇〇五年、六四～五頁。

(24) 同書、四六頁。

(25) 特別展「高野神社の文化財」津山郷土博物館、二〇〇五年一〇月、展示されたキャプションによる。

(26) (23)に同じ、七〇頁。

(27) (23)に同じ、六五～六頁。

(28) 行田裕美「美和山古墳と蛇塚考」『郷土館案内』津山郷土博物館、一九八五年一〇月。真弓常忠氏は、湿原を干拓すると「再び灌漑の水を流入しなければならぬ」ので「河川の流入口と繋いで人工の水路を築くことが必要」であり「その水路を称してヘウナデンといった」とする。そして「うなでの杜」は「水路としてのヘウナデンを管理し、その影響下にある水田を支配する神の坐す杜の意とな」とするとともに「神奈備」の意を含む」と見る（真弓常忠「宇奈提考」『祭祀と歴史と文化』臨川書店、二〇〇二年、七四頁）。すなわち「うなで」は「弥生時代以来の水稲農耕の成否を決める要めをなした」として「大和の『宇奈提』は『出雲国造神賀詞』に、特に事代主命を坐せとの大穴持命の神託を掲げるのは、かつて、大己貴神系種族である古代鴨氏がこの技術、すなわちヘウナデンをもって、湿原を干拓する技術を独占し、『うなでの杜』は鴨氏の奉祀するところであつたことを意味する。しかして出雲の国譲りは、この技術、いい換えるならば『うなでの杜』の祭祀を天孫系氏族、すなわち皇室に奉じたことを物語る一面のあること」を指摘している（同書、八九～九〇頁）。つまり、「うなでの杜」は奈良であれ美作であれ、古代農耕の段階から天皇の統治する律令国家へという体制の変化の中に組み込まれ、層をなすと捉えることができる。

(29) 『日本古典文学大系』は「猿丸」は猿の異名。「丸」は人名につける接尾辞であるが、動物につけることもある。堤中納言物語「いなこまろ」と注する（渡邊綱也・西尾光一校注『日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九六〇年、二

八八頁)が、なお補うべきことがあるのではないか。例えば『枕草子』三卷本、第六段に、清涼殿に飼われていた猫を襲わせた犬を「翁丸」と呼びかけている(増田繁夫『枕草子』和泉書院、一九八七年、八頁)。そのことからすれば「猿丸」と説話が地の文で表現することに、畏敬されるはずの神の引き落としがある。俗に、稻荷神は狐、三輪神は蛇、と呼ぶことを連想させる。周知のように、稻荷神社は、古くから開けた地で、平安京の成立とともに稻荷神は、国家鎮護の護り神へと変容するとともに、現世利益を求めて都市民が参詣するようになった。さらに、近世になると、商売繁盛の神として信仰を集めるようになる。中山神や高野神もまた同じ歴史的経過を辿ったのではない。

(30) 「横座」については、廣田收『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三年、参照。本説話も第三話と同様、饗宴のさまには「横座」と二列に並ぶ座の配置が見られる。しかしながら、第三話では鬼の宴であり、本説話では猿神の宴である。特に前者には、鬼の相貌に山の神としての性格が見られるが、後者において宴は祝祭的であり、同じ横座に居るとしても宴の性格は異なる。

(31) 廣田收『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三年、参照。

(32) 山田孝雄他校注『日本古典文学大系 今昔物語集 第二卷』一九六〇年、三二五―三二頁。小峯和明氏は「其国二巫絶二ケリ」の条について「巫追放、いけにえ神事の廃止と共に王の治世が確立。あらたな国家神話のはじまり」と注する(『新日本古典文学大系 今昔物語集 第二卷』岩波書店、一九九九年、三六四頁)。この理解に従うべきであろう。

(33) 高木敏雄「人身御供論」初出、一九二三年、ジュームス・ビー・スミレー「人身御供」初出、一九一八年、など。礫川全次編『歴史民俗学叢書 生賢と人柱の民俗学』批評社、一九九八年に掲載されたものを参照。

(34) 秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』岩波書店、一九五八年、三〇八―九頁。原文は漢文であるが、便宜上訓読文に従った。

(35) 土橋寛「靈格觀念のいろいろ」『日本古代の呪禱と説話』塙書房、一九八九年。秋本吉郎氏は、讃容郡の条に「鹿の生血を苗代として稲種を蒔く。早く発芽させる呪術的な播種法であろう」と注する(34に同じ、三〇九頁)。鹿の腹を割いて得た血に稲種を蒔くことは、促成栽培をいうのではない。フレイザー『金枝篇』を引くまでもなく、血と稲種を合わせる農耕儀礼の仕掛けをいうべきであろう。儀礼の秘義を伝えるのが神話だといえる。

(36) 34に同じ、三〇六―七頁。

(37) 34に同じ、三〇七頁。

- (38) (34)に同じ、二五九頁。
- (39) (34)に同じ、六三頁。
- (40) (34)に同じ、三六三頁。
- (41) 柳田国男『掛神の信仰に就て』『柳田国男集 第二七卷』筑摩書房、一九六四年、三〇六頁。初出、一九一九年。
- (42) 同書、三〇七頁。
- (43) 『大日本仏教全書 第一四八巻 私聚百因縁集』仏教書刊行会、一九二二年、六〇八頁。
- (44) 同書、一七頁。
- (45) 同書、三三二頁。
- (46) 『美作国一ノ宮 中山神社』中山神社発行。中山神社本殿は、国指定重要文化財となっているが、現在の社殿は永禄二（一五五九）年、室町時代に出雲国富田城主尼子晴久によって建立されたものとされる。
- (47) 『津山市史 第一巻 原始・古代』津山市、一九七二年、一六〇頁。
- (48) 同書、一六四頁。なお、熊谷保孝氏は「中山神を猿神であるとする」説は、「鉄の神としての本社のお神徳が砂鉄の採取や製鉄のための木材を求めて山に入る人々によって信仰されたところから山神となり、それがまた猿神とも考えられたためか、本殿の裏五十米ほどのところに祀られている猿神社の信仰が都の人々に伝えられたためか、いずれかであろう」と述べている。熊谷保孝「中山神社の創祀と発展」『律令国家と神祇』第一書房、一九八二年、三九七頁。
- (49) 岩本徳一校注『神道大系 古典註釈編 七』神道大系編纂会、一九八六年、五一三頁。なお、中山神社の神位が急速に高くなつたことについて、熊谷保孝氏は「藤原良房との特別な関係」を予想されている。熊谷保孝「中山神社の創祀と発展」、四〇〇頁。
- (50) 中山神社編『中山神社資料』清文堂、一九七四年、三三三頁。
- (51) 廣田收『宇治拾遺物語』世俗説話の研究』笠間書院、二〇〇四年、第一章「博徒と笑話」、注(14)、一七七～九頁。
- (52) (50)に同じ、三五八～九頁。
- (53) 山田孝雄他校注『日本古典文学大系 今昔物語集 四』岩波書店、一九六二年、四二七～三〇頁。なお私に表記を改めた箇所がある。
- (54) 同書、四二七頁。

- (55) 馬淵和夫他校注『日本古典文学全集 今昔物語集 三』小学館、一九七四年、五四五頁。
- (56) 小峯和明校注『新日本古典文学大系 今昔物語集 五』岩波書店、一九九六年、二八〇九頁。
- (57) 馬淵和夫校注『新編日本古典文学全集 今昔物語集 三』小学館、二〇〇一年、四九二頁。
- (58) 国東文麿『二話二類の説話配列様式』『今昔物語集成成立考』早稲田大学出版部、一九六二年。
- (59) (63)に同じ、四三〇〜九頁。
- (60) 森正人氏は「罰を与えて罪をつぐなわせ、穢れを負わせて。古代における罪の償いは、罪がもたらした穢れの祓いを負担することであった」として『古事記』『日本書紀』におけるスサノヲの追放を引く（森正人『新日本古典文学大系 今昔物語集 第五巻』岩波書店、一九九六年、四三頁、注二五）。巻第二六第八に、穢と祓の思想が働いているという指摘は重要である。
- (61) 「生贄」の初見は、中村幸彦他編『角川古語辞典』によると、『名義抄』で「犧、牲 イケニハ」と見られる（中村幸彦他編『角川古語辞典 第一巻』角川書店、一九八二年、二二七頁）。愚考するに「生贄」は贄という語を前提として造られた語と見られる。
- (62) 永田典子『「猿神退治」の特性』『昔話と動物 昔話―研究と資料―』第一号、三弥井書店、一九八二年七月。
- (63) 同論文。この「しつぺい太郎」については、すでに柳田国男が「見附の国府の天神の為に、凶神を退治したといふ名犬しつぺい太郎の物語」と紹介している（『東国古道記』『柳田国男集 第二巻』筑摩書房、一九六二年、二五九頁。初出、一九四九年）。この「しつぺい」は禅宗の修行に人を打つのに用いられる「竹篋」か。別表にも示したように、「しつぺ太郎」「すつぺ太郎」「すつぽ太郎」などという異伝を生んでいるが、伝播に伴って地域に応じた変容として、これらは訛ったというよりも、意味から離れた音の遊戯化と見られる。
- (64) 同論文。なお早く島津久基氏は、義犬の伝説として「助勢者たる犬が猿神を斃して自身も絶命し、義犬塚に祀られるのを常型」とし「その最も代表的なものは義犬早太郎（兵坊太郎）の伝説」と紹介している（『国民伝説類聚』大岡山書店、一九三二年、二一〇頁）。
- (65) 別表を作成するにあたっては資料の検索に（8）永田典子『「猿神退治」の特性』を参照した。私に検索したものには、永田氏の資料にある事例で逸したものと同時に、永田氏の資料にない事例を加えたものがある。また、昔話の構成が分かるように、永田氏の表とは異なるものを作成した。なお、松浪久子氏は日本昔話「猿神退治」を「広義の人身御供救出説話」と

捉えて、*“The Types of the Folkale (昔話の型)”* の三〇〇番 *“The Dragon Slay (龍退治)”* に該当するという〔猿神退治〕稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂、一九七七年、三九〇頁。

(66) 「51 猿神退治」語り手・堀まつ、稲田浩二編『丹波和知の昔話』三弥井書店、一九七一年、九六―九頁。なお、語りの構成を考えて、段落を変えたところがある。

ちなみに、ここで岡山県の事例を中心に取り上げた理由は、必ずしも『今昔物語集』『宇治拾遺物語』の物語の舞台が美作国であるからというわけではない。むしろ岡山県の昔話が直接『今昔物語集』『宇治拾遺物語』と関係をもつ可能性は考えにくい。いうまでもなく、われわれの目に触れうる昔話の採録資料の姿が、古代・中世における音声言語による伝承と同じである保証はない。比較のための対象として仮に据えたものと理會されたい。

(67) 同書、九九頁。

(68) 「45 猿神退治」語り手・美甘寅一、稲田浩二・福田晃編『昔話研究資料叢書1 蒜山盆地の昔話』三弥井書店、一九六八年、二二三―二七頁。

(69) 代表稲田浩二・岡山民話の会編『何と昔があつたげな 上巻』一九六四年、一八六―九一頁。  
(70) 韓国昔話の事例について、崔仁鶴氏によると、例えば「117 蜈蚣と蛙の闘い」の話型は、次のようである。

一 娘が蛙を養う。

(一) 貧しい家の娘がある日台所に蛙が現われると哀れに思い、自分の飯を分けてやって育てた。

(二) 蛙は毎日やってきて飯を貰って食べ、大きな蛙になった。

二 凶年といけにえ。

(一) 凶年が長くつづき、村では娘を買い、いけにえに捧げることにした。

(二) 盲目の親を持った彼女は自ら進んでいけにえになった。

(三) 祭壇の前におかれた娘を食おうとして大きな蜈蚣が現われた。

三 蜈蚣と蛙の闘い。

(一) はじめから娘についてきて様子をみていた蛙は、蜈蚣が現われると毒を吹き出した。蜈蚣も毒を吹いたので、両方とも死んだ。

(二) 蛙のおかげで娘は生き返った。それ以来いけにえを捧げる習わしがなくなった。

(崔仁鶴『韓国昔話の研究』弘文堂、一九七六年、二〇四頁)

これは、本稿における「武力行使型」に属する。同書に掲載の「143 熊と猪」「284 地下国の怪盗」「285 金寧窟の青大将」「382 九頭怪盗」においても、同じ亜型に属するものであり、唱え言を伴わない。また、伝説にも「382 金寧窟の青大将」(剣で切りつけることが中心で、援助者がいない)、「384 むかで山」(飼育していた動物が化物を退治する)、「385 むかで市場」(同様の話型)などの事例においても、「武力行使型」に属し、唱え言を伴わない(崔仁鶴『朝鮮伝説集』日本放送出版協会、一九七七年。人柱型や複合型を除く)。また昔話の採録資料として「大むかで退治」も、飼育していたひき蛙が生贄の娘を大むかでを倒して救うという話型である(崔仁鶴『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会、一九七四年、五三頁)。わずかなこの範囲においても、韓国の事例は「武力行使型」で唱え言を伴わない話型に傾斜していると思われる。

そのことは、邊恩田氏が、昔話「腰折雀」に、パンソリと同じように、兄弟・燕・大工の家建てというモチーフを認めることで、影響関係を指摘されている(邊恩田「昔話「腰折雀」とパンソリ「興申伝」」「説話・伝承学」第七号、一九九九年四月)ことに関係してくるかもしれない。私も日本の昔話「腰折雀」の事例が、邊氏のいわれる伝播系統とともに、爺／隣爺・雀・瓢／米という系統が併存していることを確認した(廣田収『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三年、第二章第三節)。また、昔話「瘤取爺」について、主に唱え言を持たない系統の亜話型について論じたが、「瘤取爺」には唱え言の解説ができるかできないかによって、鬼または天狗の宴に参与できるかどうかを分ける、もうひとつの亜型のあることも周知のところである。この「猿神退治」も唱え言の有無によって、異なる系統の存することが指摘できる。つまり、日本昔話には伝播してきた、唱え言をもたない外来の話型と、唱え言をもつ在来の話型との対立・併存の現象が見られるのはなからうか。ちなみに、本論の末尾に掲げた採録事例に基き、日本におけるこの二つの亜型の分布をみると、必ずしも著しい傾向や偏差をみることはできなかった。ただこの問題についてはなお、詳細な検討を要するので、他日を期すことにしたい。

(71)

誓約についての基本的理解は、土橋寛「靈格觀念のいろいろ」『日本古代の呪禱と説話』塙書房、一九八九年、による。中村生雄氏は、大和の竜田神社の風祭について、『祝詞』に触れ「竜田の神の鎮座の経緯は、いったんは風害によって農作に甚大な被害を及ぼした神であつても、ひとたび鄭重に奉斎されるならば今度は反対に風害を排除する神として威力を発するということの意味しており、私見によればこれも、へ崇り神」が祀られることによって「へ守り神」に転じるという日本古来の神のありかたの基本モデルたりうるはずである」という(「イケニへ祭祀の起源」小松和彦編『異人・生贄』河出書房、



二〇〇一年、二二〇頁)。さらに「風祭なる土俗の祭祀からは、どうやら古代社会における狩猟祭祀やそれにまつわる獸肉食慣行との結びつきが読みとれそうである。しかもそれは、中央ではとうに失われた古層の信仰に属して」(同書、二二六頁)いるという。このような視点は、「猿神退治」の話型と、誓約を考える上で極めて重要である。

(72) 秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』岩波書店、一九五八年、三七三頁。便宜を図り訓読文に従った。同書、三八三・五頁。

(74) 本説話の類話・出典として『搜神記』『白猿伝』にも「猿神退治」の話型をもつ説話のあることはすでに知られている。繁原史氏の研究によると、東アジアでは「水神争闘説話」の広がりの中に「猿神退治」があり、日本の昔話や『今昔物語集』の淵源は唐の『白猿伝』であると論じる(『日本説話の比較研究』汲古書院、二〇〇四年)。「搜神記」該当の物語の概要を私に纏めると、次のようである。

東越国の庸山の洞穴に大蛇が住んでいた。住民は牛や羊を生贄として祭ったが、災いは治まらなかった。そこで娘を人身御供としていた。李誕という男の娘寄が生贄になることを申し出た。寄は剣と犬を用意して、廟の中に入った。蛇が現れたので、寄は犬を放つて噛ませ、寄が切りつけて殺した。越王はこれを聞いて寄を后とし、家族を優遇した。以後、妖怪は現われなかった。

(竹田晃訳『東洋文庫 搜神記』平凡社、一九六四年、三六五―六頁、を参考とした)これは生贄を要求する霊格を打倒するのに、犬と刀と両方用いられているが、話型としては「武力行使型」に属するといえる。いずれにしても、日本の昔話のように、唱え言を組み込んでいない。また誓約を持たない。したがってどちらかといえば、「宇治拾遺物語」に近いといえる。ただし、この『搜神記』本文に生贄という語は見えない。一方、『白猿伝』はどちらかというと『酒吞童子』に近い(江総『白猿伝』補説)前野直彬編訳『中国古典文学大系 六朝・唐・宋章節選』平凡社、一九六八年、一五五―八頁、内田泉之助他『新釈漢文大系 唐代伝奇』明治書院、一九七一年、などを参考とした)。これらとの関係については、別に論じたい。伝播は結果的には話型の受け渡しであり、話型の共有に他ならない。

(75) 西郷信綱氏は「活かしておいた二へを殺して神に捧げるのがイケニへの本義であったはずである」という(西郷信綱「イケニへについて―神話と象徴―」『神話と国家』平凡社、一九九七年、一一三頁)。私もやはり、贅は殺して捧げるというよりも、生きながら贅を捧げるとみるべきではないかと考える。

(76) 話型という概念は、昔話研究では普通、モティフ・インデックスに基づく型として用いるが、今ここで説話、昔話、神話を比較する上で、話型という概念を、物語の表現を原理的に支える枠組みとして、緩やかに設定しておきたい。つまり、話型

は固定的なものではなく、見る次元や視点に応じて姿を変えるように層をなすものと捉えておくことが分析上有効である。

(77) (9)に同じ、八三頁。

(78) (6)に同じ、五頁。

### 〔付記〕

本考は、問題点を挙げただけの粗忽な素描にとどまっている。御叱正を賜りたい。

なお、本論をなす上で、資料の閲覧・検索において中山神社、津山郷土博物館、津山科学教育博物館別館歴史民俗館、並びに竹居明男氏から援助や示唆を得た。記して謝意を表したい。

また、本論の中では直接引用することはできなかったけれども、多くの示唆を得たものに次のような先行研究がある。ここに記して謝意を表したい。

・柳田国男『日本昔話名彙』日本放送協会、一九四八年。

・松浪久子『猿神退治』稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂、一九七七年。

・W・アレンズ『人喰いの神話』折島正司訳、岩波書店、一九八二年。

・M・モース、H・ユベール『供儀』小関藤一郎訳、法政大学出版社、一九八三年。

・ルネ・ジラル『身代わりの山羊』織田年和・富永茂訳、法政大学出版社、一九八五年。

・赤坂憲雄『人身御供譚への序章』『物語・差別・天皇制』五月社、一九八七年。

・小松和彦『雨乞いと生贄』『説話の宇宙』人文書院、一九八七年。

・『日本歴史地名大系 岡山県の地名』平凡社、一九八八年。

・大塚英志『人身御供論』角川文庫、二〇〇二年。初出、一九九四年。

大塚氏は「物語の形態」から「猿婿入」を「猿神退治」のヴァリアントと捉える。すなわち「猿婿入」の深層には『猿神退治』的な人身御供譚が横たわっており、その深層に横たわるも構造の因果律に従い猿神は殺害される」とみる（同書、二八―九頁）。さらに「異類を自らの儀礼の（人身御供）として殺害することで彼女は成人式を遂行している」という（同書、三七頁）。大塚氏が、昔話を成人式という通過儀礼をもつて理解するところに異論はない。ただ私は、そのような構造的分析の上に立つて、さらに表現的分析を加える必要があることを言おうとするものである。それは私が、深層をなす神話的な構造と、歴史的な

表層との複合した構成体として言説の総体を、本来的な意味での「表現」と捉えるからである。

・中村生雄『イケニへ祭祀の起源』小松和彦編『異人・生贄』河出書房、二〇〇一年、初出、一九九五年。

・西郷信綱『イケニへについて―神話と象徴―』『神話と国家』平凡社、一九九七年。

・篠田知和基『竜蛇神と機織姫』人文書院、一九九七年。

篠田氏は、「猿神への生贄」が「組板の上で『なますにして』云々と言うのは一つのレトリック」で「生贄が美しい女であれば、『食べる』というのは性的に自由にすること」とされ、「猿婿」と「猿神退治」の近接性を指摘される（同書、一五七頁）。昔話において食べるという表現が象徴的に性的な犯しであることは動かない。

・新谷尚紀「人身御供と成女式」『神々の原像』吉川弘文館、二〇〇〇年。

・原田信之「猿神退治」志村有弘・諏訪春雄『日本伝説大事典』勉誠社、二〇〇〇年。

原田氏は「犬が登場するは東日本に多く分布し、犬のしつべい（竹篋）太郎と呼ばれる場合が多い。また、犬が登場しない型は西日本に多く分布している」として「二つの話型」の存在を指摘している。これは適切な指摘である。

#### 昔話「猿神退治」採録資料

##### 凡例

1 昔話採録資料の中から、唱え言を含む事例を挙げた。

2 唱え言を含む事例と含まない事例に分ける。なお、頁数は唱え言の掲載されている頁を示す。

3 昔話の中で唱え言が繰り返される場合、同じ表現が繰り返される場合は、事例は一つにとどめ、繰り返される表現に異同があれば、繁をいとわず示すこととした。

4 他の話型と複合したものは除外した。

・大和のすっぱこ太夫という犬に、このことを知らせな、スツトコトン。

〔45 猿神退治〕稲田浩二・福田晃編『昔話研究資料叢書1 蒜山盆地の昔話』三弥井書店、一九六八年、二三六頁

・明日の晩は酒屋の一人娘アあがつて来るアセエ。邪魔者ア来ねエばせエいいや。何ア来ても、ひとつもおつかねエごどアねエども、たった一つおつかねエの、丹波の国のすっぱ太郎だ。

〔しつぺ太郎〕川合勇太郎『青森県の昔話』津軽書房、一九七二年、四一六頁

・丹波の国のすつぺ太郎に、この事きかせたくない。

丹波の国のすつぺ太郎、このこと必ず知らせるな。

〔しつぺ太郎〕類話資料、川合勇太郎『青森県の昔話』津軽書房、一九七二年、四一七頁

・丹波の国のめつけ犬 構えて構えて／このことばかりも聞がしえんな／テンテコ テンテコ

〔47 猿神退治（A）〕野村純一編『酒田の昔話』酒田市、一九七六年、一三五頁

・このこと丹波の国の しんしん太郎の めつけい犬さ きかせんな

〔48 猿神退治（B）〕野村純一編『酒田の昔話』酒田市、一九七六年、一三七頁

・デッポジデッポジ デンデンデン／オーオーなんにもおっかなくねんども／丹波の国のしろめかおっかねー

〔49 猿神退治（C）〕野村純一編『酒田の昔話』酒田市、一九七六年、一四三頁

・丹波の国のすけどめけけ すけどめけけ 丹波の国のすけどめけけ そのことばり教えんな そのことばり教えんな 教えんな

〔犬こむがし〕野村敬子編『資料昔話22 真室川の昔話』桜楓社、一九八一年、一三一頁

・デツツクバツカ スツカツカ ニャオニャオにコンコンコン このことかまえて 鎌倉の カンマン太郎に聞かせんな ハア

デツツクバツカ スツカツカ ニャオニャオにコンコンコン このことかまえて 鎌倉の カンマン太郎に聞かせんな

〔79 化けもの話〕武田正編『昔話研究資料叢書10 飯豊山麓の昔話』三弥井書店、一九七三年、三一八頁

・伊勢の国のよだの町の天地白には、このことかまえて聞かせるな。キュウワイワイワイ

〔猿神退治〕白田甚五郎監修・石川純一郎編『河童やろう』桜楓社、一九七二年、七三頁

・伊勢の国の よだの町の 天地白には このことかまえて 聞かせるな キュイ ワイ ワイ ワイ

キュウワイワイワイ ステンコロリン トチーン

〔猿神退治（福島県）〕稲田浩一・稲田和子編『昔話百選』三省堂、一九七一年、二七頁

・丹波の国の、しつぺえ太郎に必ずこのこと沙汰するな

〔猿神退治〕稲田浩二監修・岩瀬博他編『日本の昔話29 信濃の昔話』日本放送出版協会、一九八〇年、九九頁

・三河の国のしつぺい太郎、必ずこのことを知らせんな

- ・〔2〕しつぺい太郎」鶴尾能子編『昔話研究資料叢書7 茨城の昔話』三弥井書店、一九七二年、四一頁
- ・あのごとこのご聞かせんな／近江の国の長浜の／しつぺえ太郎さ聞かせんな
- ・〔しつぺえ太郎〕稲田浩二編『日本の昔話11 永浦誠喜翁の昔話 宮城』日本放送出版協会、一九七五年、一二五頁
- ・今夜のお夜食アなんだい／うじがみ様の人ボクだ／おさく丈に知れろば命がこわい／丹波のおさく丈にや沙汰なしよ
- ・〔六三 猿神退治〕土橋里木編『全国昔話資料集成16 甲州昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一五二頁
- ・ここへ和泉の錦友がきたら
- ・〔21 和泉の錦友（猿神退治）〕桂井和雄編『全国昔話資料集成23 土佐昔話集』岩崎美術社、一九七七年、七〇頁
- ・丹後のすつぺん太郎にやあ知られまえぞ
- ・〔七六 猿神退治〕谷垣桂蔵編『全国昔話資料集成27 但馬昔話集』岩崎美術社、一九七八年、一八三頁
- ・播州の黒石衛門に知られまいぞ
- ・〔76 猿神退治〕参考資料、谷垣桂蔵編『全国昔話資料集成27 但馬昔話集』岩崎美術社、一九七八年、一八五頁
- ・信濃のしつぺい太郎に知らすなよ
- ・〔二八 しつぺい太郎〕鈴木暹編『全国昔話資料集成30 伊豆昔話集』岩崎美術社、一九七九年、四九頁
- ・しつぺい太郎が、いたならば、命はたまるめえ（まい）
- ・しつぺい太郎がいたならば、おらが命はたまるめえ
- ・〔四四 しつぺえ太郎〕上野勇編『全国昔話資料集成13 利根昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一一〇頁
- ・大津の国のこんこんさえこにやあ、世の中がんじょう（大丈夫）
- ・〔六六 猿神退治〕村岡浅夫編『全国昔話資料集成14 芸備昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一三七頁
- ・サヨレ、サヨレ、文福茶釜に毛が生えた。丹波の国のコドドのドウヘイ太郎には聞かせるな。決して、このご構へて聞かせな
- ・〔一〇九 ドウヘイ太郎〕佐久間惇一編『全国昔話資料集成2 北蒲原昔話集』岩崎美術社、一九七四年、一六七頁
- ・このこと五郎兵衛に聞かしちゃならんぞ、エッヘラヘー、エヘラヘー
- ・〔90 猫又の話〕真鍋真理子・剣持隼一郎編『昔話研究資料叢書11 越後黒姫の昔話』三弥井書店、一九七三年、二八一頁

・明日はお諏訪さんのお祭で、おらも相伴なるわいの。これこそゴンベに聞かせちゃならない、スッチョコドッコイドッコイシヨ

〔91 酒吞童子〕真鍋真理子編『昔話研究資料叢書11 越後黒姫の昔話』三弥井書店、一九七三年、二八三頁

・「こんだいいこと、再々ね、七年こつちに、ねいこつた。このことばがりは、河内の国のじゅうへん太郎に、教せてくれんなどさ。チョイドゴ、モツテコイ、スットウサ

〔猿神退治（じゅうへん太郎）〕白田甚五郎監修・佐久間惇一郎編『絵姿女房』桜楓社、一九七三年、五七頁

・しんべいとうざに知らせまいぞや

〔51 猿神退治〕稲田浩二編『丹波和知の昔話』三弥井書店、一九七三年、九四頁

・これを、信濃のキンニヤアニヤアには聞かせめいもの、やあ、さあ、ちい、ちい、ちい

〔21 信濃のきんにやあにやあ〕丸山久子編『昔話研究資料叢書3 佐渡国仲の昔話』三弥井書店、一九七二年、一〇一頁

・虎狼よりや恐とい者はない、虎狼よりや恐とい者はない

〔61 化物退治〕稲田浩二・福田 晃編『昔話研究資料叢書4 大山北麓の昔話』三弥井書店、一九七〇年、三三九頁

・ありやさ、こらさ、近江の国のしつきやや犬さや出て来にや、恐たあはない

〔61 化物退治〕類話（3）、稲田浩二・福田 晃編『昔話研究資料叢書4 大山北麓の昔話』三弥井書店、一九七〇年、三四一頁

・明日の晩は酒屋の一人娘ア上つて来るアさエ。別ね邪魔者来なエばさエえや。何ア来ても、ひとつもおかなエゴビアなエども、たった一つおかなエのア、丹波の国のすつべ太郎だ

〔62 猿神退治（A）〕佐々木達司編『青森県昔話集成 上巻』青森県児童文学研究会、一九七一年、一六一頁

・丹波の国のすつべ太郎、このこと必ず知らせるな

〔62 猿神退治（A）〕参考資料1、佐々木達司編『青森県昔話集成 上巻』青森県児童文学研究会、一九七二年、一六二頁

・丹波の国のすつべ太郎にこのこと聞かせたくない

〔62 猿神退治（A）〕参考資料2、佐々木達司編『青森県昔話集成 上巻』青森県児童文学研究会、一九七一年、一六二

頁)

・テンスコ、バンスコ、オシヤラエシヤラエ、オクニノ、メツケ様に知らへちやならね

〔62 猿神退治(A) 参考資料3、佐々木達司編『青森県昔話集成 上巻』青森県児童文学研究会、一九七一年、一六二頁)

・でんずく ばつから すつからかあ／古坂 古道 古街道／こん松原の へーそ へそ／このごと そんなで／三河のシツベエ太郎に 聞かしえるな／ピーヤローロ ローロ すまから すままで そつづくんだえ

〔17 シツベエ太郎〕大友儀助編『新庄のむかしばなし』新庄市教育委員会、一九七一年、八五頁)

・月夜の晩に、月夜に光に、おどれやおどれ。しつぺい太郎に、きかせてくれるな。

〔二一九 「しつぺい太郎」水沢謙一編『おばばの昔ばなし』野島出版、一九六六年、四二一頁)

・おたけさん、お早う たぬきさん、お早う

〔二〇 ごとと貉と娘〕山下久男編『全国昔話資料集成19 加賀昔話集』岩崎美術社、一九七五年、五五頁)

・ソワン山の三太郎が、知らんように。

〔四三 三太郎犬〕柳田国男編『日本昔話記録11 鹿児島県鹿児島昔話集』三省堂、一九七三年、一四三頁)

・信濃の国の権兵衛太郎に、言うな語るな聞かせるな。

〔四九 化け物の話〕柳田国男編『日本昔話記録3 福島県磐城地方昔話集』三省堂、一九七四年、五七頁)

・丹波のお作丈にや沙汰なしよ／お作丈に知れるば命が恐い

〔一六 丹波のお作丈〕土橋力編『甲斐昔話集』郷土研究社、一九三〇年、四九頁)

・佐治の谷のギヤア太郎にこのこた知らして下さんな。よういとこよういやさ

〔48 犬山神社の狸〕福田晃・三原幸久編『昔話研究資料叢書13 因幡智頭の昔話』三弥井書店、一九七九年、一八三頁)

・信濃のしつぺい太郎に知らすなよ

〔二八 しつぺい太郎〕鈴木暹編『全国昔話資料集成30 伊豆昔話集』岩崎美術社、一九七九年、四九頁)

・此事ばかりは信州信濃の光前寺、／兵坊太郎に知らせて呉れるな。／ステンテンテン。

〔ロ 兵坊太郎〕高木敏雄『日本伝説集』宝文館出版、一九七三年、一六六頁)

・肥前の国のなんとかさんには、云ふてくれるな

〔ハ 犬薬師様〕高木敏雄『日本伝説集』宝文館出版、一九七三年、一六八頁

・チンとガン／大盤覆へせば親猿に祟り／小盤覆へせば親猿に祟り

〔ニ 猿神退治〕高木敏雄『日本伝説集』宝文館出版、一九七三年、一六九頁

・びやりふう、びやりふう、信濃の国の神兵小太郎にや聞かすんな、ちゃんばんぼんの僧兵や

〔138 泣き村〕参考話4、比江島重孝編『日本の昔話10 半びのげな話』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第24巻 長崎他』同朋社、一九八〇年、二七〇頁

・日向国の七八太郎にこの事を知らすな、とんとことん

〔八九 化物退治〕福岡県教育会『全国昔話資料集成11 福岡昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一〇七頁

・この事日向の日向次郎に知らすな

〔八八 日向の日向次郎〕福岡県教育会『全国昔話資料集成11 福岡昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一〇六頁

・大山口の彦八左衛門、大唐大小唐犬にこのことは夢にも知らすんな。ヒユウヒユウドンドン、ヒユウドンドン

〔93 人身御供の話〕参考話3、桧垣元吉『福岡民話集』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第23巻 福岡他』同朋社、一九八〇年、一九一頁

・ここへ和泉のきんともでも来たら?

〔133 和泉のきんとも〕山川勝子『土佐昔話集』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第22巻 愛媛・高知』同朋社、一九八〇年、二五三頁

・この奥の中の原の一平太郎に聞かしてすまんよ、悟らしちゃすまんよ

〔69 猿神退治〕類話4、大谷女子大学説話文学研究会『口和町昔話集』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第20巻 広島・山口』同朋社、一九八〇年、二〇〇頁

・一平太郎にこの事聞かしちゃ済まん、沙汰しちゃ済まん

〔69 猿神退治〕類話5、大谷女子大学説話文学研究会『口和町昔話集』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第20巻 広島・山口』同朋社、一九八〇年、二〇一頁

・今度このたび筑前の国、えいがていがゆうどうじきに、このこと知らせんように

〔69 猿神退治〕類話6、親和女子大学説話文学研究会『広島県高野郷昔話集』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第20巻



20巻 広島・山口』同朋社、一九八〇年、二〇二頁)

・しつぺい太郎にこのこと聞かすな

〔69 猿神退治〕類話11、大谷女子大学説話文学研究会『千代田町昔話集』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第20巻 広島・山口』同朋社、一九八〇年、二〇三頁)

・信州のしつぺい太郎さえなければこわいものはない

〔122 猿丸〕類話2、『民俗探訪』四〇号、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第13巻 岐阜他』同朋社、一九八〇年、二四八頁)

・信州のシツペイ太郎にだけは言ってくれるな

〔122 猿丸〕類話2、早稲田大学日本民俗学研究会『西浦の民俗』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第13巻 岐阜他』同朋社、一九八〇年、二四九頁)

・この村に権兵衛がなければ極楽だ

〔52 猿神退治〕浅川欽一『信濃の昔話』第二集、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第12巻 山梨・長野』同朋社、一九八一年、一三二頁)

・伊那の早太郎が今夜来ねかつ

〔52 猿神退治〕類話2、檜川村教育委員会『木曾檜川村の民俗(一)』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第12巻 山梨・長野』同朋社、一九八一年、一三四頁)

・信州信濃の光前寺、兵坊太郎にこのこと知らすなストントン

〔52 猿神退治〕類話7、村沢武夫『伊那谷文庫6 伊那谷の伝説』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第12巻 山梨・長野』同朋社、一九八一年、一三五頁)

・しつぺ太郎は恐ろしや、言うな語るな沙汰するな

〔52 猿神退治〕類話8、小山真夫『小県郡民譚集』郷土研究社、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第12巻 山梨・長野』同朋社、一九八一年、一三五頁)

・今夜のお夜食アなんだい。氏神様の人御供だ。おさく丈に知れろば命がこわい、丹波のおさく丈にや沙汰なしよ

〔52 猿神退治〕類話12、土橋里木『甲州民俗叢書4 富士北麓昔話集』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第12巻

山梨・長野』同朋社、一九八一年、一三六頁)

・此ノコトバラ、越后ノシケンニシラシテクレルナ

〔62 猿神退治(犬援助型)〕稲田浩一『富山県明治期口承文芸資料集成』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第11巻 富山他』同朋社、一九八一年、一四七頁)

・祭の日は近づいたが越後のしゅけんはまさか自分がここにいるとは知るまい

〔62 猿神退治(犬援助型)〕類話1、鹿島郡自治会『石川県鹿島郡誌』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第11巻 富山他』同朋社、一九八一年、一四九頁)

・このことばかりは越後の修験に言うことなかりし

〔150 人身供養〕伊藤曙覧編『昔話研究資料叢書6 越中射水の昔話』三弥井書店、一九七一年、二六九頁)

・丹後の国は、しつぺい犬にまいれ

〔62 猿神退治(犬援助型)〕類話2、中道太左衛門『泉村民話集・妙春夜話』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第11巻 富山他』同朋社、一九八一年、一五〇頁)

・丹波の国のしつぺい太郎にかならずこのこと知らせるな、ドットコドのド

〔96 しつぺい太郎〕『茨城県の民話と伝説 上』有峰書店、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第9巻 茨城他』同朋社、一九八八年、一五六頁)

・出雲の国のしつぺい太郎に聞かせんな

〔96 猿神退治〕類話1、高萩市教育委員会『高萩の昔話と伝説』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第9巻 茨城他』同朋社、一九八八年、一五七頁)

・三河の国のしつぺい太郎、必ずこのこと知らせんな

〔96 猿神退治〕参考話1、『茨城民俗』第4号、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観第9巻 茨城他』同朋社、一九八八年、一五七頁)

・はだか武兵衛に知られるな、あとの祟が恐ろしい

〔96 猿神退治〕参考話2、大田区教育委員会『大田区の文化財』第二集、自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第9巻 茨城他』同朋社、一九八八年、一五七頁)

・奥州の白坂三平とつっちゃあ、このうちの娘くつたちゅうことを、きかせつな

〔67 奥州の白坂三平〕入山むかしかたりの会『むかしかたり原話集』自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第8巻 栃木・群馬』同朋社、一九八六年、一七二頁

・しつぺい太郎がいたならば、おらが命はたまらぬ

〔67 猿神退治（犬援助型）〕類話1、須藤澄子『おばあんの昔話』煥乎堂、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第8巻 栃木・群馬』同朋社、一九八六年、一七三頁

・備前の国の、しつぺい太郎に、かならずこのこと聞かせちゃならない、ヒヤーヒヤラ、ビヤンヒヤラ

〔67 猿神退治（犬援助型）〕類話2、『群馬県史 資料篇27』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第8巻 栃木・群馬』同朋社、一九八六年、一七四頁

・奥州の白坂三平とつっちゃあ、この家の娘食つたつてことを聞かせんな

〔67 猿神退治（犬援助型）〕類話3、千葉高校民俗研究会『千葉高民俗』第三号、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第8巻 栃木・群馬』同朋社、一九八六年、一七四頁

・しつぺい太郎が聞いたなら、言うな、語るな、沙汰するな

〔67 猿神退治（犬援助型）〕類話4、『群馬県史 資料篇27』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第8巻 栃木・群馬』同朋社、一九八六年、一七四頁

・しつぺい太郎がいたならば、おらが命はたまるめえ

〔67 猿神退治（犬援助型）〕類話5、上野勇『でえろん息子』創元書房、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第8巻 栃木・群馬』同朋社、一九八六年、一七四頁

・我等のやる事が播磨のめっかいに解がたら俺達の命は助かんねいだぞ

播磨の国のめっかいに、必ずこの事知られたら、我等の命は賜わるめい、すーかつか すーかつか

〔56 播磨のめっかいむかし〕小林政一『昭和村のむかしはなしシリーズ』昭和村教育委員会、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第7巻 福島』同朋社、一九八五年、一五一頁

・太郎に教らんね

〔56 猿神退治（犬援助型）〕類話1、千葉大学日本文化研究会『ちりりんぱり りんこがねの花』稲田浩二・小沢俊夫編

『日本昔話通観 第7巻 福島』同朋社、一九八五年、一五二頁)

・丹波の太郎にこのこと聞かすな

〔56 猿神退治(犬援助型)〕類話2、東京女子大学郷土調査団『猪苗代湖町三代の昔話』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第7巻 福島』同朋社、一九八五年、一五二頁)

・丹波のしつべい太郎に言うな

〔56 猿神退治(犬援助型)〕類話3、船引町教育委員会『ふねひきのざつと昔』自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第7巻 福島』同朋社、一九八五年、一五二頁)

・信濃の国の権兵衛太郎に言うな、語るな、聞かせるな

〔四九 化け物の話〕岩崎敏夫『全国昔話記録3 福島県磐城地方昔話集』三省堂、一九七四年、五七頁)

・とかくこのこと日本一のこんぶの太郎に聞かせんな

〔56 猿神退治(犬援助型)〕類話5、石川純一郎『会津館岩村民俗誌』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第7巻 福島』同朋社、一九八五年、一五三頁)

・伊勢の国のよだの町の天地白には、このことかまえて聞かせるな。キュウワイワイ、キュウワイワイ、ステンコロリン、トチン

〔56 猿神退治(犬援助型)〕類話7、石川純一郎『河童火やろう』東出版、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第7巻 福島』同朋社、一九八五年、一五三頁)

・かんとこの金蔵どんのとーごー犬、このことかまえて聞かせんな

〔56 猿神退治(犬援助型)〕参考話1、相馬胤道『双葉史学』第8号、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第7巻 福島』同朋社、一九八五年、一五四頁)

・丹波の国の太郎左衛門のめぎおぎに知らせんな

〔56 猿神退治(犬援助型)〕参考話2、佐々木徳夫『岩代川俣の昔話』自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第7巻 福島』同朋社、一九八五年、一五四頁)

・大里の勘七郎あ来ねえば、何もおっかねえものあねえ

〔六九 大里勘七郎〕類話1、丸山久子・佐藤良裕編『昔話研究資料叢書9 陸奥・三戸の昔話』三弥井書店、一九七三年、

二七〇頁)

- ・丹波の国の名犬に、かまえてこのこと聞かせんな。ダガスコ、バッキヤのチャーヒロロ、ハカダカ、ハカダカ、ヒーワイワイ
- (120 金剛太郎) 参考話、高橋貞子『岩泉の昔ばなし』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第3巻 岩手』同朋社、一九八五年、二四二頁)

・丹波の国の、ししんたううー、このことかならず聞かせんな、でんでんまつか、びーろろ

- (61 たんばの国のししんたううー) 菅原節子・渡辺節子編『菅原節子さんの昔話』自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二三頁)

・すつけんけんに、すつけ太郎、あのこと、このこと聞かせんな。

- (61 猿神退治(犬援助型)) 類話1、萩生田憲夫『上山の民話』一、上山市郷土史研究会、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二三頁)

・近江の国の長浜のしつぺい太郎に聞かせるな

- (61 猿神退治(犬援助型)) 類話3、杳沢憲子『祖母のむかし話』自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二三頁)

・丹波の国のぺんぺこ太郎にあのこと、このこと聞かせるな

- (61 猿神退治(犬援助型)) 類話4、『昔話—研究と資料』第5号、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二三頁)

・丹後但馬の国に二毛犬と四毛犬がいるから借りてこい

- (61 猿神退治(犬援助型)) 類話5、武田正『置賜平野の昔話』(一) 自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二三頁)

・丹後の国のしつぺい太郎に、このこと決して話すなよ

- (61 猿神退治(犬援助型)) 類話6、武田正『牛方と山姥—海老名ちやう昔話集』稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二三頁)

・丹波の国のめつけ犬(和犬)に、ちつともこのこと知らせるな

- (61 猿神退治(犬援助型)) 類話8、『旅伝』1—8、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一

九八六年、一二四頁)

・エーポッポ、タッポッポ、三河の国の五本橋の、しつぺい太郎、あのこと、このこと、聞かせてくださんな

〔61 猿神退治(犬援助型)〕類話9、山形県教育委員会『月山山麓月山沢・四ッ谷・砂子関・二ッ掛の民俗』自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二四頁)

・甲斐の国の三毛と四毛にそのこと教えんな

〔61 猿神退治(犬援助型)〕類話10、武田正『置賜のむかし』自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二四頁)

・甲斐の国の三毛犬四毛犬にはこのこと知らせるな

〔61 猿神退治(犬援助型)〕類話11、『旅伝』7-6、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二四頁)

・丹波のスッペ太郎に聞かせるな

〔61 猿神退治(犬援助型)〕類話12、滝口国也『東根の昔話集』第一編、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二四頁)

・でんずく、ばんずく、すつてんでん、古沢、古坂、古街道。丹後ア天の橋立で。この ごとかまげで、丹波の国の、すつぺえ太郎さ、聞かへんな、聞かへんなあ

〔八三 すつぺえ太郎〕佐藤義則『全国昔話資料集成1 羽前小国地方』岩崎美術社、一九七四年、一七八頁)

・デツツクバツカ、スツカッカ、デツツクバツカ、スツカッカ、西の向かえのしつぺい左エ門に、このことかまえて聞かせんな、ピーロ ピロン

〔61 猿神退治(犬援助型)〕類話14、武田正『まますいじめ—米沢市六郷・宮井の昔話』自刊、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋社、一九八六年、一二四頁)

・明日の晩は酒屋の一人娘ア上つて来るアさエ。別ね邪魔者来なエばさエえや。何ア来ても、ひとつもおかなエ(こわい)ゴドアなエども、たつた一つおかなエの、丹波の国のすつぺ太郎だ

〔116 丹波の国のすつぺ太郎〕能田多代子『手つきり姉さま—五戸の昔話』未来社、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第2巻 青森』同朋社、一九八二年、二二五頁)

・丹波の国のすつぺ太郎に、このこと聞かせたくない

(116 猿神退治(犬援助型)) 類話1、能田多代子『手つきり姉さま―五戸の昔話』未来社、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第2巻 青森』同朋社、一九八二年、二二六頁)

・丹波の国のすつぺ太郎、このこと必ず知らせるな

(116 猿神退治(犬援助型)) 類話2、能田多代子『手つきり姉さま―五戸の昔話』未来社、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第2巻 青森』同朋社、一九八二年、二二六頁)

・てんすこ、ばんすこ、おしゃらえしやらえ、おくにの、めつけ様(三毛猫)に知らせるな

(116 猿神退治(犬援助型)) 参考話、能田多代子『手つきり姉さま―五戸の昔話』未来社、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第2巻 青森』同朋社、一九八二年、二二六頁)

## 昔話「猿神退治」分析表

凡例

1 原則として「猿神退治」「猿の経立」の話型を採る。「人柱」型の話型は採らない。  
 2 昔話「猿神退治」の場合、「唱え言」の有無は、生贄を要求する霊格の正体を暗示するキイになっているが、その欄の△印は、別の役割をなすものであることを示す。

3 『日本昔話通観』の事例で補うべきものもあるが、一定の傾向を見るにとどめ、今回それらを採らなかった。

4 本昔話の事例は、化物の退治に至る経過の相違から、およそ次のように二分割することができる。

I 武力行使型  
 II 唱え言による謎解き型

26	25	24	23	21	17	13	10	6		
奥山／村	掠浦の山の奥	泣き村	村／お社	泣き村	村／御宮		村里	村	場所	発端
祟り	飢饉 悪いことをする					村を荒らす		田が荒れる、 不作	災厄	
神さん	お化け		神様 ひひ	神様	神様 化物	鬼	生神様	権現	霊格	
	庄屋		庄屋	長者		爺	館	庄屋	祭祀者	展開
若い娘	里の娘	娘	娘	娘	御姉さん 人食御供	娘 人身御供	一人娘 人身御供	娘 人身御供	生贄	
樵夫	武士	岩見重太郎	豪傑／岩 見重太郎	鉄砲打ち	侍	侍	樵夫	旅の侍	退治者	
									援助者	結末
矢を射て倒す	知恵／化け比 べに勝つ	刀で切る	刀で殺す	鉄砲を打つ		退治する	樵夫が切る	刀で切る	退治法	
／古猿	大きな猿	狒々猿	ひひ	ひひ	大入道 狒々猿		猿経立	ひひ猿	正体	
断わる	座頭が村の守り神になる	村が栄える	生贄の廃止	分限者の婿になる／夢	退治する／侍を御馳走する	鬼が出なくなる／人身御供の廃止	館の一人娘の婿になる	守り神になる約束／殺して埋める	結果	



52	50	49	47	46	44	43	42	38	37	29	28	27
村	丹波国	中の貝 広津村の	山の奥	村	八幡堂		村		村	ん村／宮さ	村	鬼の穴／ お宮 ぐもいの
豊作を祈る				お米がとれる ように		栗畑を荒らす			お米がとれる ように		作物がとれな い	
山の神	氏神様	水堀明神 (座土神)	国司の生 物 神様／怪	山の神	わざわい かもん (妖怪)	化け物	神さま	大蛇	山の神	神さん		神様／
			大屋			庄屋					庄屋	
娘	娘	一人の娘	一人娘	若い娘	子供	娘	一人娘	若い娘	若い娘	娘	娘	娘
						△	△					
武士 乞食姿の	剣術使い	男	熊井勇軒	貧しい侍		どこの者 とも知れ ない者	行人 巡礼者	武士	貧しい侍	侍	旅の者	幸次郎／ 青年
首を取る	正剣で切る	退治する	鉄砲で打つ	刀で首を落す	鑿と金鎚で叩 き込む	鑿と金鎚で打 ち込む	刀で突く	酒を飲ませて 切り殺す	刀で首を切り 落す	刀で切る	刀を突き差す	短刀で切りつ け討ち取る
猫	猿／蜘蛛	大きな貉	猿の経立	猫	ヌシトコ ブ(化け 物)	大蜘蛛	老貉		猫	古狸	ひひ猿	化物
武士は娘と夫婦になる	村の衆は剣術使いに札を し、生贄は廃止	生贄の廃止	大屋の娘を嫁にし、薩摩 国に帰還、子孫繁栄する	侍は娘を嫁にして、村で 暮す	殿様から褒美をもらい一 生楽に暮す	男は庄屋の婿となり財産 をもらい一生楽に暮す		彼岸過ぎまで山に入らな い禁忌	侍は娘を嫁にして暮す			婿になる／夢がさめる

85	84	82	81	79	78	74	73	71	70	63	58	55	53
宮畑野／お	お宮		村／お宮	殿神社の拝	お宮	神社	裏の山			村	村		能登七尾
		作が取れない	農や作物が荒らされる		田を荒らす		田や畠が荒らされる		大水が出る			崇り	
オーニ村の神様		弥彦様 化け物	様 在所の神	猿のコロ ケ(化物)		神さん	大坊主	神	八幡様	地藏様 化物	化け物	八幡様	
庄屋		弥助		長者	庄屋							庄屋	
一人娘	娘	十八、九 の娘さ	女郎の子 娘さん	若い娘	娘	娘さん	娘	一人娘			娘	娘御	女郎
兄	侍千松どん	侍	岩見太郎 旅の侍	武士	獵師	若いもん 獵師の子	男	獵師	六部	旅人	若者	ジンゲン ダ様	薬売り／ 越後修験
(刀で切る)	刀で刺す	(刀で?)切 り払う	(刀で切る)	酒を吞ませて 刀で突く	鉄砲で撃つ	弓で撃つ	鎌を突き立て る	鉄砲で撃つ	刀で切り殺す	刀で切りつけ る	矢を撃つ	刀で突き差す	刀で殺す
古猿	狒狒猿	大きい鼯	猿か貉か	ケ 猿のコロ	猿	古猿 化け物		狒々 大きな	古狸			狒々猿	猿の化け
(複合話)	黄金をもらう／生贄の廃止／村人が御礼をいう	侍は村に住む／庄屋が侍を大事にし、楽に暮らす	(生贄の廃止)	武士が娘の身代わりになつた	田が荒れることはなくなる／獵師は庄屋の婿になる	娘の家の婿になる	男は長者の娘を婿になる／故郷に帰る／夢を見ていた／あだなを付けられる	獵師は村人から大金をもらう	人身御供の廃止	地蔵に供物をするようになる	悪いことをしないと約束／村は平和に	崇りはなくなり、薬人形で行うようになる	猿の先祖の由来

15	12	11	9	8	7	5	4	3	1		
村の 小際	おっかん 鎮守様	村		大山村		山道	村の御堂	村		場所	
		化げが出る		不作、田が荒れる					干魃、洪水、飢饉	災厄	発端
権現様		古寺の化	八幡様	むじな	神化物	化物	化物	八幡様	神	霊格	
					家親方	庄屋	番の人	金持	庄屋	祭祀者	
娘 人身御供				娘の子	一人娘	娘	人身御供	娘	生娘	生贅	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	唱え言	
落武者	旅の人	旅の人	鯖壳			旅人	番の人	主人	六部	退治者	展開
しんべいとうざ	カンマン太郎	丹波国すけだめ	丹波国しるめか	丹波国しん太	丹波国めつけ大	丹波国すつべ太郎	丹波国すつべ太郎	丹波すつべ太郎	すつべこ太郎	援助者	
犬が噛む		犬が退治する	犬が追払う	犬が食い殺す	犬が殺す	犬が噛み殺す	犬が噛む	犬が噛む	犬が噛む	退治法	
ひひり猿	獣たち	化げ	化物	むじな	むじな	むじな	古猫	むじな	狒狒	正体	結末
る	人身御供の廃止／犬を祀る (後半「欠落か」)	狢犬の由来	化物が出なくなる	村が無事になる				犬の飼主を婿に栄える	人身御供の廃止	結果	

Ⅱ a型 唱え言による謎解き型

91	89	88
里	村	
嫁が つれて い かれる		
猿	氏神	
	区長	
鉄砲撃ち	高田光太郎／ 高田光太郎 郎／ 獵師	諸国修業 する岩見 重太郎
鉄砲で撃つ	鉄砲で撃つ	刀で突き差す
狸、猿	狸	狒狒猿
者の皮や肉を売って分限者になる	聲に見込まれる／自分の村に帰る／夢を見ていた	

54	51	45	41	39	35	34	33	32	30	22	19	18	16
神社	鎌倉建長寺近く	山の上の四つ足堂	山／堂	倉山 萩野／小	浅見村浅間神社	山／堂	山	村		村／お宮	山奥	村	
			大風、大水、大火事など様々の災難					祟り		作場が荒らされる			村
	古狸が和らる	もん(妖怪)	化け者けだものか／神様	権現様むじな	蝗の化物	化物	化物	八幡様	けもの	神様		鎮守様化物	鎮守様化物
			庄屋				庄屋	金持ちの酒屋				庄屋	庄屋
		娘	ひとり娘	子供		若い娘	若い娘			娘	人攫え	娘人食御供	娘人身御供
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
気いきいの人	狩人	(廻国聖)	琵琶引きの坊さん	小僧	三毛猫？	旅人	旅人		親方	若い侍	夫	博打	博打
日向国の七八太郎	丹波のお作丈	ソワン山の三太郎	しっぺい太郎	三河のシツペ太郎	メツケ様	太郎	丹波の国のすつべ太郎	丹波の国のすつべ太郎	三河の国のしっぺい太郎	丹波の国のしっぺえ太郎	丹波の国のしっぺ太郎	伊勢国のよだの町の天地白	伊勢国のよだの町の天地白
犬が化物を食い殺す	犬が喉を噛む	犬が格闘して勝つ	犬が食い殺す	犬が化け物を殺す			犬が噛み殺す	犬が倒す		犬が噛み殺す	刀で殺す	天地白が戦う	天地白が戦う
古狸	古貉	ヌシトコブ(蜘蛛)	大むじな			古猫	むじな	狸		狒々猿	猿	狒々猿	狒狒
	貉汁を食う	村へ帰り、娘を嫁にもらい、安楽に暮す	村にいてもいいと願うが、坊さんはまた旅に出る	村中むじな汁を食う	化物が出なくなる			犬の家の息子を婿にとる／結構に暮す		生贅の廃止	夫婦は宝物を得る	化物を倒す／博打が庄屋の婿になる	化物を倒す／博打が庄屋の婿になる

86	76	72	66	65	64	62	60	59	56
奥山	お宮	山寺	宵宮	村山の中の	殿 お宮／拝	村		見里 信濃国伏	尾山／犬 山神社 社（やし）
			災厄	うす、畑を荒らす、村人を襲			い 五穀ができない		
大きい猫	猫又 産土神	赤猫／ム ジナ	怪獣 氏神	狒々猿		氏神様 神様	八幡様	鎮守の社	狸
					百姓屋	名主様		庄屋	
			娘				乙女	娘	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
鉄砲撃ち	乞食	小坊	廻国中の 六部	若い猿師	ん 諸国を旅 する坊さ	旅人	六部	六部	猿師
信濃のキンニャア	五郎兵衛	丹波の国のコドド のドウヘイ太郎	播州の黒右衛門	郎 丹後のすつべん太	和泉の錦友	丹波のおさく丈	犬	兵坊太郎	郎 佐治谷のギャア太
犬が猫に勝つ	犬が食い殺す	犬が食い殺す	犬が猫の喉に 噛みつ	犬が猿を退治	犬が噛み殺す	犬が猿を食い 殺す	犬が獣を倒す	犬が殺す	犬が狸に食わ れる
	猫		大猫		大坊主 小坊主	猿		千年も経 た狒々	
	人身御供の廃止		犬も死ぬ／生贄の廃止	犬も死ぬ／村人はしあわせに暮す	村が安全になる	人御供の廃止	犬薬師様の由来		犬山神社に狸が残っている

## Ⅱ b 型 唱え言による謎解きと武力行使の複合型

83	77	69	68	67	61	57	48	31	発端		展開	結末					
鬼婆	猫諏訪様 酒吞童子	古狸	氏神様	貉氏神	古猿 神様	貉氏神	化け物	八幡様 化け物	霊格	祭祀者		生贄	退治者	援助者	退治法	正体	結果
	山奥	山の中／ 一谷の大 岩	いわつき 大風、作物が 駄目になる	信濃／お 宮	小屋	信濃／お 宮	山の神の 社	村／お堂									
		百姓のじゃま をする 野を荒らす		悪者が出る			村に災いがあ ると言い伝え										
	庄屋		金持ち														
	お嬢さん	娘	一人娘	娘		娘	娘	娘									
○	○	○	○	○	○	○	○	○									
鉄砲撃ち 猿師	侍	六部	下男	六部	猿師	六部	武士だっ た六部	修験者	退治者								
河内の国のじゅう へん太郎	ゴンベ	大津の国のこんこ ん	しつべえ太郎／下 男が助太刀する	信濃のしつべい太 郎	犬	信濃のしつべい太 郎	信濃国の権兵衛太 郎	近江の国の長浜の しつべえ太郎	援助者								
犬が鬼婆をつ かまえ、猿師 が撃つ	侍が酒吞童子 の腕を切る／ (犬が猫を威 嚇する)	犬と六部が狸 を退治する	犬が倒す	犬が貉の喉を 食い切り、六 部も刀で叩き 殺す	犬と猿師が猿 を退治する	犬は貉の喉を 食い切り、六 部は刀で切る	六部と犬が戦 う	犬が猿を食べ ／修験者が刀 で切る	退治法								
古貉		狸	怪物／ひ	貉			猿	大きな猿 の親分									
祝儀をもらう	酒吞童子が天上に上る		犬を丹波の国に帰す／娘 は下男の嫁になる／爺婆 に御馳走する／末長く辛 に暮す		山小屋の禁忌の由来		亡くなった犬を手厚く葬 る	修験者が堂守りになる	結果								

・ 14及び36は、Ⅱ型に属するが、語りにおいて唱え言の脱落したものか。  
 40は、仏教の立場から邪宗の淫祀を廃止したと語るもの。昔話の語り手の職掌を予想させる事例。

80	75	40	36	20	14		発端		展開		結末					
デズの沢	村／お宮	沼／村	山奥	村／お宮	山で迷う	場所	災厄	霊格	祭祀者	生贄	唱え言	退治者	援助者	退治法	正体	結果
	作が取れない、天罰がある		妻がさらわれる	不作、天罰				和尚大猫				三次郎	三河国しつべい太郎	犬が退治する 爺が鉄砲打つ	犬が猫を食う 犬がムジナを食う	犬は死ぬ／村が平らになる ／犬のお宮を建てる
ムジナ	化物	掃部長者の主／蛇沼の	猿	神様猿化物					人年貢	娘		武士	土佐大	犬が戦う／猿が死ぬ	古猿	宝物をさらう安楽に暮す
	化け物											夫		犬が追い／夫が刀で切る		蛇が元の掃部長者に戻る ／家督を継ぎ婿を取り末長く栄える

Ⅲ 混合型 唱え言は示されるが、武力行使によって化物を退治する話型

90	87	2				
お宮	泣き村	御堂	場所	災厄	発端	
		田荒れ、米の不作				
	氏神	蛇	霊格	祭祀者	生贄	
	庄屋					
十八になる娘	十八になる娘	娘				
○	○	○	唱え言	退治者	展開	
侍	侍	大里の勘太郎				
			援助者			
刀を突き差す	刀を打ち込む	刀で切る	退治法	正体	結末	
古狸	古い狸	蛇				
生贄の廃止		倒す	結果			

## 昔話「猿神退治」分析表 注

- 1 「45 猿神退治」『昔話研究資料叢書1 蒜山盆地の昔話』三弥井書店、一九六八年、二三三頁。
- 2 「69 大里の勘太郎」『昔話研究資料叢書9 陸奥二戸の昔話』三弥井書店、一九七三年、二七一頁。
- 3 「しっぺ太郎」川合勇太郎『青森県の昔話』津軽書房、一九七二年、四一六頁。
- 4 「しっぺ太郎」川合勇太郎『青森県の昔話』津軽書房、一九七二年、類話資料1、四一七頁。
- 5 「しっぺ太郎」川合勇太郎『青森県の昔話』津軽書房、一九七二年、類話資料1、四一七頁。
- 6 「人身御供」稲田浩一・立石憲司編『中国山地の昔話』三省堂、一九七四年、九八頁。
- 7 「47 猿神退治(A)」野村純一責任編集『酒田の昔話』酒田市、一九七六年、一三四頁。
- 8 「48 猿神退治(B)」野村純一責任編集『酒田の昔話』酒田市、一九七六年、一三七頁。
- 9 「49 猿神退治(C)」野村純一責任編集『酒田の昔話』酒田市、一九七六年、一四〇頁。
- 10 「9 猿の経立」柳田国男編『日本昔話記録2 岩手県上閉伊郡昔話集』三省堂、一九七三年、三二頁。
- 11 「犬こむがし」野村敬子編『資料昔話2 1 真室川の昔話』桜楓社、一九八一年、一三〇頁。
- 12 「79 化けもの話」武田正編『昔話研究資料叢書10 飯豊山麓の昔話』三弥井書店、一九七三年、三一八頁。
- 13 「78 人身御供の話(猿神退治)」木正谷明編『金の瓜』桜楓社、一九七四年、二〇七頁。
- 14 「猿神退治(しっぺい太郎)」白田甚五郎監修・野村純一、野村敬子編『五分次郎』桜楓社、一九七一年、四三頁。
- 15 「51 猿神退治」稲田浩一編『丹波和知の昔話』三弥井書店、一九七一年、九四頁。
- 16 「猿神退治」白田甚五郎監修・石川純一郎編『河童火やろう』桜楓社、一九七二年、七二頁。
- 17 「1 ひひ猿退治の話へ猿神退治」①テ「なんと昔があったげな 上巻」岡山民話の会、一九六四年、一八六頁。
- 18 「猿神退治」稲田浩二・稲田和子編『日本昔話百選』三省堂、一九七一年、二五頁。
- 19 「29 猿神退治」白田甚五郎監修・国学院大学説話研究会編『津軽百話』桜楓社、一九八五年、五七頁。
- 20 「38 猿神退治」野村純一・野村敬子編『雀の仇討―萩野才兵衛昔話集／増補改訂―』東北出版企画、一九七六年、一三〇頁。
- 21 「18 ひひ神退治(原題 ひひ退治)」稲田浩二編『昔話の年輪80選』筑摩書房、一九八九年、七七頁。
- 22 「猿神退治」稲田浩二編『日本の昔話29 信濃の昔話』日本放送出版協会、一九八〇年、九七頁。



- 23 「ひび退治」 稲田浩二編『日本の昔話』 武蔵の昔話』 日本放送出版協会、一九七九年、六四頁。
- 24 「猿神退治」 稲田浩二監修・坂本正夫編『日本の昔話』 土佐の昔話』 日本放送出版協会、一九七九年、二六二頁。
- 25 「座頭のお化け退治」 稲田浩二監修・柴田成浩他編『日本の昔話』 西瀬戸内の昔話』 日本放送出版協会、一九七八年、一〇八頁。
- 26 「人身くう」 稲田浩二監修・遠野民話同好会編『日本の昔話』 遠野の昔話』 日本放送出版協会、一九七五年、一七六頁。
- 27 「猿神退治」 稲田浩二監修・立石憲利、前田東雄編『日本の昔話』 美作の昔話』 日本放送出版協会、一九七四年、一七三頁。
- 28 「人身御供」 稲田浩二監修・立石憲利、前田東雄編『日本の昔話』 美作の昔話』 日本放送出版協会、一九七四年、一八五頁。
- 29 「狸神退治」 稲田浩二監修・笠井典子編『日本の昔話』 近江の昔話』 日本放送出版協会、一九七三年、二二五頁。
- 30 「2 しつぺい太郎」 鶴尾能子編『昔話研究資料叢書』 茨城の昔話』 三弥井書店、一九七二年、四一頁。
- 31 「しつぺえ太郎」 稲田浩二監修・佐々木徳夫編『日本の昔話』 永浦誠喜翁の昔話』 日本放送出版協会、一九七五年、一二五頁。
- 32 「猿神退治 (A)」 佐々木達司・青森県児童文学研究会編『青森県昔話集成 上巻』 一九七一年、一六一頁。
- 33 「猿神退治 (A)」 類話1、佐々木達司・青森県児童文学研究会編『青森県昔話集成 上巻』 一九七一年、一六二頁。
- 34 「猿神退治 (A)」 類話2、佐々木達司・青森県児童文学研究会編『青森県昔話集成 上巻』 一九七二年、一六三頁。
- 35 「猿神退治 (A)」 類話3、佐々木達司・青森県児童文学研究会編『青森県昔話集成 上巻』 一九七二年、一六二頁。
- 36 「猿神退治 (A)」 類話4、佐々木達司・青森県児童文学研究会編『青森県昔話集成 上巻』 一九七二年、一六二頁。
- 37 「猿神退治 (B)」 佐々木達司・青森県児童文学研究会編『青森県昔話集成 上巻』 一九七一年、一六三頁。
- 38 「猿神退治 (B)」 類話1、佐々木達司・青森県児童文学研究会編『青森県昔話集成 上巻』 一九七一年、一六四頁。
- 39 「シツペエ太郎」 大友儀助編『新庄のむかしばなし』 新庄市教育委員会、一九七一年、八五頁。
- 40 「掃部長者」 平野直編『すねこ・たんばこ』 銀河社、一九七六年、一五九頁。
- 41 「しつぺい太郎」 水沢謙二編『おばの昔ばなし』 野島出版、一九六六年、四一〇頁。
- 42 「ごつと貉と娘」 山下久男編『全国昔話資料集成』 加賀昔話集』 岩崎美術社、一九七五年、五五頁。

- 43 「41 蜘蛛の化け物」その一、柳田国男編『日本昔話記録11 鹿児島県鹿児島昔話集』三省堂、一九七三年、一三八頁。
- 44 「41 蜘蛛の化け物」その二、柳田国男編『日本昔話記録11 鹿児島県鹿児島昔話集』三省堂、一九七三年、一四〇頁。
- 45 「43 三太郎犬」柳田国男編『日本昔話記録11 鹿児島県鹿児島昔話集』三省堂、一九七三年、一四二頁。
- 46 「化け猫とさむらい」佐々木達司編『津軽西北のむがしこ』文芸協会出版、一九七八年、一〇七頁。
- 47 「20 熊井勇軒」佐々木喜善『老嫗夜譚』郷土研究社、一九二七年、六七頁。
- 48 「49 化け物の話」柳田国男編『日本昔話記録3 福島県磐城地方昔話集』三省堂、一九七四年、五七頁。
- 49 高田吉人『北安曇郡郷土誌稿 第二輯』郷土研究社、一九三〇年、八四頁。
- 50 「23 人身御供」土橋里木編『続甲斐昔話集』郷土研究社、一九三六年、一二六頁。
- 51 「16 丹波のお作文」土橋里木編『甲斐昔話集』郷土研究社、一九三〇年、四八頁。
- 52 内田邦彦『津軽口碑集』郷土研究社、一九二九年、二八頁。
- 53 「150 人身御供」伊藤曙覧編『昔話研究資料叢書6 越水射水の昔話』三弥井書店、一九七一年、二六九頁。
- 54 「89 化物退治」福岡県教育会編『全国昔話資料集成11 福岡昔話集（原題「福岡県童話」）』岩崎美術社、一九七五年、一〇七頁。
- 55 「57 ジンゲンタ様の狒々退治」柳田国男編『日本昔話記録6 岡山県御津郡昔話集』三省堂、一九七四年、九〇頁。
- 56 「48 犬山神社の狸」福田晃・三原幸久編『昔話研究資料叢書 第13巻 因幡智頭の昔話』三弥井書店、一九七九年、一八三頁。
- 57 「28 しっぺい太郎」鈴木暹編『全国昔話資料集成30 伊豆昔話集』岩崎美術社、一九七九年、四九頁。
- 58 「35 弓の上手な若者」大橋和華編『全国昔話資料集成25 恵那昔話集』岩崎美術社、一九七七年、一〇九頁。
- 59 「ロ 兵坊太郎」高木敏雄編『日本伝説集』宝文館出版、一九七二年、一六六頁。
- 60 「ハ 犬薬師様」高木敏雄編『日本伝説集』宝文館出版、一九七二年、一六六頁。
- 61 「ニ 猿神退治」高木敏雄編『日本伝説集』宝文館出版、一九七二年、一六八頁。
- 62 「63 猿神退治」土橋里木編『全国昔話資料集成16 甲州昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一五二頁。
- 63 「8 地蔵と旅人」関敬吾編『全国昔話資料集成21 島原半島昔話集』岩崎美術社、一九七七年、二九頁。
- 64 「21 和泉の錦友（猿神退治）」桂井和雄編『全国昔話資料集成23 土佐昔話集』岩崎美術社、一九七七年、六九頁。

- 65 「猿神退治」谷垣桂蔵編『全国昔話資料集成27 但馬昔話集』岩崎美術社、一九七八年、一八三頁。
- 66 「猿神退治」類話1、浜坂町清富の宮座行事の由来、谷垣桂蔵編『全国昔話資料集成27 但馬昔話集』岩崎美術社、一九七八年、一八四頁。
- 67 「28 しつぺい太郎」鈴木遍編『全国昔話資料集成30 伊豆昔話集』岩崎美術社、一九七九年、四九頁。
- 68 「44 しつぺえ太郎」上野勇編『全国昔話資料集成13 利根昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一一〇頁。
- 69 「66 猿神退治1」村岡浅夫編『全国昔話資料集成14 芸備昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一三七頁。
- 70 「66 猿神退治2」村岡浅夫編『全国昔話資料集成14 芸備昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一三七頁。
- 71 「66 猿神退治3」村岡浅夫編『全国昔話資料集成14 芸備昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一三八頁。
- 72 「109 ドウヘイ太郎」佐久間惇一編『全国昔話資料集成2 北蒲原昔話集』岩崎美術社、一九七四年、一六七頁。
- 73 「66 大寝入りの寝兵衛」武藤鉄城編『全国昔話資料集成12 角館昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一〇九頁。
- 74 「31 猿神退治」花園大学伝承文学研究会編『伯耆溝口町昔話集』一九八二年、四九頁。
- 75 「27 猿神退治」野村純一・野村敏子編『萩野才兵衛昔話集』一九七〇年、六八頁。
- 76 「90 猫又の話」真鍋真理子編『昔話研究資料叢書 第11巻 越後黒姫の昔話』三弥井書店、一九七三年、二八〇頁。
- 77 「91 酒呑童子」真鍋真理子編『昔話研究資料叢書 第11巻 越後黒姫の昔話』三弥井書店、一九七三年、二八二頁。
- 78 「52 猿神退治」稲田浩二・立石憲利編『昔話研究資料叢書 第8巻 奥備中の昔話』三弥井書店、一九七三年、二二七頁。
- 79 「77 猿神退治」川端豊彦・金森美代子編『昔話研究資料叢書 第16巻 房総の昔話』三弥井書店、一九八〇年、二二五頁。
- 80 「12 デズの沢のムジナ退治」岩瀬博編『昔話研究資料叢書 別巻3 賢女の語る昔話』三弥井書店、一九七五年、一〇七頁。
- 81 「32 猿神退治」黄地百合子他編『昔話研究資料叢書 第14巻 南加賀の昔話』三弥井書店、一九七九年、一七〇頁。
- 82 「猿神退治」白田甚五郎監修・野村純一編『笛吹き聲』桜楓社、一九六八年、一〇三頁。
- 83 「猿神退治」白田甚五郎監修・佐久間惇一編『絵姿女房』桜楓社、一九七三年、五六頁。
- 84 「58 千松どのの狒狒猿退治」京都府総合資料館編『丹後伊根の昔話』白川書院、一九七四年、一三三頁。
- 85 「14 猿神退治」丸山久子編『昔話研究資料叢書3 佐渡国仲の昔話』三弥井書店、一九七二年、七六頁。
- 86 「21 信濃のきんやあにゃあ」丸山久子編『昔話研究資料叢書3 佐渡国仲の昔話』三弥井書店、一九七二年、一〇〇頁。

- 87 「化物退治」稲田浩一・福田晃編『昔話研究資料叢書14 大山北麓の昔話』三弥井書店、一九七〇年、三三八頁。
- 88 「61 化物退治」類話1、稲田浩一・福田晃編『昔話研究資料叢書14 大山北麓の昔話』三弥井書店、一九七〇年、三四〇頁。
- 89 「61 化物退治」類話2、稲田浩一・福田晃編『昔話研究資料叢書14 大山北麓の昔話』三弥井書店、一九七〇年、三四〇頁。
- 90 「61 化物退治」類話3、稲田浩一・福田晃編『昔話研究資料叢書14 大山北麓の昔話』三弥井書店、一九七〇年、三四一頁。
- 91 「62 猿退治」稲田浩一・福田晃編『昔話研究資料叢書14 大山北麓の昔話』三弥井書店、一九七〇年、三四一頁。